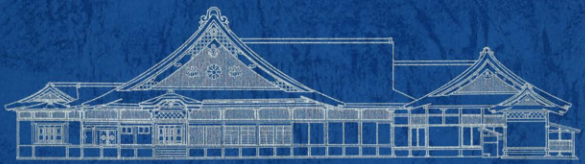
仙台市文化財調査報告書第348集

仙台城跡9

－平成20年度　調査報告書－



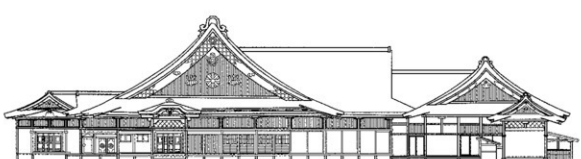
2009年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第348集

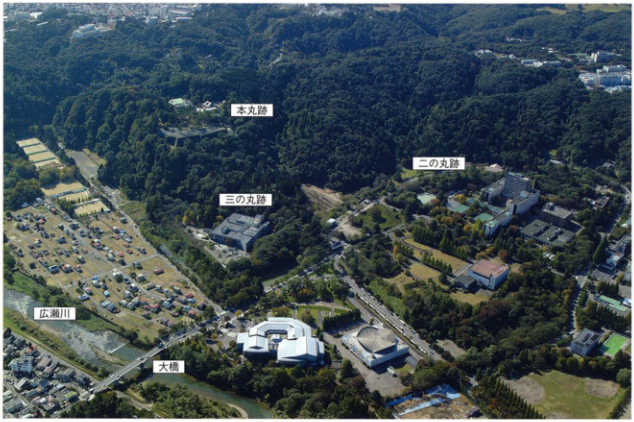
仙台城跡9

－平成20年度　調査報告書－



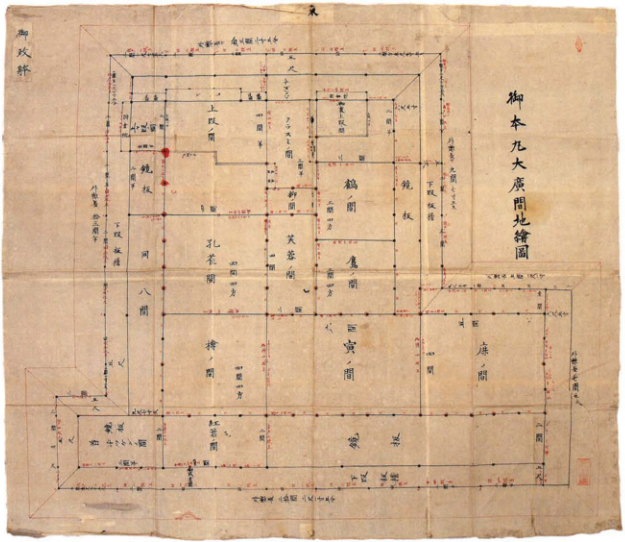
2009年3月

仙台市教育委員会

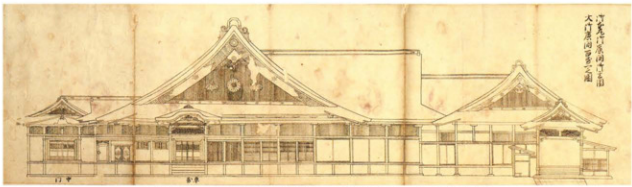


仙台城跡鳥瞰写真（北東より・2005年10月撮影）

仙台城跡航空写真（北が上・2002年１月撮影・赤ラインは国史跡指定範囲）



御本丸大広間地絵図　（財）斎藤報恩会蔵



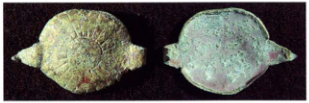
仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿絵図（大広間部分）　仙台市博物館蔵

第20次　本丸大広間跡調査区全景（東から）

第20次　３区基本層序（北から）

第20次　３区広縁部勾配状況（北東から）

第20次　１区砂礫層検出状況（南東から）



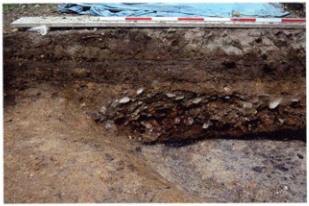
第20次　３区出土金銅金具（No.４）縮尺約1/1

第20次　３区出土銅製飾金具（No.25）縮尺約1/1

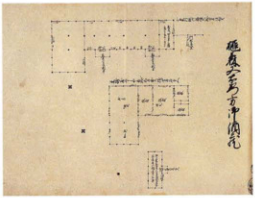
第21次　造酒屋敷跡調査区全景（北西から）

1区全景（南東から）

2区全景（北西から）



第21次　1区基本層序（北東から）



仙台藩封内神社仏閣等作事方役所修繕ニ属スル場所調（酒蔵部分）宮城県図書館蔵

序　　文

慶長５年、初代仙台藩主伊達政宗が仙台城の縄張り始めを行い、城下のまちづくりを行ってから、四百年余りが過ぎ、仙台市は人口100万人を超える東北地方の中心都市となりました。市の中心部が、近代的なビルの林立する都市化の波にさらされていく中にあって、仙台城跡は市街地から最も近い緑豊かな場所として、青葉城や天守台といった愛称で、市民から親しまれてきました。

遺跡としての仙台城跡は、平成９年度から15年度まで行われた本丸石垣修復工事に伴う発掘調査や、平成13年度から始められた国庫補助による学術調査によって、中世の山城であった千代城期や、伊達氏の居城期の内容が徐々に明らかとなってきました。

これらの発掘で新たに判明した石垣の変遷や、ヨーロッパ産のガラス器や金銅金具等の貴重な出土品などから、仙台城跡は我が国の近世を代表する城郭遺跡であることが評価され、平成15年８月、国の史跡に指定されました。これを契機として、仙台城跡の保存管理及び整備に向けた、「仙台城跡整備基本計画」が策定される等、仙台城跡の様々な魅力を引き出すための取り組みが始まっております。

こうした中で、平成20年度は本丸御殿の主要な建物である大広間跡を中心とした発掘調査、清水門南側の造酒屋敷跡の発掘調査、本丸北西壁の石垣測量調査が行われました。大広間跡に関する調査は今年度で８年目を迎え、大広間の建物内部における礎石跡を発見し、各部屋の間取りや位置など、大広間の全容を解明する上で大きな成果が得られました。

清水門付近の造酒屋敷跡の調査では、屋敷に伴うと考えられる礎石跡や溝跡などの遺構を発見することができました。

今回の調査事業及び調査報告書の刊行にあたり、多くの方々からご指導、ご協力を賜りましたことを深く感謝申し上げますとともに、本報告書が研究者のみならず市民の皆様に広く活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

平成21年３月

仙台市教育委員会
教育長　荒　井　　崇

例　　言

1．本書は、仙台城跡の平成20年度遺構確認調査の報告書である。
2．本調査は、国庫補助事業である。
3．本報告書の作成にあたり、次のとおり分担した。
　本文執筆は、佐藤洋との協議のもとに、在川宏志が行った。
　陶磁器ほかの観察については佐藤が行った。
　編集は、佐藤・在川がこれにあたった。
4．土壌サンプル分析は（株）加速器分析研究所、石垣測量は佐野コンサルタンツ（株）に委託した。
5．本書中の地形図は、国土地理院発行の１：50,000『仙台』と１：10,000地形図『青葉山』の一部を使用している。
6．遺構図の平面位置図は平面直角座標系X（日本測地系）を用いており、文中で記した方位角は真北線を基準とし、高さは標高値で記した。
7．遺構略号は、全遺構に通し番号（国庫補助調査による検出遺構番号：KS・）を付した。
8．本報告書の土色については、『新版標準土色帳』（古山・佐藤：1970）を使用した。

目　　次

序　　文
例　　言
Ⅰ　はじめに……1
Ⅱ　仙台城跡の概要……3
Ⅲ　調査計画と実績……6
Ⅳ　第20次調査
　1．調査目的及び調査経過……8
　2．旧地形及び基本層序……9
　3．検出遺構……10
　4．出土遺物……33
　5．理化学分析……38
　6．まとめ……40
Ⅴ　第21次調査
　1．調査目的及び調査経過……43
　2．旧地形及び基本層序……44
　3．検出遺構……45
　4．出土遺物……59
　5．まとめ……73
Ⅵ　第22次調査……74
Ⅶ　総括……78

Ⅰ　はじめに

平成20年度は、仙台城跡遺構確認調査第２次５カ年計画の３年次にあたり、下記の体制で臨んだ。（敬称略、順不同）

調査主体　仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課仙台城史跡調査室）

発掘調査、整理を適正に実施するために調査指導委員会を設置し、指導・助言を受けた。

委員長　斎藤　鋐雄（宮城県農業短期大学名誉教授　近世史）〔平成20年７月まで〕
岡田　清一（東北福祉大学教授　中世史）〔平成20年10月から〕

副委員長　岡田　清一（東北福祉大学教授　中世史）〔平成20年９月まで〕
半川　新（東北大学東北アジア研究センター教授　近世史）〔平成20年10月から〕

委員　西　和夫（神奈川大学教授　建築史）
北垣聰一郎（石川県金沢城調査研究所長　石垣・城郭研究）
藤沢　敦（東北大学特任准教授　考古学）
岡崎　修子（（財）仙台ひと・まち交流財団　仙台市片平市民センター館長）

仙台城跡調査指導委員会開催日

第20回：平成20年７月４日　第20次調査中間報告
第21回：平成20年10月10日　第20次調査最終報告・第21次調査中間報告・岩林城跡第９次調査中間報告・追廻調査報告・本丸大広間跡調査成果中間報告
第22回：平成21年２月24日　第22次調査報告・岩林城跡第９次調査最終報告・本丸大広間跡調査成果報告・平成21年度調査計画

発掘調査及び遺物整理にあたり、次の方々からご協力をいただいた。

宮城県護国神社
資料提供　（財）斎藤報恩会、仙台市博物館

さらに、下記の諸機関の方々から御教示・御協力をいただいた。

山田晃弘（宮城県教育庁文化財保護課）

調査担当	文化財課	課長	田中　則和
		仙台城史跡調査室長	工藤　哲司
		主査	佐藤　洋
		主任	熊谷　俊朗
		主任	佐藤　淳
		主任	渡部　紀
		文化財教諭	在川　宏志

調査および整理参加者　相澤　守、安部文子、大野美津枝、遠藤誠子、小野寺美智子、菅家婦美子、高野誠一、竹内芳江子、対馬悦子、菱沼みのり、堀内泰子、三嶋典子、結城麓子、吉田純絽子、渡邉　優

城　館　跡				遺　跡					
1	集合城跡	15	茂庭西館跡	29	鹿落坂遺跡	43	百合窪板碑群	58	山室金草遺跡
	大膳記念物自然林（国指定分）	16	茂庭ほんとう城跡	30	移転荒遺跡	44	四郎坂念仏碑	59	芦沢遺跡
		17	笠沢館跡	31	五城中学校北遺跡	45	宅地造成跡群	60	山口遺跡
2	広瀬城跡	18	浄野城跡	32	与兵衛沼遺跡	46	吉岡薬師堂板碑	61	下ノ沢沼遺跡
3	北目城跡	19	荒辺館跡				その他の中・古世の主な遺跡	62	六反田遺跡
4	袋原跡	20	今泉城跡		包石・石碑	47	土田杉山頭遺跡	63	元袋遺跡
5	茂ヶ崎館	21	小僧（沢頭）館	33	経沢薬王寺の碑	48	柴野A遺跡	64	下ノ沢遺跡
6	小梁川城跡		寺院・墓所	34	聖吉寺薬師石祠と土塁	49	仙台元袋A墓跡	65	伊古田遺跡
7	郷六城跡	22	勤満院	35	諏不動尊文永十年板碑	50	カナクソ遺跡	66	王ノ塚遺跡
8	若狭城跡	23	柿子平墓	36	船穴の双碑	51	東小松遺跡	67	根屋敷遺跡
9	郷六御殿跡	24	磁ヶ神伊達家墓所	37	大蔵寺建武の碑	52	澤柳遺跡	68	大野田古墳群
10	松分館跡跡		寺　社	38	船六地武跡	53	御堂平遺跡	69	欠ノ上1遺跡
11	向日城跡	25	東照宮	39	男内石刻群	54	町田遺跡	70	高原台遺跡
12	谷地館跡	26	大崎八幡宮	40	岸平仙台大神宮の板碑	55	北前遺跡	71	八ッ山遺跡
13	茂原大館跡	27	亀岡八幡宮	41	馬越石塔	56	杉土手（貨集土手）		
14	茶屋跡	28	照宮塔比屋灯籠	42	蛇塚薬王碑群	57	土田上ノ台遺跡		

第１図　仙台城跡と周辺の遺跡

Ⅱ　仙台城跡の概要

1．仙台城跡の地理的環境と現況

仙台城跡は仙台市街地の西方に位置し、青葉山丘陵及びその麓の河岸段丘部分を中心に城域が形成されている。青葉山丘陵は東を流れる広瀬川に向かい迫り出し、広瀬川とその支流の竜ノ口渓谷の浸食により高さ70mほどの断崖を形成しており、その丘陵上の平場（標高115～117m）に仙台城の本丸は位置する。本丸の規模は、東西245m、南北267mを計り、南側は落差約40mの竜ノ口渓谷、東側は広瀬川に落ちる高さ約70mの断崖に守られた天然の要害となっており、比較的傾斜の緩やかな本丸北側には約17mの高さを有する石垣が築かれている。尾根続きとなっている本丸西側には「御裏林」と呼ばれた森林が広がり、貴重な自然が残るために国指定天然記念物「青葉山」となっている。御裏林では、３条の大規模な堀切などが確認されている。本丸跡の麓部の河岸段丘には二の丸跡と三の丸跡が位置しており、二の丸跡は仙台上町段丘面、三の丸跡は仙台下町段丘面と高度を下げている。蛇行する広瀬川に西から二本の大きな沢が走り、この沢に挟まれ御裏林を背にした場所に二の丸跡が位置する。二の丸跡の東側に位置する大手門跡付近には、約９mの高さの石垣が残り、その南側には大手門脇櫓が昭和42年（1967）に復元されている。さらに低位に位置する三の丸跡は、外郭を水堀と土塁に囲まれ、門跡付近には石垣が残存している。三の丸跡の東側、河岸段丘の最も低位に位置する追廻地区の広瀬川の岸部分には、260mに及ぶ石垣が残存している。

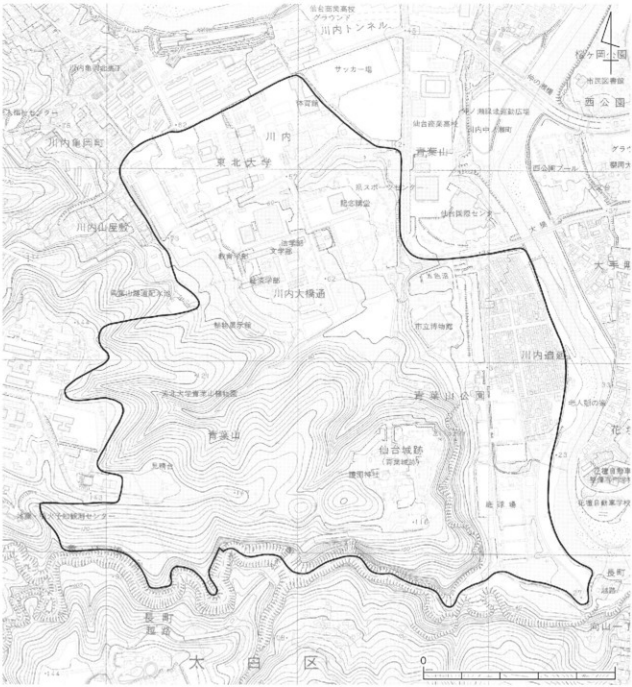
2．仙台城跡の歴史的背景

仙台城は、初代仙台藩主伊達政宗によって造営された城である。関ヶ原の戦い直後の慶長７年（1600）12月24日、城の縄張りが開始され、翌年１月から普請に着手、工事は慶長７年（1602）５月には一応の完成をみたとされている。築城当初は「山城」である本丸を中心とする城郭であったが、政宗の死後、二代藩主忠宗が山麓部に二の丸の造営を開始する。寛永年間以降はこの二の丸が藩政の中心となり、三の丸・勘定所・重臣武家屋敷などが一体となって城域を形成していた。残された絵図などからみると、本丸への登城路は、大手門を通って中門を経て本丸詰門に至るものと、巽門、清水門、沢門を通るものがある。

絵図や文献などによれば（註１）、本丸には詰門を入った東側に天皇家や将軍家を迎えるための御成門があり、華麗な障壁画や欄間彫刻に彩られた大広間を中心とする御殿建物群が存在していた。東側の城下を見下ろす崖面に造られた懸造、さらには能舞台・書院など、上方から招いた当代一流の大工棟梁・工匠・画工等によって造られた桃山文化の集大成といえる建物群が威容を誇っていたと考えられている。西脇櫓・東脇櫓・長櫓・巽櫓は三重の櫓であったが、正保３年（1646）４月の地震によって倒壊したとする記事がみられ（註２）、以後復興されずに明治を迎えたものとされている。

本丸の建物群は江戸時代の度重なる災害に加え、明治維新後の取り壊しなどにより失われ、二の丸の御殿群も明治15年（1882）の大火によって焼失した。唯一仙台城の面影を伝えていた国宝の大手門及び脇櫓も昭和20年（1945）７月、太平洋戦争の際の米軍による空襲によって焼失した。現在では、本丸北壁や随所に点在する石垣、本丸西側の堀切、三の丸の周囲を囲む堀と土塁などが往時の仙台城を偲ぶ貴重な遺構となっている。また、伊達氏による仙台城築城以前にこの地域をおさめていた国分氏の居城「千代城」に関する16世紀代の文献記録も残っており（註３）、中世山城が存在していた可能性も指摘されている。

第２図　焼失以前の大手門と脇櫓（1935年頃）



第３図　仙台城跡（現況地形図と遺跡範囲・１／10,000）

第４図　仙台城本丸現存（Ⅲ期）石垣・
解体修復工事前（北西から）

第５図　仙台城本丸現存（Ⅲ期）石垣・
解体修復工事跡（北東から）

3．仙台城跡の発掘調査

仙台城跡のこれまでの調査には、昭和58年（1983）から継続的に実施されている東北大学構内の施設整備に伴う二の丸跡の発掘調査（註４）と、仙台市博物館の新築工事に伴って昭和58・59年（1983・1984）に実施された三の丸跡の発掘調査（註５）があり、本丸跡では石垣修復工事に伴う発掘調査が第１次発掘調査である。

本丸北壁の石垣は昭和30年代から変形が目立ち始め、防災上の観点から石垣修復工事が平成9年（1997）度から実施されている。（註６）この石垣修復工事に伴う本丸1次発掘調査は、平成９年（1997）７月から石垣解体に先行する事前調査と、翌年10月から開始した解体工事と並行する発掘調査からなっている。解体工事は平成12年（2000）９月に石材9,106石と、Ⅱ期石垣124石の解体をもって終了し、石積工事を同年12月から開始し、平成16年（2004）３月に工事が終了した。

石垣解体修復に伴う発掘調査により、現存石垣（Ⅲ期石垣）背面より二時期にわたる旧石垣（Ⅰ期・Ⅱ期石垣）が検出され、石垣基部の調査や石垣断面構造の記録化により、Ⅰ期からⅢ期までの石垣の変遷や構造が明らかになった。石材調査では各種の刻印や朱書、墨書などを多数発見し、矢穴や石材加工の変化も確認されている。石垣は、表面の「石積み」様式の変化とともに、背面の土木工法の変容も顕著であり、石垣背面の土木工事痕跡の考古学的な手法による層位的調査と、盛土の重複関係や遺物の分析からみた石垣変遷を、文献調査との照合により時期区分されている。築城期には、旧地形や中世山城「千代城」の縄張りを利用して斜面を切り土しながら石垣を構築（Ⅰ期）し、元和２年（1616）の地震によりこの石垣が倒壊した後、築城期の石垣形状を一新する修復工事が行われて石垣が再構築（Ⅱ期）され、その後、寛文８年（1668）の地震によりこのⅡ期石垣も倒壊し、現存石垣に全面改築（Ⅲ期）されたと考えられている。（註７）

註１　『仙台城下絵図』（寛文4年（1664）宮城県図書館蔵）や『青山公遺領域郭永写之略図』（四代藩主綱村時代、17世紀後半（推定）宮城県図書館蔵）には本丸御殿の建物群が描かれ、『貞山公治家記録』にも大広間の記事が散見できる。建物群の考察については、佐藤巧「仙台城の建築」（仙台市教育委員会『仙台城』1967）・『仙台城館および周辺建物復元考』（仙台市博物館『調査研究報告第６号』1986）・伊東信雄『仙台城の歴史』・三原良吉『仙台城年表』（仙台市教育委員会『仙台城』1967）などがある。

註２　義山公治家記録、正保６年（1646）４月28日條

註３　貞山公治家記録、慶長５年（1600）12月24日條

註４　東北大学埋蔵文化財調査年報１～17（東北大学埋蔵文化財調査センター1985～2002）

註５　発掘調査報告書『仙台城三ノ丸跡』（仙台市教育委員会1983）

註６　仙台城跡石垣修復等調査指導委員会（平成13年度に仙台城石垣修復工事専門委員会と改編）資料・議事録（仙台市建設局1997～2003）

註７　本丸１次発掘調査成果に係る主な参考文献　金森安孝『仙台城本丸跡の発掘調査』（『考古学ジャーナル442号』1999）金森『仙台城本丸の発掘と出土陶磁』（『貿易陶磁研究№19』1999）金森・我妻仁『仙台城本丸跡　築城期及び修復石垣の発見』（『考古学ジャーナル456号』2000）我妻『仙台城本丸跡石垣の背面構造と変遷』（『宮城考古学第２号』2000）金森『仙台城本丸跡石垣修復に伴う発掘調査』（『日本歴史第626号』2000）我妻『仙台城本丸跡石垣における階段状石列の構造と役割（予察）』（『宮城考古学第３分』2001）金森・我妻『仙台城本丸跡Ⅲ期石垣の発掘調査－現存石垣の構築技術－』（『考古学ジャーナル474号』2001）金森・根本光一『仙台城石垣の石材調査』（『考古学ジャーナル484号』2002）伊藤隆『仙台城石垣の石材調査』（東北芸術工科大学『石垣普請の風景を読む』2003）

第６図　本丸北壁石垣北東角部
旧石垣（Ⅰ・Ⅱ期）検出状況（北東から）

第７図　本丸北壁石垣背面
階段状石列検出状況（北西から）

Ⅲ　調査計画と実績

平成20年度は、仙台城跡遺構確認調査の第２次５カ年計画３年次にあたる。平成17年度までの第１次５ヵ年計画では、国指定史跡仙台城跡の全体像を把握することを目標として、遺構の遺存状況、種類、規模、配置等の確認を目的とする遺構確認調査と、石垣の破損状況や石積みの特徴を確認することを目的とする石垣現況調査、測量調査などを実施してきた。また、本丸大広間跡や巽櫓跡などの発掘調査、本丸での遺構現況調査などを行ってきた。

第１表　これまでの調査実績

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第１次	大広間跡（１次）	185㎡	平成13年９月17日～12月27日
第２次	清水門跡付近石垣測量	210㎡（立面）	平成13年11月30日～平成14年２月13日
第３次	大善士土手跡・御守殿跡・懸造跡	1,400㎡	平成14年５月20日～平成15年１月31日
第４次	巽櫓跡	110㎡	平成14年５月20日～８月31日
第５次	大広間跡（２次）	470㎡	平成14年８月５日～12月20日
第６次	仙台城跡（全域）	約145ha	平成15年５月７日～８月８日
第７次	大広間跡（３次）	258㎡	平成15年８月４日～12月25日
第８次	登城路跡	58㎡	平成15年11月12日～12月25日
第９次	広瀬川護岸石垣測量	50㎡（立面）	平成15年12月９日～平成16年２月５日
第10次	大広間跡（４次）	397㎡	平成16年７月20日～12月24日
第11次	登城路跡・広瀬川護岸石垣測量	349㎡（立面）	平成16年12月18日～平成17年３月31日
第12次	大広間跡（５次）	446㎡	平成17年５月26日～10月19日
第13次	三の丸堀跡（１次）	86㎡	平成17年11月１日～12月22日
第14次	中門北側・広瀬川護岸石垣測量	627㎡	平成18年１月16日～１月20日
第15次	大広間跡（６次）	311㎡	平成18年６月１日～８月４日
第16次	三の丸堀跡（２次）	522㎡	平成18年９月１日～11月30日
第17次	大広間跡（７次）	263㎡	平成19年５月28日～８月３日
第18次	三の丸堀跡（３次）	468㎡	平成19年９月１日～11月26日
第19次	本丸北西壁石垣測量（１次）	425㎡（立面）	平成20年１月16日～１月18日

第２次５カ年計画では、引き続き、国指定史跡仙台城跡における全体像の把握を目的として、遺構確認調査と石垣現況調査、測量調査、絵図等の資料調査などを実施する予定である。今年度は、本丸大広間周辺及び造酒屋敷跡周辺における遺構確認調査、本丸北西壁石垣の測量調査を実施した。発掘調査費については総経費20,666千円、国庫補助額10,033千円との内示を受けたことから、以下の調査計画を立案した。

第２表　調査計画表

	調査地区	調査面積	調査期間
第20次	大広間跡（８次）	200㎡	平成20年５月８日～８月31日
第21次	造酒屋敷跡（１次）	160㎡	平成20年９月１日～10月31日
第22次	本丸北西壁石垣測量（２次）	448㎡（立面）	平成20年12月15日～平成21年３月31日

これまで、本丸跡では７次にわたる調査により、仙台城本丸御殿の中心的建物である大広間跡の礎石跡や雨落ち溝跡などを検出し、大広間建物跡の位置及び規模（東西33.5m、南北26.3m）を確認した。また、大広間跡の西側に位置する御成門跡の礎石や、そこから大広間跡に延びる通路跡と考えられる石敷き遺構を検出した。さらに大広間の北側では、大広間跡に先行する、石敷きを伴う礎石建物跡を一棟、確認した。

第20次調査は、大広間跡の内部南半における遺構確認等を目的として実施した。調査では、大広間跡の間取りに関わる礎石跡を検出した。さらに、これまでの調査で確認した礎石跡よりも小さい束柱の礎石および礎石跡も検出した。大広間の間取りや各部屋の配置を検討する上で重要な成果が得られた。また、大広間南東部の整地層直下より、礎石と考えられる遺構を検出した。遺物は、瓦・磁器・陶器・銅釘などが出土した。

第21次調査は、清水門付近にあったとされる造酒屋敷跡の遺構確認を目的として実施した。屋敷跡の調査（１区・２区）では、屋敷に関わると考えられる礎石や溝跡、炉跡、集石遺構などを検出した。遺物は、瓦・磁器・陶

器・鉄製品などが出土した。

第22次調査は、本丸北西壁石垣E面の測量を行い、石積み状況を調査した。昨年度実施した第19次調査により、C面及びD面を既に測量している。第22次調査では約64mを測量調査し、石垣の図化作業を併せて行った。

第３表　調査実績表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第20次	大広間跡（８次）	248㎡	平成20年５月８日～７月31日
第21次	造酒屋敷跡（１次）	160㎡	平成20年８月26日～10月29日
第22次	本丸北西壁石垣測量（２次）	448㎡（立面）	平成20年12月24日～平成21年１月21日

第８図　仙台城跡遺構確認調査・調査区位置図（1／5000）

Ⅳ　第20次調査

1．調査目的及び調査経過

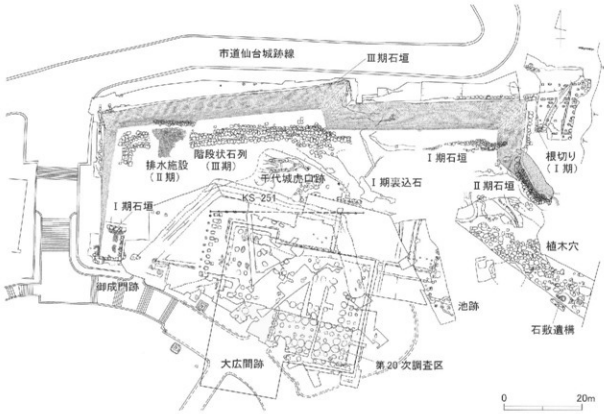
第20次調査は、大広間跡中央部の建物内部における遺構確認を目的として平成20年（2008）５月12日から同年７月31日まで実施した。調査面積は、青葉山公園として管理されている仙台市有地内の248㎡である。大広間跡に関する調査としては第８次にあたる。

調査目的は、大広間内部における遺構確認および大広間に先行する建物跡に関連する遺構の確認である。

調査区の設定や調査前の現況写真撮影の後、５月７日からフェンスを設置し、５月８日から重機による表土の除去作業を開始した。人力による遺構面の検出作業は５月12日から開始した。電気ケーブルや水道管を埋設した際の掘り方といった極めて新しい時期の撹乱の除去作業を行い、その壁面および平面の精査を行いながら明治時代以降の整地層であるⅡ層を除去した。Ⅱ層の精査時に１区から２区にかけて、南西から北東に延びる近現代の軌跡を検出した。その後、江戸時代の盛土層または整地層であるⅢ層上面で遺構検出作業を行った。調査区内をベルトを挟んで３箇所に分け、西からそれぞれ１～３区と呼称し調査を行った。

調査では、大広間にかかわる礎石および礎石跡を新たに45基検出した。このうち、これまでの調査で確認された礎石跡より小さい束柱の礎石および礎石跡を21基検出した。大広間の間取りや各部屋の配置を検討する上で重要な成果が得られた。また、大広間内部の整地層直下より、礎石と考えられる遺構１基を検出した。遺物は、磁器、陶器、土師質土器、銅釘、瓦などが出土した。

第20次調査は、平成20年３月23日の第19回仙台城跡調査指導委員会において、調査箇所や目的、方法について了承を得て実施した。平成20年７月４日の第20回仙台城跡調査指導委員会では、現地においてこれまでの調査成果と今後の進め方について指導を受けた。調査成果については、７月９日に記者発表、７月12日に現地説明会（300名参加）を実施し公表した。その後、調査区の埋め戻しやフェンス撤去等の作業を終え、７月31日に調査箇所を原状



第９図　仙台城本丸跡北部・大広間跡調査区位置図（1/1000）

に復した。

平成20年10月10日に第21回仙台城跡調査指導委員会を開催し、調査成果の最終的な確認を行った上で、本報告書を刊行するに至った。

第10図　調査前状況（東から）

第11図　調査前状況（南東から）

2．旧地形及び基本層序

大広間周辺の旧地形をみると、その北側前方に中世千代城の虎口跡が検出された尾根の張り出しがある（第12図）。この尾根線は、御成門跡付近から大広間跡の北西角部を通り北東方向へ延びるもので、大広間のある平場の地形は、本来東へ向けて緩やかに傾斜していたものと考えられる。

基本層は、Ⅰ層（現表土）、Ⅱ層（近代以降の整地層）、Ⅲ層（近世の整地層）、Ⅳ層（地山直上の旧表土層）、Ⅴ層（地山）に大別される（第４表）。以下、概要を記す。

Ⅱ層はa～d層に細分した。Ⅱa～c層は、近代以降の盛土層で特に１・２区に分布する。Ⅱd層は、大広間廃絶直後の盛土層で、Ⅱd層上面およびⅡc層上面で近代以降の轍跡を検出した。

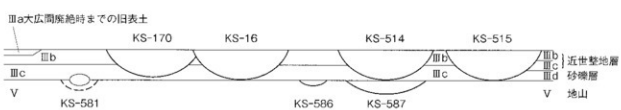
第12図　本丸跡北部平面模式図（旧地形と検出遺構）

Ⅲ層はa～d層に細分した。Ⅲa層は近世期の最も新しい層で、大広間が廃絶され、礎石が抜取られるまでの旧表土層である。３区の東側の一部で確認された（第19図参照）。Ⅲa層上面で礎石の抜取り穴を検出した。Ⅲb層は礎石および礎石跡の検出面である。第17次調査でのⅢa層に対応する。大広間内部の整地最上層と考えられる。３区東側拡張部で叩土（他の整地層に用いたものとは異なる土）を用い、叩き作業によって形成されたと考えられるⅢb1層（硬化層）を検出した。なお、第17次調査で、Ⅲa層が礎石抜取り穴の上にも堆積していると報告したが、堆積土については礎石抜取り後に再堆積したⅢ層に類似した近代以降の整地土であったので訂正する。Ⅲc層はⅢd層およびⅤ層直上の整地層である。17次調査でのⅢb層に対応する。１区では、同質の土で層を形成し、その下にⅢd層が見られるが、２区より東側では複数の盛土によって形成されており、そのドはⅤ層となる。大広間の東側は標高が低いことから、地面を平坦にするため、複数回にわたる盛土整地が行われたと考えられる。Ⅲd層は砂礫を主体とする層で、17次調査でのⅢd層に対応する。今回の調査区では１区から２区の西側に分布し（第37図参照）、１区南東部と２区では礫をほとんど含まない。２区中央部より東側では確認されなかった。

第４表　第20次調査基本層注記表

遺構番号	遺構・層位	土色		土質			備考
		土色No.	土色		粘質	しまり	
基本層序	Ⅰ	10YR4/4	褐色	シルト	有	無	現代の盛土。
	Ⅱa	2.5Y6/3	にぶい黄色	粘土	有	有	炭分を多量に含む。礫を少量含む。近現代の盛土。
	Ⅱb	10YR3/4	暗褐色	シルト	有	やや有	炭分、焼化粒、瓦片を多量に含む。
	Ⅱc	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	有	無	礫を少量含む。1・2区で確認。
	Ⅱd	7.5YR6/6	橙色	シルト	強	有	礫、粘土を含む。大広間跡廃絶直後の盛土か。上面に近代以降の轍跡。
	Ⅲa	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	有	有	礫、炭分、瓦片を含む。3×3層厚で確認。大広間跡の廃絶以降の盛土。
	Ⅲb	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	有	やや有	礫、粘土を含む。大広間跡の整地最上層。17次調査での第1層に対応。
	Ⅲc	10YR4/4	褐色	シルト	有	有	2層に細分。瓦片を含む。地山直上の整地層。17次調査での第3層に対応。
	Ⅲd	2.5Y5/4	黄褐色	砂礫	有	無	砂と径4～6cmの礫を多量に含む。西側1区南部に分布。17次調査での第6層に対応。
	Ⅳ	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	有	有	炭化物粒を多量に含む。大広間跡の外に分布。旧表土層。今年度の調査では確認されず。
	Ⅴ	2.5Y6/3	にぶい黄色	粘土	有	強	4層に細分。地山層。

Ⅳ層はⅤ層（地山）上面に堆積した旧表土層とみられ、第15次調査で大広間の外側で見られたが、大広間内部では確認できなかった。Ⅴ層は地山層で、風化した砂礫や鉄分を含む粘土層である。



第13図　第20次調査　大広間南東部基本層序模式図

3．検出遺構

(1) 大広間跡

今回の調査で新たに確認した礎石跡（KS-511～556）と以前の調査で確認した礎石跡（KS-2・3・6・7・16～18・20・170～172・193・210～212・230・480）について記述する。今回の調査で確認した礎石跡はKS-538・551の2基を除いて礎石が無く、根固めもしくは掘り方のみを検出した。根固め・掘り方の検出面はⅢb層上面である。なお、KS-519・520・532・533・541・542・549・550・556ではⅢa層上面で礎石の抜取り穴を検出した。

・**KS-480礎石跡**　1区の北東角で検出した。17次調査で北側部分を検出しており、平面形は東側を攪乱に切られているが、不整円形である。規模は東西130cm以上、南北155cmである。今回の調査で根固め石は確認されなかった。南側で東西67cm以上、南北27cm以上の礎石抜き取り穴を確認した。

・**KS-193礎石跡**　1区北部、KS-518の北約80cmで検出した。半面形は西側を攪乱に切られているが、ほぼ円形であったと推測される。規模は東西116cm以上、南北128cm以上である。根固め石の大きさは径5～15cmである。西側で東西44cm以上、南北76cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・**KS-2礎石跡**　3区北部、KS-30の西約30cmで検出した。平面形は不整形である。規模は東西117cm、南北53cm以上である。根固め石の大きさは径5～15cmである。東西80cm以上、南北40cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・**KS-6礎石跡**　3区北部、KS-2の西約40cmで検出した。平面形は円形である。規模は東西206cm、南北143cm以上である。根固め石の大きさは径5～20cmである。東西158cm、南北113cm以上の礎石抜取り穴を確認した。抜取り穴からレンガ片1点出土している。（「仙台城跡1」参照）

・**KS-20礎石跡**　3区北部、KS-6の西約10cmで検出した。平面形は不整円形である。東西61cm、南北75cm以上の礎石抜取り穴である。掘り方と根固め石は確認されなかった。西に隣接するKS-7に切られるが、構築時期に差はないと考えられる。

・**KS-7礎石跡**　3区北部、KS-20の西隣で検出した。平面形は円形である。規模は東西204cm、南北135cm以上である。根固め石の大きさは径5～15cmである。東西156cm、南北110cm以上の礎石抜き取り穴を確認した。西に隣接するKS-511に切られるが、構築時期に差はないと考えられる。

・**KS-511礎石跡**　3区北部、KS-7の西隣で検出した。平面形は円形である。規模は東西183cm、南北153cm以上である。根固め石の大きさは径5～15cmである。東西44cm以上、南北72cmの礎石抜き取り穴を確認した。KS-562より古い。

・**KS-512礎石跡**　2区北部、KS-511の西隣で検出した。半面形は南側を木の根に覆われているがほぼ円形である。規模は、東西198cm、南北140cm以上である。根固め石の大きさは径5～20cmである。礎石抜取り穴は確認されなかった。KS-562より古い。

・**KS-513礎石跡**　2区北部、KS-512の西約20cmで検出した。平面形は円形である。規模は東西201cm、南北

193cm以上である。根固め石の大きさは径５～15cmである。東西70cm、南北88cmの礫石抜取り穴を確認した。KS-563より古い。

・KS-514礫石跡　２区北部、KS-513の西約30cmで検出した。検出面はⅢb層上面である。平面形は大部分を攪乱に切られているが、不整円形である。規模は東西173cm以上、南北120cm以上である。根固め石の大きさは径５～15cmである。断面でのみ礫石抜取り穴を確認した。

・KS-515礫石跡　２区北部、KS-514の西約80cmで検出した。平面形は不整円形である。規模は東西212cm以上、南北191cmである。根固め石の大きさは径５～15cmである。東西156cm、南北110cm以上の礫石抜き取り穴を確認した。

・KS-516礫石跡　２区北部、KS-515の西隣で検出した。平面形は円形である。規模は東西200cm、南北196mである。根固め石の大きさは径５～20cmである。東西55cm、南北80cmの礫石抜き取り穴を確認した。

・KS-517礫石跡　１・２区を挟む、KS-516の西約10cmで検出した。平面形は楕円形である。規模は東西132cm以上、南北95cm以上である。根固め石の大きさは径５～10cmである。礫石抜取り穴は確認されなかった。

・KS-518礫石跡　１区北部、KS-193の南約80cmで検出した。平面形は大部分を攪乱に切られているが、ほぼ円形である。規模は東西90cm以上、南北174cm以上である。根固め石の大きさは径５～15cmである。礫石抜取り穴は確認されなかった。

・KS-3礫石跡　１区西部、KS-518の西約80cmで検出した。平面形は攪乱で大部分を切られているが、不整円形であったと推測される。東西65cm以上、南北72cm以上の礫石抜取り穴である。掘り方と根固め石は確認されなかった。

・KS-519礫石跡　３区東壁の西側で検出した。大広間畜縁の東辺に位置する。検出面はⅢa層上面である。平面形は不整円形であったと推測される。東西16cm以上、南北85cm以上の礫石抜取り穴である。掘り方と根固め石は確認されなかった。

・KS-520礫石跡　３区東部、KS-519の西約40cmで検出した。大広間広縁の東辺に位置する。検出面はⅢa層上面である。平面形は不整円形である。東西119cm以上、南北110cm以上の礫石抜取り穴である。掘り方と根固め石は確認されなかった。

・KS-521礫石跡　３区北部、KS-520の西約1.3mで検出した。平面形は不整円形である。東西25cm以上、南北16cm以上の掘り方の一部である。根固め石と礫石抜取り穴は確認されなかった。

・KS-522礫石跡　３区北部、KS-521の西約１mで検出した。平面形は不整円形である。規模は東西85cm以上、南北90cm以上である。根固め石は確認されなかった。東西65cm、南北80cmの礫石抜き取り穴を確認した。

・KS-523礫石跡　３区北部、KS-522の西約１mで検出した。平面形は、楕円形である。規模は東西54cm以上、南北78cm以上である。根固め石は確認されなかった。東西40cm以上、南北59cm以上の礫石抜取り穴を確認した。

・KS-211礫石跡　３区北部、KS-523の西約1.3mで検出した。平面形は円形である。規模は東西43cm以上、南北69cm以上である。根固め石は確認されなかった。東西33cm以上、南北51cm以上の礫石抜取り穴を確認した。

・KS-212礫石跡　２区北部、KS-211の西約1.3mで検出した。平面形は楕円形である。規模は東西78cm、南北48cmである。根固め石の大きさは径５～20cmである。礫石抜取り穴は確認されなかった。

・KS-524礫石跡　２区北部、KS-212の西約1.6mで検出した。平面形は攪乱に大部分切られているが、円形であったと推測される。東西55cm以上、南北39cm以上である。根固め石は確認されなかった。東西50cm以上、南北35cm以上の礫石抜取り穴を確認した。

・KS-525礫石跡　２区北部、KS-524の西約1.3mで検出した。平面形は楕円形である。規模は東西65cm以上、南北31cm以上である。根固め石は確認されなかった。東西42cm以上、南北20cm以上の礫石抜取り穴を確認した。

・KS-526礫石跡　２区北部、KS-525の西約1.3mで検出した。平面形は攪乱に大部分切られているが、円形であったと推測される。東西35cm以上、南北49cm以上の掘り方の一部である。根固め石と礫石抜取り穴は確認されなかった。

・KS-527礎石跡　2区北部、KS-526の西約1.5mで検出した。平面形は不整円形である。規模は東西83cm、南北126cmである。根固め石の大きさは径5～20cmである。礎石抜取り穴は確認されなかった。

・KS-528礎石跡　1・2区を狭む、KS-527の西約80cmで検出した。平面形はほぼ円形である。規模は東西145cm、南北151cm以上である。根固め石の大きさは径5～15cmである。礎石抜取り穴は確認されなかった。

・KS-529礎石跡　1区西部、KS-518の南隣で検出した。平面形は木の根があるため、一部のみの検出であるが、ほぼ円形であったと推測される。規模は東西51cm以上、南北101cm以上である。根固め石の大きさは径5～10cmである。礎石抜取り穴は確認されなかった。

・KS-530礎石跡　1区西部、KS-529の西約1.2mで検出した。平面形は不整円形である。東西97cm、南北80cmの礎石抜取り穴である。掘り方と根固め石は確認されなかった。

・KS-531礎石跡　1区西部、KS-530の西約1mで一部検出し、平面形は円形であったと推測される。規模は東西20cm以上、南北30cm以上である。根固め石と礎石抜取り穴は確認されなかった。

・KS-532礎石跡　3区東壁で検出した。大広間落縁の東辺に位置する。平面形はほぼ円形である。規模は東西127cm以上である。根固め石は確認されなかった。東西112cm以上、南北92cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-533礎石跡　3区東部、KS-532の西約30cmで検出した。大広間広縁の東辺に位置する。平面形は不整円形である。規模は東西135cm、南北155cmである。根固め石の大きさは径5～15cmである。東西95cm以上、南北32cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-534礎石跡　3区中央部、KS-533の西約40cmで検出した。平面形は木の根があるため、一部のみの検出であるが、不整円形であったと推測される。規模は東西102cm以上、南北163cm径50cmである。根固め石の大きさは径5～15cmである。東西39cm以上、南北131cm以上の礎石抜取り穴を確認した。南に隣接するKS-543と接している。

・KS-535礎石跡　3区中央部、KS-17の北約30cmで検出した。平面形は不整円形である。東西95cm以上、南北52cmの礎石抜取り穴である。掘り方と根固め石は確認されなかった。

・KS-210礎石跡　3区中央部、KS-535の西約1mで検出した。平面形は楕円形である。東西70cm、南北70cmの礎石抜取り穴である。掘り方と根固め石は確認されなかった。

・KS-536礎石跡　2区中央部、KS-210の西約1.4mで検出した。平面形は撹乱に大部分切られているが、楕円形であったと推測される。規模は東西47cm以上、南北28cm以上の礎石抜取り穴である。掘り方と根固め石は確認されなかった。

・KS-537礎石跡　2区中央部、KS-536の西約1.3mで検出した。平面形は楕円形である。規模は東西97cm、南北50cmである。根固め石は確認されなかった。東西65cm、南北30cmの礎石抜取り穴が確認された。

・KS-538礎石　2区中央部、KS-537の西約1.1mで検出した。加工の見られない楕円形の自然石で、長軸71cm以上、短軸71cm以上、厚さ30cmである。掘り方は東西100cm以上、南北95cm以上である。根固め石は確認されなかった。礎石上端の標高レベルは116.010mである。

・KS-539礎石跡　2区中央部、KS-538の西約3.4mで検出した。平面形は撹乱に大部分切られているが、円形であったと推測される。規模は東西16cm以上、南北44cm以上である。根固め石と礎石抜取り穴は確認されなかった。

・KS-540礎石跡　1・2区を挟む、KS-539の西約1.2mで検出した。平面形は楕円形である。規模は東西165cm、南北151cmである。根固め石の大きさは径5～20cmである。礎石抜取り穴は確認されなかった。

・KS-541礎石跡　3区東壁の西側で検出した。大広間落縁の東辺に位置する。平面形は不整円形であったと推測される。東西25cm以上、南北95cm以上の礎石抜取り穴である。掘り方と根固め石は確認されなかった。

・KS-542礎石跡　3区東部、KS-541の西約60cmで検出した。大広間広縁の東辺に位置する。平面形は不整円形である。規模は東西115cm以上、南北140cm以上である。根固め石は確認されなかった。東西95cm、南北121cmの礎

石抜取り穴を確認した。

・KS-543礎石跡　3区中央部、KS-542の西約40cmで検出した。平面形は不整円形である。規模は東西203cm、南北193cmである。根固め石の大きさは径5～15cmである。東西133cm、南北128cmの礎石抜取り穴を確認した。北に隣接するKS-534と接している。

・KS-17礎石跡　3区中央部、KS-543の西隣で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西243cm、南北246cmである。根固め石の大きさは径5～20cmである。東西131cm、南北97cmの礎石抜取り穴を確認した。大広間跡で検出した礎石跡の中では最大規模のものである。

・KS-16礎石跡　3区中央部、KS-17の西約20cmで検出した。平面形は楕円形である。規模は東西149cm以上、南北242cmである。根固め石の大きさは径5～15cmである。東西124cm以上、南北10cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-171礎石跡　2区南部、KS-16の西隣で検出した。平面形は楕円形である。規模は東西166cm以上、南北220cmである。根固め石の大きさは径5～20cmである。東西94cm以上、南北83cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-544礎石跡　2区南部、KS-171の西隣で検出した。平面形はほぼ円形である。規模は東西188cm以上、南北208cmである。根固め石の大きさは径5～15cmである。東西54cm以上、南北84cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-545礎石跡　2区南部、KS-544の西隣で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西151cm以上、南北210cmである。根固め石の大きさは径5～15cmである。東西83cm以上、南北96cmの礎石抜取り穴を確認した。

・KS-546礎石跡　2区南部、KS-545の西隣で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西128cm以上、南北193cm以上である。根固め石の大きさは径5～20cmである。東西90cm以上、南北110cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-547礎石跡　2区南部、KS-546の西隣で検出した。平面形は撹乱に大部分切られているが、円形であったと推測される。規模は東西80cm以上、南北175cm以上である。根固め石の大きさは径5～20cmである。礎石抜取り穴は確認されなかった。

・KS-548礎石跡　1・2区を挟む、KS-547の西隣で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西190cm以上、南北190cm以上である。根固め石の大きさは径5～15cmである。東西74cm以上、南北102cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-549礎石跡　3区東壁西側で検出した。大広間落縁の東辺に位置する。平面形は楕円形であったと推測される。規模は東西19cm以上、南北60cm以上の礎石抜取り穴である。掘り方と根固め石は確認されなかった。

・KS-550礎石跡　3区東部、KS-549の西約60cmで検出した。大広間広縁の南東角に位置する。平面形は不整円形である。規模は東西110cm、南北95cm以上である。根固め石は確認されなかった。東西32cm以上、南北50cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-18礎石跡　3区南部、KS-550の西約70cmで検出した。大広間広縁の南辺に位置する。平面形は不整円形である。規模は東西116cm、南北91cmの礎石抜取り穴である。掘り方と根固め石は確認されなかった。

・KS-230礎石跡　3区南部、KS-18の西約1.3mで検出した。大広間広縁の南辺に位置する。平面形は不整円形である。規模は東西77cm以上、南北106cm以上である。根固め石の大きさは径5～15cmである。東西58cm以上、南北58cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-170礎石跡　3区南部、KS-230の西約1.2mで検出した。大広間広縁の南辺に位置する。平面形は不整円形である。規模は東西158cm、南北187cm以上である。根固め石の大きさは径5～20cmである。東西126cm、南北127cmの礎石抜取り穴を確認した。北に隣接するKS-16に切られるが、構築時期に差はないと考えられる。

・KS-172礎石跡　2区南部、KS-170の西約1.1mで検出した。大広間広縁の南辺に位置する。平面形は不整円形である。規模は東西134cm以上、南北97cm以上である。根固め石の大きさは径5～15cmである。東西90cm、南北57cmの礎石抜取り穴を確認した。

・KS-551礎石　2区南部、KS-172の西約40cmで検出した。大広間広縁の南辺に位置する。加工の見られない方形の自然石で、長軸68cm、短軸57cm、厚さ13cm以上である。掘り方は東西168cm、南北160cm以上である。根固め石は確認されなかった。礎石上端の標高レベルは115.794mである。

・KS-552礎石跡　2区南部、KS-551の西隣で検出した。大広間広縁の南辺に位置する。平面形は楕円形である。規模は東西220cm、南北150cm以上である。根固め石と礎石抜取り穴は確認されなかった。

・KS-553礎石跡　2区南部、KS-552の西約20cmで検出した。大広間広縁の南辺に位置する。平面形は一部のみの検出であるが、ほぼ円形であったと推測される。規模は東西40cm以上、南北90cm以上である。根固め石と礎石抜取り穴は確認されなかった。

・KS-554礎石跡　2区南部、KS-547の南約20cmで検出した。大広間広縁の南辺に位置する。平面形は撹乱に大部分切られているが、不整円形であったと推測される。規模は東西97cm以上、南北43cm以上である。根固め石と礎石抜取り穴は確認されなかった。

・KS-555礎石跡　1・2区を挟む、KS-554の西約60cmで検出した。平面形は撹乱に大部分切られているが、不整円形であったと推測される。規模は東西180cm以上、南北40cm以上である。根固め石と礎石抜取り穴は確認されなかった。

・KS-556礎石跡　3区南部、KS-550の南約80cmで検出した。大広間落縁の南辺に位置する。平面形は一部のみの検出であるが、不整円形であったと推測される。規模は東西120cm以上、南北20cm以上である。根固め石は確認されなかった。東西110cm以上、南北10cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

(2) その他の近世と考えられる遺構

先述した以外の近世と考えられる遺構を一括して扱う。遺構中の埋土が硬く締まっており、近世の可能性がある。検出面はⅢb層上面である。

・KS-557　3区西部より検出した。平面形は楕円形である。規模は東西52cm、南北40cm以上である。

・KS-558　3区北部より検出した。平面形はKS-7・20に切られているが、ほぼ円形である。規模は東西45cm以上、南北35cm以上である。KS-7・20より古い。

・KS-559　3区北東部より検出した。平面形は楕円形である。規模は東西31cm以上、南北31cmである。

・KS-560　3区北東部より検出した。平面形は円形である。規模は東西26cm、南北26cmである。

・KS-561　3区北部より検出した。平面形は円形である。規模は東西21cm、南北20cmである。

・KS-562　2区北部より検出した。平面形は不整円形である。規模は東西45cm、南北20cmである。KS-511・512より新しい。

・KS-563　2区北東部より検出した。平面形は円形である。規模は東西55cm、南北54cmである。KS-513より新しい。

・KS-564　2区西部より検出した。平面形は円形である。規模は東西27cm、南北21cm以上である。

・KS-565　2区北部より検出した。平面形は円形である。規模は東西23cm以上、南北52cmである。

・KS-566　1区北東部より検出した。平面形は円形である。規模は東西26cm以上、南北83cm以上である。

・KS-567　1区北東部より検出した。平面形は円形である。規模は東西12cm、南北24cmである。

・KS-568　2区北部より検出した。平面形は円形である。規模は東西18cm以上、南北20cmである。

・KS-569　1区北部より検出した。平面形は楕円形である。規模は東西94cm、南北65cmである。

・KS-570　1区北東部より検出した。平面形は不整円形である。規模は東西46cm、南北45cmである。1.4m東側に加工が見られない長軸50cm、短軸30cmの扁平な石材1点を検出した。東石に使われていた可能性が考えられる。

・KS-571　1区西部より検出した。平面形は不整円形である。規模は東西60cm以上、南北12cm以上である。

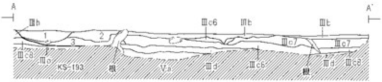
・KS-572　1区北部より検出した。平面形は円形である。規模は東西16cm以上、南北30cmである。
・KS-573　1区北東部より検出した。平面形は円形である。規模は東西21cm、南北25cmである。
・KS-574　1区北東部より検出した。平面形は楕円形である。規模は東西41cm、南北46cm以上である。
・KS-575　1区北部より検出した。平面形は円形である。規模は東西32cm、南北30cmである。
・KS-576　1区北部より検出した。平面形は大部分を撹乱に切られているが、ほぼ楕円形である。規模は東西54cm、南北58cmである。KS-577より新しい。
・KS-577　1区北東部より検出した。平面形は大部分を撹乱に切られているが、ほぼ円形である。規模は東西65cm以上、南北21cm以上である。KS-576より古い。
・KS-578　1区北部より検出した。平面形は大部分を撹乱に切られているが、ほぼ円形である。規模は東西20cm以上、南北30cm以上である。
・KS-579　3区北東部、KS-522の北側で断面のみ検出した。規模は上幅14cm以上、深さ32cmである。

(3) 大広間に先行する遺構

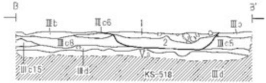
・KS-580　3区南部より検出した。検出面はV層上面である。平面形は楕円形であると推測される。規模は東西70cm以上、南北15cm以上である。
・KS-581礎石　3区南部、KS-18の南西で礎石と考えられる遺構を1基検出した。検出面はV層上面である。礎石は加工の見られない隅丸方形の自然石で、長軸62cm、短軸38cm、厚さ20cm以上である。掘り方は東西75cm、南北60cm以上である。根固め石は確認されなかった。礎石上端の標高レベルは115.572mである。
遺構の構築順序は、地山（V層）上面から掘りこまれた掘り方内に礎石を据えた後、地山の土で埋めている。礎石上面レベルを見ると、大広間南側の礎石群に比べ約20cm低く、大広間の整地層より下層で検出していることから、大広間に先行するものと考えられる。
・KS-582　3区南部、KS-581の東約1.1mで検出した。検出面はⅢc5層上面である。平面形は円形であったと推測される。規模は東西53cm、南北21cm以上である。
・KS-583　3区南部、KS-581の西約1.5mで検出した。検出面はV層上面である。平面形は円形であったと推測される。規模は東西65cm以上、南北30cm以上である。
・KS-584　1区南部より断面のみ検出した。規模は上幅132cm、深さ14cm以上である。
・KS-585　1区南部より断面のみ検出した。規模は上幅94cm、深さ28cmである。撹乱溝の両側で確認され、同一遺構の可能性が考えられる。
・KS-586　2区北部より断面のみ検出した。規模は上幅113cm、深さ44cmである。撹乱溝の両側で確認され、同一遺構の可能性が考えられる。埋土中より放射性炭素年代測定用サンプルを1点採取した。その結果、層年代補正値で概ね紀元前4～5世紀の年代が得られた（5．理化学分析参照）。埋土中から近世期と思われる瓦片が1点出土した。
KS-514より古い。
・KS-587　2区北部より断面のみ検出した。規模は上幅102cm、深さ18cmである。
・KS-588　2区北部より断面のみ検出した。規模は上幅43cm、深さ14cmである。

(4) 近代遺構

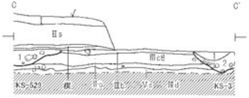
・**轍跡**　1区から2区にかけて36条検出した。検出面はⅡc層上面およびⅡd層上面の2面である。おもに南西から北東方向に延びている。規模は、長さ約40cm～3m、上端幅10～15cmである。



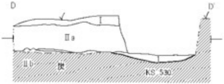
1区北西部カクラン南壁断面図



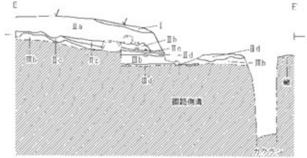
1区北西部カクラン南壁断面図



1区北西部カクラン南壁断面図



1区北西部カクラン南壁断面図

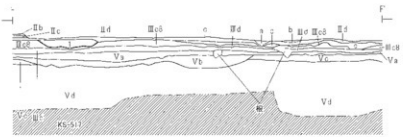


1区中央部カクラン南壁断面図

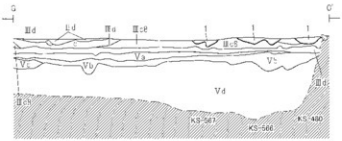
第14図　第20次調査　1区断面図（1/50・SL=116m）

第5表　土層注記表

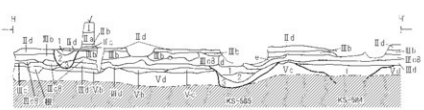
遺構番号	調査区	遺構・層位	土色		土質	土性		備考
			土色No	土色		粘性	しまり	
基本層	1	Ⅰ	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	やや有	無	現表土。
		Ⅱa	2.5Y6/3	にぶい黄色	粘土	有	有	鉄分を多量に含む。礫を少量含む。近現代の盛土
		Ⅱb	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	無	やや有	砂を多量に含む。礫を少量含む。上面に炭層が堆積する。
		Ⅱc	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	有	やや有	礫を少量含む。
		Ⅱd	7.5YR5/6	明褐色	砂質シルト	有	やや有	小礫、岩片を多量に含む。
		Ⅲb	7.5YR4/4	褐色	シルト	有	有	岩片を多量に含む。礫を少量含む。
		Ⅲc6	10YR5/6	黄褐色	粘土	有	やや有	砂、礫を多量に含む。炭化物、岩片を少量含む。
		Ⅲc7	10YR4/4	褐色	シルト	有	やや有	10YR5/6黄褐色粘土質ブロックを多量に含む。炭化物、岩片を少量含む。
		Ⅲc8	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	やや有	やや有	10YR4/4褐色シルト質ブロックを少量含む。17次調査でのⅢb層に対応。
		Ⅲd	2.5Y5/4	黄褐色	砂礫	有	無	砂、径4～6㎝の礫を多量に含む。17次調査でのⅢd層に対応
		Ⅴa	10YR7/4	にぶい黄橙色	粘土	有	有	風化した砂礫を多量に含む。地山層。
KS-193	1	埋土1	10YR4/4	褐色	シルト	有	やや有	拳大の礫を多量に含む。礎石抜取り穴。
		埋土2	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	有	やや有	拳大の礫を多量に含む。10YR5/6黄褐色粘土質ブロックを少量含む。
		埋土3	7.5YR5/6	明褐色	粘土	有	有	小礫を微量含む。上部に礫が乗る。
KS-518	1	埋土1	7.5YR4/6	褐色	シルト	有	無	径3～10㎝の礫を含む。瓦片を少量含む。
		埋土2	10YR4/4	褐色	シルト	有	無	10YR5/6黄褐色粘土質ブロックを多量に含む。礫、炭化物を微量含む。
KS-529	1	埋土1	7.5YR4/6	褐色	シルト	有	やや有	拳大の礫を少量含む。
KS-530	1	埋土1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	無	有	



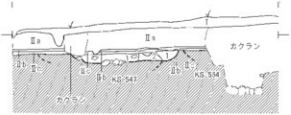
1区北東部カクラン南壁断面図



1区北東部カクラン南壁断面図



1区南部カクラン南壁断面図

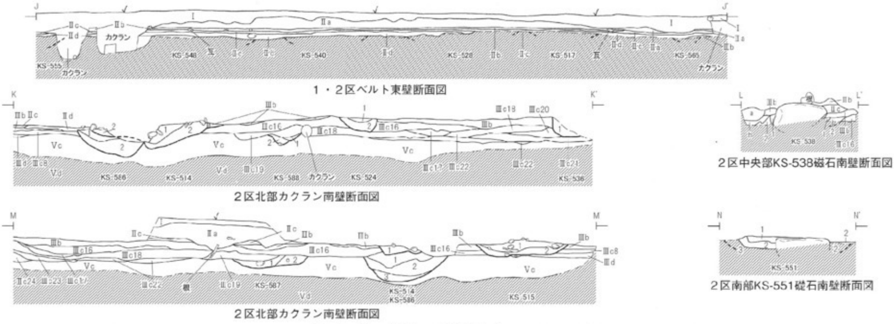


2区南西部カクラン南壁断面図

第15図　第20次調査　1・2区断面図（1/50・SL=116m）

第6表　土層注記表

遺構番号	調査区	遺構・層位	土色			土性		備考
			土色No	土色	土質	粘質	しまり	
基本層	1・2	Ⅰ	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	強	密	現耕の表土。
		Ⅱa	2.5Y6/3	にぶい黄色	粘土	有	有	鉄分を多量に含む。礫を少量含む。近現代の盛土
		Ⅱb	10YR3/1	暗褐色	シルト	強	やや有	丸竹、炭化物、鉄分を多量に含む。
		Ⅱc	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	有	無	礫を少量含む。
		Ⅱd	7.5YR5/6	褐色	シルト	強	やや有	黄白を多量に含む。現を少量含む。1面に近代以降の撹乱。
		Ⅱb	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	有	やや有	鉄、径1～2cmの礫を多量に含む。
		Ⅱc3	10YR5/3	黄褐色	粘土	有	有	黄白を少量含む。礫、炭化物を微量含む。17次以降での第Ⅱ層に対応。
		Ⅲd	10YR5/4	褐色	粘土	有	無	鉄、礫を含む。北向で多く分布する。南東では僅かしか含まない。17次以降での第Ⅲ層に対応
		Va	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土	有	有	風化した砂礫を多量に含む。鉄分、炭化物を微量に含む。地山層。
		Vb	7.5YR5/8	明褐色	粘土	有	有	鉄分を含む。現を微量含む。地山層。
		Vc	2.5Y7/2	灰黄色	粘土	やや有	強	鉄分を含む。地山層。
		Vd	10YR7/4	にぶい黄橙色	粘土	有	有	風化した砂礫を多量に含む。地山層。
		a	7.5YR6/4	にぶい黄橙色	粘土質シルト	有	やや有	近代撹乱の埋積土
		b	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト質粘土	有	有	近代撹乱の埋積土
		c	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	有	やや有	径1～2cmの礫を多量に含む。粘土を含む。岩片を少量含む。部分的にみられる撹乱土。
		d	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土	有	有	10YR4/6粘土ブロックを少量含む。黒色シルトブロックを微量含む。部分的にみられる溝埋土。
		e	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	やや有	有	褐色粘土ブロック、炭化物を少量含む。部分的にみられる撹乱土。
KS-517	1	耕土1	7.5YR4/6	褐色	シルト	有	やや有	礫を多量に含む。
KS-566	1	盛土1	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土	やや有	有	砂、礫を多量に含む。
KS-868	1	耕土1	10YR4/6	褐色	シルト	有	有	礫、岩片を少量含む。
KS-480	1	耕土1	7.5YR4/4	褐色	シルト	有	有	礫を多量に含む。岩片を少量含む。
KS-878	1	耕土1	10YR4/4	褐色	シルト	有	有	風化した砂を多量に含む。
		耕土2	10YR5/6	黄褐色	粘土	有	有	細かな岩片を少量含む。
		耕土3	10YR4/4	褐色	粘土	やや有	有	鉄分、炭化物を微量含む。
KS-585	1	耕土1	10YR6/3	にぶい黄褐色	粘土	やや有	有	明黄褐色粘土ブロック、鉄分を少量含む。径1～2cmの礫、炭化物を微量含む。
		耕土2	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土	やや有	強	砂、径1～3cmの礫を多量に含む。
		盛土3	2.5Y6/4	黄褐色	粘土	やや有	強	風化した砂、礫を多量に含む。
KS-581	1	耕土1	10YR5/6	黄褐色	粘土	有	有	風化した砂を多量に含む。
		盛土1	10YR4/6	褐色	シルト	有	やや有	礫、炭片を含む。
KS-647	2	耕土2	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	有	有	鉄分を含む。二次堆積か。



1・2区ベルト東壁断面図

2区北部カクラン南壁断面図

2区中央部KS-538礎石南壁断面図

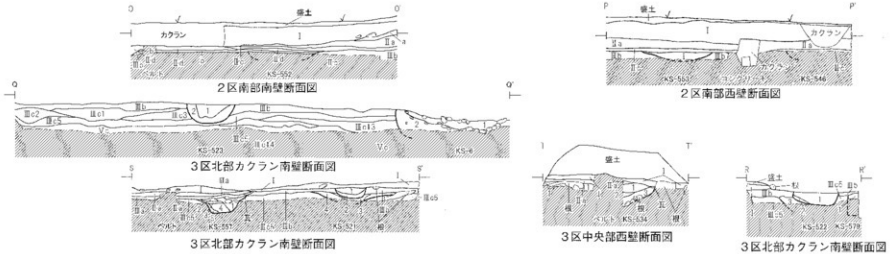
2区北部カクラン南壁断面図

2区南部KS-551礎石南壁断面図

第16図　第20次調査　2区断面図（1/50・SL=116m）

第7表　土層注記表

遺構番号	調査区	遺構・層位	土色		土質	土性		備考
			土色No	土色		粘質	しまり	
基本層	2	Ⅰ	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	強	無	園路の表土。
		Ⅱa	2.5Y6/3	にぶい黄色	粘土	有	強	灰色・黒褐色粘土ブロック、明褐色砂礫ブロックを含む。園路用の盛土整地か。
		Ⅱb	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有	強	瓦片、小石、岩片を含む。北部ではグライ化。
		Ⅱc	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	有	強	炭化物、部分的に細砂ブロックを含む。北部ではグライ化。
		Ⅱd	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土	有	強	拳大の礫を少量含む。上面に近代以降の轍跡。
		Ⅲb	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	有	やや有	砂、径1～3cmの礫を多量に含む。17次調査でのⅢa層に対応。
		Ⅲc8	10YR5/8	黄褐色	粘土	有	有	岩片を少量含む。礫、炭化物を微量含む。
		Ⅲd	10YR4/4	褐色	粘土	有	無	砂、礫を含む。北西で多く分布する。南東では礫はほとんど含まない。
		Ⅲc16	7.5YR4/6	褐色	シルト	有	無	細かな岩片を多量に含む。小礫を少量含む。
		Ⅲc17	7.5YR4/6	褐色	シルト	有	やや有	細かな凝灰岩片を少量含む。
		Ⅲc18	10YR4/8	褐色	シルト	やや有	やや有	岩片を含む。炭化物を微量に含む。
		Ⅲc19	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	やや有	やや有	細かな岩片を多量に含む。
		Ⅲc20	10YR4/6	褐色	シルト	無	やや有	細かな岩片を少量含む。
		Ⅲc21	10YR5/6	黄褐色	シルト	やや有	やや有	岩片を多量に含む。
		Ⅲc22	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	有	無	10YR5/6黄褐色粘土質ブロックを多量に含む。炭化物を微量含む。
		Ⅲc23	7.5YR5/8	明褐色	シルト	有	有	岩片を少量含む。
		Ⅲc24	10YR4/6	褐色	シルト	有	有	細かい凝灰岩片を含む。
		Ⅴc	2.5Y6/3	にぶい黄褐色	粘土	有	強	鉄分を含む。地山層。
		Ⅴd	2.5Y7/4	浅黄色	砂礫	有	無	風化した砂礫を多量に含む。地山層。
KS-514	2	埋土1	10YR4/4	褐色	シルト	有	やや有	礫を少量含む。岩片を微量含む。
		埋土2	10YR4/6	褐色	シルト	有	有	礫を多量に含む。
KS-524	2	埋土1	7.5YR4/4	褐色	シルト	有	やや有	小礫を含む。
		埋土2	10YR4/6	褐色	シルト	やや有	やや有	岩片を少量含む。炭化物を微量に含む。
KS-536	2	埋土1	10YR4/6	褐色	シルト	有	やや有	小礫、岩片を含む。
KS-586	2	埋土1	10YR5/6	黄褐色	粘土	有	強	小礫、鉄分を含む。
		埋土2	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	やや有	強	礫、炭化物を多量に含む。
		埋土3	2.5Y6/4	にぶい黄色	粘土	無	強	礫、岩片を少量含む。
KS-588	2	埋土1	7.5YR4/6	褐色	粘土質シルト	有	有	円礫、細かな岩片を少量含む。
		埋土2	10YR5/6	黄褐色	粘土	有	有	礫を含む。
KS-538	2	埋土1	10YR4/6	褐色	シルト	有	やや有	岩片を少量含む。炭化物を微量に含む。
		埋土2	7.5YR4/6	褐色	シルト	有	有	岩片を多量に含む。
		a	7.5YR4/6	褐色	シルト	やや有	やや有	岩片を少量含む。部分的にみられる堆積土。
		b	7.5YR4/4	褐色	シルト	有	無	岩片を少量含む。部分的にみられる堆積土。
KS-515	2	埋土1	7.5YR4/4	褐色	シルト	有	やや有	礫を多量に含む。岩片を少量含む。
		埋土2	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	有	有	礫、岩片を少量含む。
KS-587	2	埋土1	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	有	無	礫を含む。
		埋土2	10YR5/6	黄褐色	シルト	有	有	礫を含む。
KS-551	2	埋土1	7.5YR3/4	暗褐色	シルト	やや有	やや有	拳大の礫を含む。ガラス板片出土。近代以降の堆積土。
		埋土2	7.5YR4/4	褐色	シルト	やや有	やや有	礫を含む。礎石の掘り方。
		埋土3	10YR4/6	褐色	シルト	有	有	礎石の掘り方。



2区南部南壁断面図

2区南部西壁断面図

3区北部カクラン南壁断面図

3区北部カクラン南壁断面図

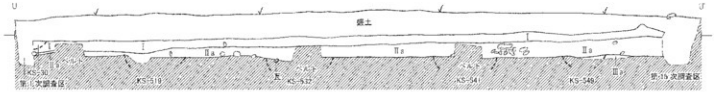
3区中央部西壁断面図

3区北部カクラン南壁断面図

第17図　第20次調査　2・3区断面図（1/50・SL=116m）

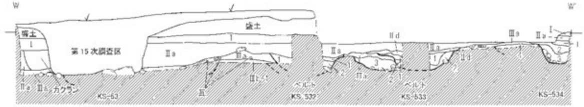
第8表　土層注記表

遺構番号	調査区	遺構・層位	土色		土質	十径		備考
			土色No	土色		結質	しまり	
基本層	2・3	Ⅰ	10YR4/4	褐色	シルト	有	無	礫、岩片を多量に含む。
		Ⅱa	2.5Y6/2	灰黄色	粘土	有	有	岩片、鉄分を少量含む。
		Ⅱc	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	無	無	礫、鉄分、炭化物を少量含む。
		Ⅱd	10YR4/6	褐色	シルト	有	やや有	小礫、岩片を少量含む。
		Ⅱe	10YR4/6	褐色	シルト	やや有	有	小礫、炭化物を微量含む。
		Ⅲa	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	やや有	やや有	礫、瓦片を含む。鉄釘、銅釘出土。硬石抜取り時までの表土。
		Ⅲb	7.5YR4/4	褐色	シルト	有	やや有	岩片を多量に含む。17次調査での Ⅲa層に対応。
		Ⅲc	7.5YR4/6	褐色	シルト	有	やや有	平大の凝灰岩ブロックを含む。
		Ⅲd	7.5YR4/4	褐色	粘土質シルト	有	有	凝灰岩片を多量に含む。下部はやや黒ずみ濃らかい。
		Ⅲe	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	有	有	細かい凝灰岩片を多量に含む。
		Ⅲf	7.5YR4/6	褐色	粘土質シルト	やや有	有	岩片を少量含む。
		Ⅲg	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	やや有	強	岩片を少量含む。
		Ⅲh	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	無	強	岩片を多量に含む。
		Ⅴc	10YR5/8	黄褐色	シルト	有	強	鉄分を含む。黒山層。
		a	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	無	無	細かな岩片を少量含む。
		b	10YR4/4	褐色	シルト	やや有	やや有	小礫、炭化物を微量含む。
KS-553	3	埋土1	10YR4/6	褐色	シルト	有	無	小礫、岩片を少量含む。炭化物を微量含む。
KS-523	3	埋土1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	有	無	礫、岩片を少量含む。
		埋土2	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	有	有	細かな岩片を少量含む。
KS-6	3	埋土1	10YR4/6	褐色	シルト	やや有	やや有	根周の石を多量に含む。レンガ片1点出土。
		埋土2	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	無	やや有	根周の石を多量に含む。
		埋土1	10YR3/4	暗褐色	シルト	有	無	礫を含む。上部に7.5YR4/4褐色シルトを含む。
KS-522	3	埋土2	7.5YR4/4	褐色	シルト	有	やや有	
		埋土3	10YR4/6	褐色	シルト	有	やや有	褐褐色岩片、凝灰岩片を含む。
KS-579	3	埋土1	10YR4/4	褐色	シルト	無	やや有	細かな岩片を多量に含む。炭化物を少量含む。
		埋土1	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	無	有	礫、瓦片を含む。
KS-557	3	埋土2	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	無	有	礫、瓦片を含む。
		埋土3	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	有	無	礫、瓦片を含む。
		埋土4	10YR6/6	明黄褐色	シルト	有	無	凝灰岩塊。
		埋土5	10YR4/6	褐色	シルト	やや有	有	岩片を含む。
KS-521	3	埋土1	10YR4/4	褐色	シルト	やや有	無	礫を含む。虚石抜取り穴。
		埋土2	10YR4/6	褐色	シルト	やや有	有	岩片を含む。礫石抜取り穴。
		埋土3	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	有	有	炭化物を含む。礫石の抜り穴。
		埋土4	10YR6/6	明黄褐色	砂質シルト	有	有	細かい岩片を多量に含む。虚石の抜り穴。
KS-534	3	埋土1	10YR4/4	褐色	シルト	やや有	無	礫を少量含む。
		埋土2	10YR4/6	褐色	シルト	やや有	やや有	岩片を少量含む。
		埋土3	10YR3/4	暗褐色	シルト	無	無	礫、岩片を少量含む。

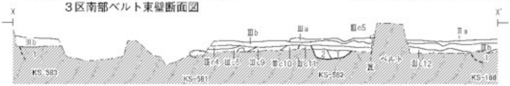


3区東壁断面図

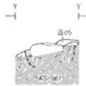
3区南部ベルト東壁断面図



3区東部ベルト南壁断面図



3区南部下層断ち割り北壁断面図

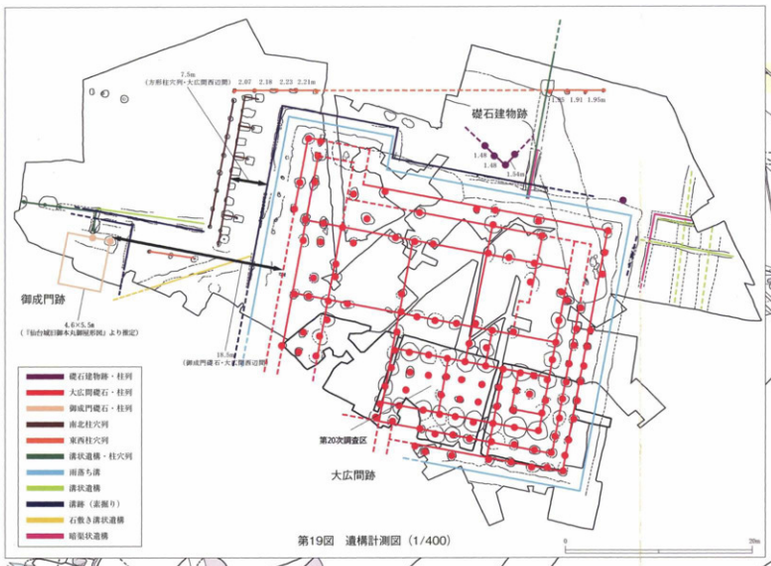


3区南部KS-581礎石断面図

第18図　第20次調査　3区断面図（1/50・SL=116m）

第9表　土層注記表

遺構番号	調査区	遺構・層位	土色		土質	土性		備考
			土色No	土色		粘質	しまり	
基本層	3	Ⅰ	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	有	やや有	10YR5/6黄褐色粘土質シルトの間層を挟む。礫、炭化物、植物遺存体、瓦片を含む。
		Ⅱa	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	やや有	やや有	岩片を多量に含む。大きな礫、瓦片を含む。
		Ⅱb	10YR3/4	暗褐色	シルト	有	無	小礫、岩片を少量含む。炭化物を微量に含む。
		Ⅲa	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	無	やや有	礫、鉄分、瓦片を少量含む。炭化物を微量含む。礎石抜取りまでの表土。
		Ⅲb	10YR4/4	褐色	シルト	有	有	礫、岩片を含む。17次調査でのⅢa層に対応。
		Ⅲb1	10YR4/4	褐色	シルト	強	やや有	鉄分、炭化物を微量含む。叩きによる硬化面。犬走りか。
		Ⅲc4	7.5YR5/6	明褐色	粘土質シルト	有	有	
		Ⅲc5	10YR4/4	褐色	シルト	有	有	白色岩片を多量に含む。17次調査でのⅢb層に対応。
		Ⅲc9	7.5YR5/6	明褐色	粘土質シルト	有	有	岩片を多量に含む。
		Ⅲc10	10YR5/6	黄褐色	シルト	有	有	小さな岩片を少量含む。
		Ⅲc11	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	有	有	細かな岩片を少量含む。
		Ⅲc12	7.5YR4/4	褐色	粘土質シルト	有	有	礫、岩片を少量含む。
		Ⅴc	2.5Y6/3	灰黄色	粘土	有	強	鉄分を含む。地山層。
KS-556	3	埋土1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	無	やや有	拳大の礫を少量含む。鉄分、瓦片を含む。礎石抜取り穴。
KS-550	3	埋土1	10YR4/2	にぶい黄褐色	シルト	やや有	やや有	10YR5/6黄褐色粘土質ブロック、10YR4/4褐色土ブロックを多量に含む。拳大の礫を少量含む。
		埋土2	10YR4/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	無	有	大きな礫、鉄分、瓦片を含む。
KS-542	3	埋土1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有	無	砂、岩片を多量に含む。
		埋土2	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	やや有	やや有	礫、瓦片、陶器片を含む。10YR6/6明黄褐色土ブロックを少量含む。炭化物を微量含む。
KS-580	3	埋土1	10YR4/6	褐色	シルト	やや有	有	岩片、鉄分、炭化物を多量に含む。
KS-532	3	埋土1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	やや有	無	礫、黄褐色粘土ブロック色を少量含む。
		埋土2	10YR4/4	褐色	シルト	無	やや有	礫、鉄分を少量含む。礎石抜取り穴。
KS-533	3	埋土1	10YR4/6	褐色	シルト	やや有	やや有	砂を多量に含む。小さない岩片、炭化物を微量含む。
		埋土2	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	無	やや有	礫を少量含む。
		埋土3	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	やや有	やや有	10YR6/6明黄褐色土ブロックを多量に含む。下面に礫が多数見られる。
KS-534	3	埋土1	10YR4/4	褐色	シルト	やや有	無	礫を少量含む。
		埋土2	10YR4/6	褐色	シルト	やや有	やや有	岩片を少量含む。
		埋土3	10YR3/4	暗褐色	シルト	無	無	礫、岩片を少量含む。
		埋土4	10YR4/6	褐色	シルト	有	やや有	岩片を多量に含む。
KS-583	3	埋土1	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	やや有	有	10YR5/8黄褐色粘土質ブロック、岩片を多量に含む。礫を微量含む。
KS-582	3	埋土1	10YR5/8	黄褐色	粘土質シルト	やや有	有	
		埋土2	10YR5/6	黄褐色	シルト	やや有	有	細かな岩片を少量含む。
KS-166	3	埋土1	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	有	有	小礫を微量含む。



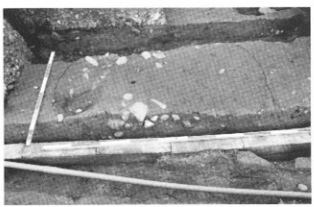
第19図　遺構計測図（1/400）

調査区平面合成写真（1/100）

第20図　第20次調査全体遺構平面図（1/100）

1区　全景（北から）

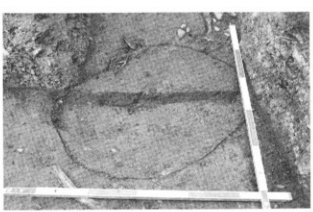
1区　KS-193検出状況（南から）



1区　KS-518検出状況（北東から）

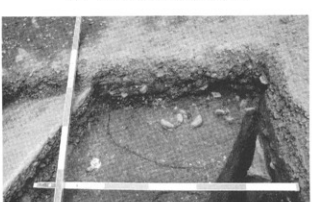
1区　KS-3検出状況（南東から）

1区　KS-529検出状況（南西から）



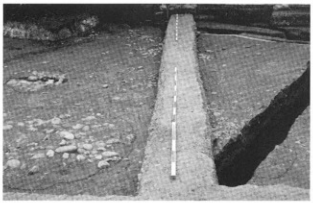
1区　KS-530検出状況（北西から）

1区　KS-531検出状況（南東から）

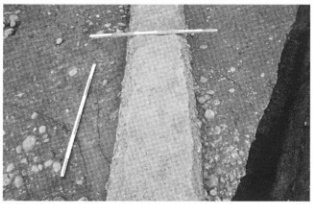


1区　KS-480検出状況（南西から）

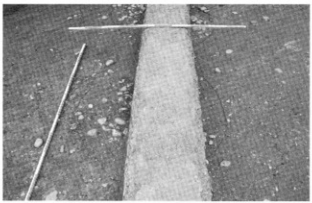
第21図



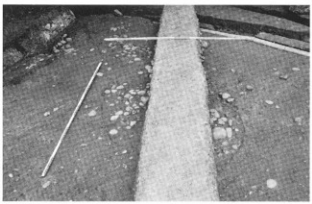
1・2区　Aベルト付近遺構検出状況　（北から）



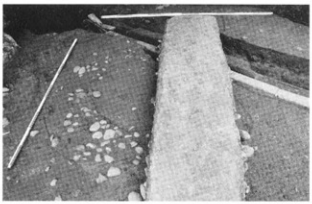
1・2区　KS-517検出状況（北から）



1・2区　KS-528検出状況（北から）

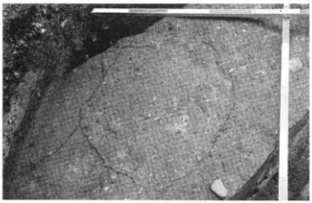


1・2区　KS-528検出状況（北から）

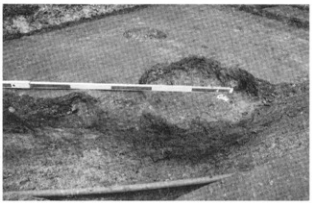


1・2区　KS-548検出状況（北から）

1・2区　KS-555検出状況　（北から）



1区　KS-576検出状況　（東から）

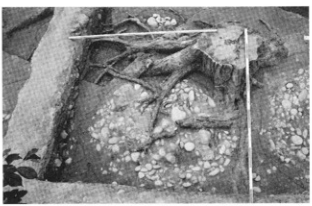


1区　KS-585検出状況（北東から）

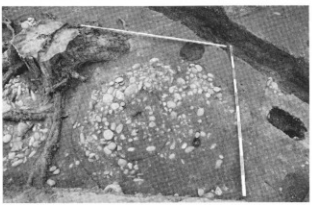
第22図

2区　全景（東から）

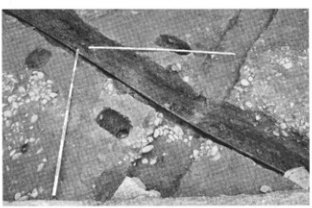
2区　全景（北から）



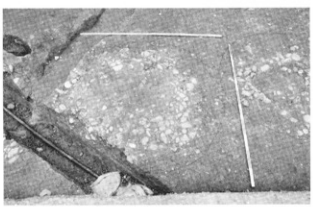
2区　KS-512検出状況　（北から）



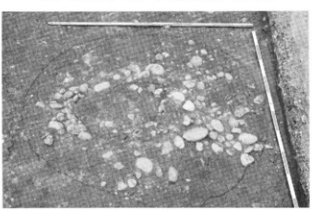
2区　KS-513検出状況（北から）



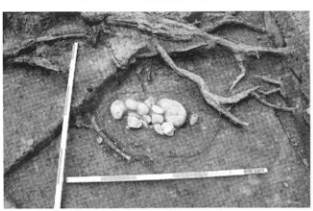
2区　KS-514・563・564検出状況（北から）



2区　KS-515検出状況（北から）

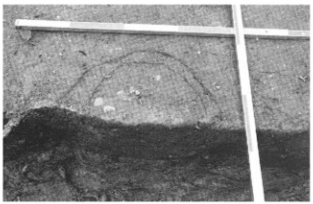


2区　KS-516検出状況（北から）

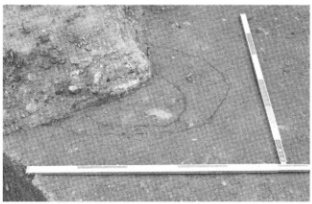


2区　KS-212検出状況（南から）

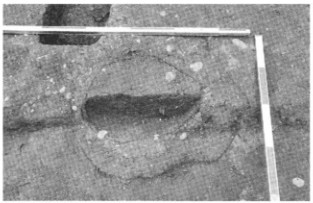
第23図



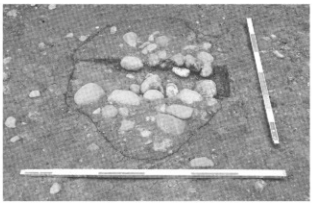
2区　KS-524検出状況（南西から）



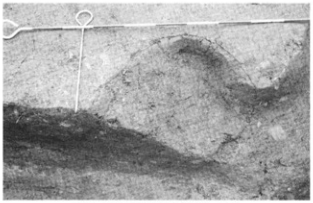
2区　KS-525検出状況（北から）



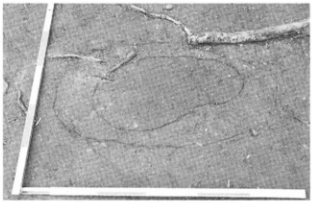
2区　KS-526検出状況（北西から）



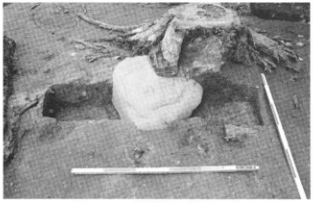
2区　KS-527検出状況（北から）



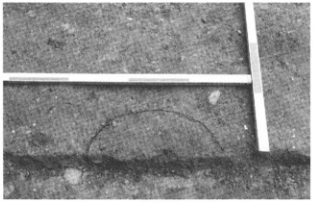
2区　KS-536検出状況（南から）



2区　KS-537検出状況（北から）

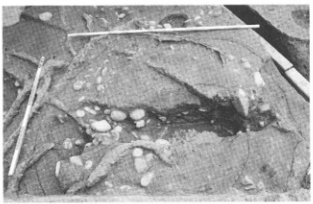


2区　KS-538検出状況（北西から）



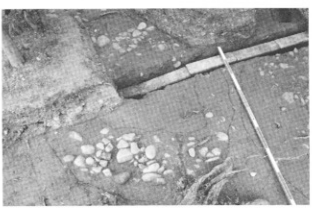
2区　KS-539検出状況（南東から）

第24図

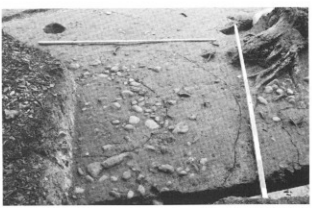


2区　KS-171検出状況（東から）

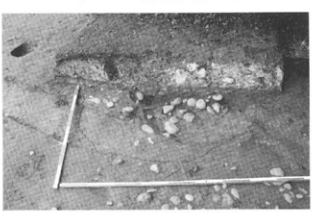
2区　KS-544検出状況（北から）



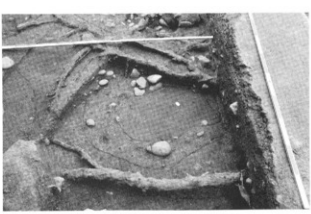
2区　KS-545検出状況（北から）



2区　KS-546検出状況（南から）



2区　KS-547検出状況（西から）

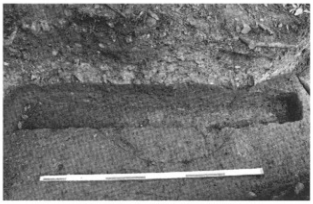


2区　KS-172検出状況（南から）

2区　KS-551検出状況2（南から）

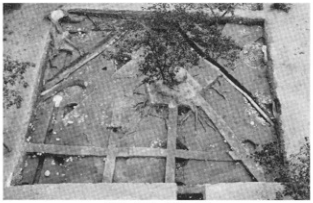
2区　KS-552検出状況（南から）

第25図

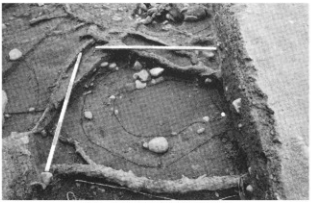


2区　KS-553検出状況（東から）

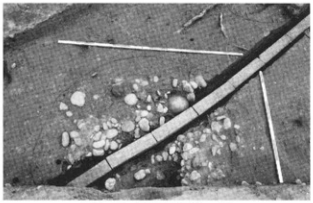
2区　KS-554検出状況（南西から）



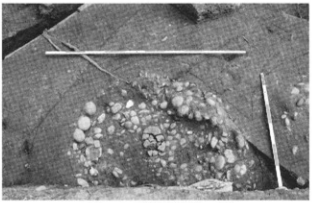
3区　全景（東から）



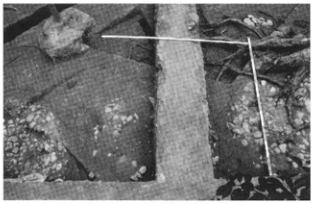
3区　KS-2検出状況（東から）



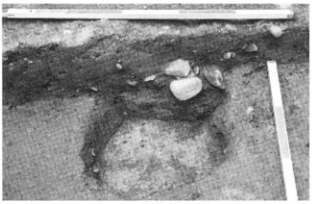
3区　KS-6検出状況（北から）



3区　KS-7検出状況（北から）

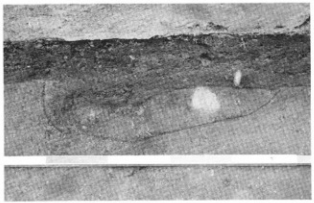


3区　KS-511検出状況（北から）

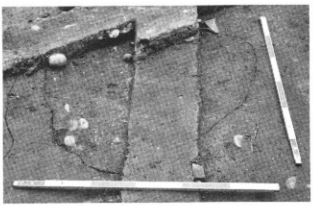


3区　KS-557検出状況（北から）

第26図

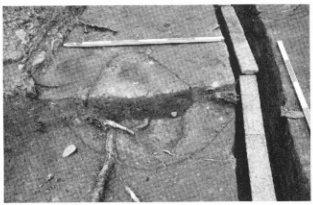


3区　KS-519検出状況（西から）

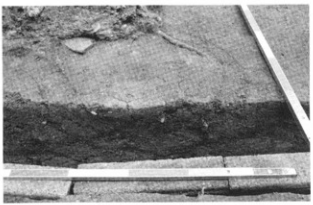


3区　KS-520検出状況（南から）

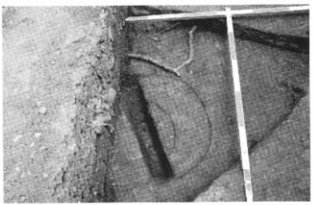
3区　KS-521検出状況（北西から）



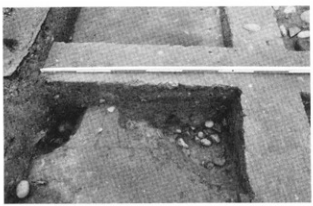
3区　KS-522検出状況（北東から）



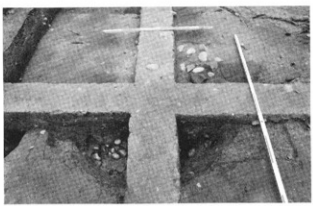
3区　KS-523検出状況（南東から）



3区　KS-211検出状況（南から）

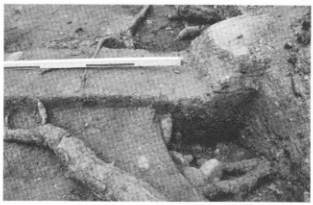


3区　KS-532・533断面状況（北から）

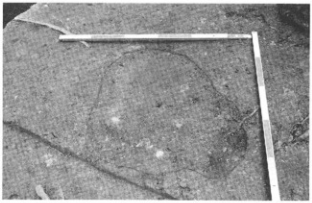


3区　KS-533検出状況（北から）

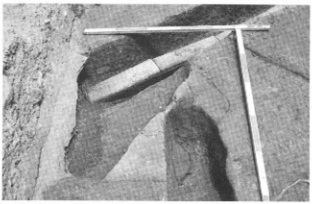
第27図



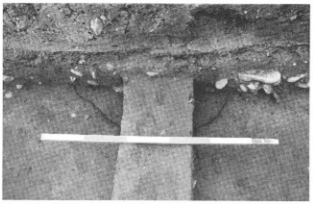
3区　KS-534検出状況（北から）



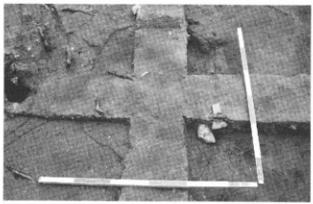
3区　KS-535検出状況（南から）



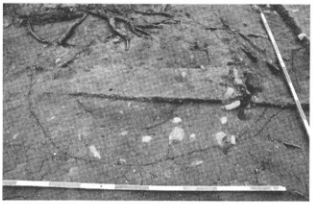
3区　KS-210検出状況（南から）



3区　KS-541検出状況（西から）

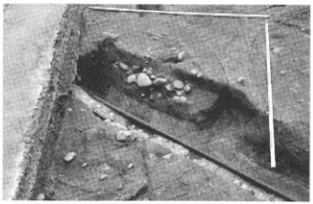


3区　KS-542検出状況（南から）



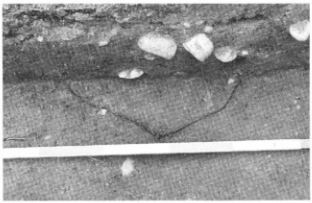
3区　KS-543検出状況（南から）

3区　KS-17検出状況（南東から）

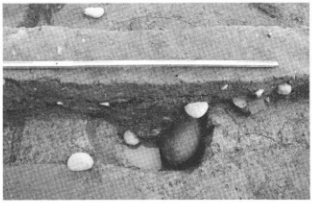


3区　KS-16検出状況（南から）

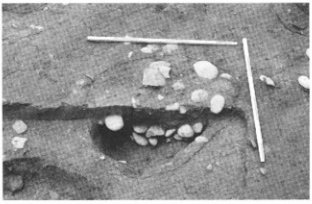
第28図



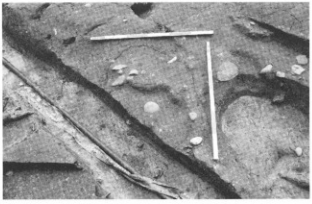
3区　KS-549検出状況（西から）



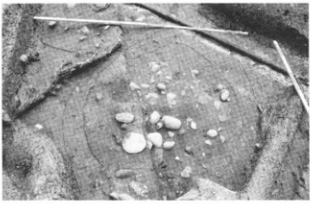
3区　KS-550検出状況（東から）



3区　KS-18検出状況（南から）



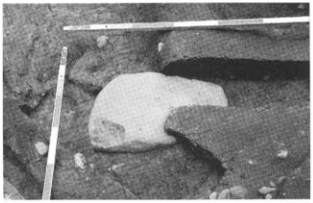
3区　KS-230検出状況（南から）



3区　KS-170検出状況（南から）

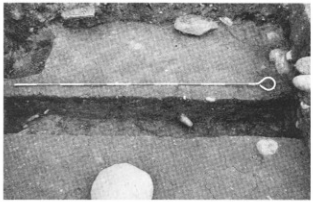
3区　拡張部南壁全景（北東から）

3区　下層遺溝検出状況（東から）

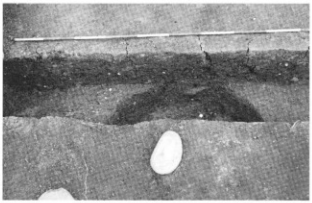


3区　KS-581検出状況（南から）

第29図

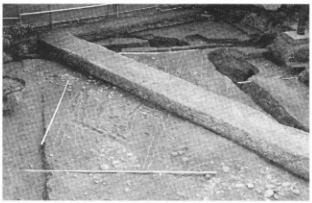


3区　KS-580検出状況（北から）

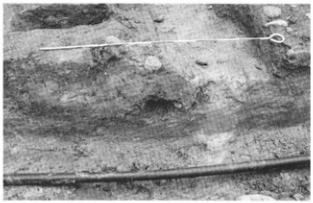


3区　KS-582検出状況（北から）

3区　KS-583検出状況（南から）



1・2区　近代轍跡検出状況（北東から）



2区　土壌サンプル（C-1）採取地点（北東から）

3区　Ⅱ層金銅金具（No.4）出土状況

3区　作業風景（北から）

遺跡見学会風景（南東から）

第30図

4. 出土遺物

(1) 陶磁器他（第10表）

①磁器・陶器

磁器は26点、陶器は22点出土した。ほとんどが表土、撹乱、近代以降の盛土層からの出土である。いずれも小片で器種、年代等詳細のわかるものは少ない。Ⅰ層より出土した大堀相馬産の掛け分け碗（18c）1点を図示した（第31図1）。KS-532の堀土からは中世の常滑産の陶器片1点出土した（第32図2e）。

第10表　第20次調査出土陶磁器他数量表

遺構・層位	磁器	陶器	土師質土器	計
撹乱	5	4		9
Ⅰ	2	1		3
Ⅱ	9		9	18
Ⅱa	2			2
Ⅱb	1	1	1	3
Ⅱc	3	12		15
Ⅱd	3	2	2	7
近代跡掘上		1		1
Ⅲa	1			1
Ⅲb		1		1
盛土1			1	1
KS-542埋土2		1		1
計	26	22	13	61

②土師質土器

土師質土器は13点出土した。いずれも口径・底径の復元が不可能な小片である。ほとんどがⅡ層から出土した。

(2) 金属製品（第11表）

金属製品は金銅金具、銅製飾金具、銅釘、銭貨、鉄釘、鏡などが出土している。

①金銅金具・銅製飾金具

今回の調査では、金銅金具1点、銅製飾金具1点が出土しており、本丸大広間跡関連調査での飾り金具の全出土点数は132点である。2点とも図示した。第31図2は、鏡金が残り、地金に蹴彫り（先が直線状の鑿を打込み、その楔形の打痕の連続を線状に見せる彫金技法）によって花弁の輪郭とみられる線彫りが施されている。中央の芯には魚々子打ち（魚卵状の小さな粒の詰打ち）が施されている。両端には先の鋭い突起が付いている。第31図3は、細い針金状の銅線で加飾しており、中空の突起が三つみられる。鏡金は認められない。

②銅釘

今回の調査では26点出土しており、本丸大広間跡関連調査での全出土点数は957点である。これまでと同様、頭部形状の違いに基づき分類した。Ⅰ類（角）1点、Ⅱ類（丸）2点、Ⅲ類（平丸）15点、Ⅳ類（不整形）7点、Ⅹ類（形状不明）1点である。Ⅰ～Ⅳ類を種類別に図示した（第31図4～8）。全長は、Ⅰ類が15mm、Ⅱ類が11mm、Ⅲ類が26～30mm、Ⅳ類が17～26mmである。Ⅳ類は比較的ばらつきが大きいが、20mm以下のものが多い。これは、かつて行った分析結果と同じ類向を示している。詳しくは、16年度に刊行した「仙台城跡5」出土遺物銅釘の項および考察を参照されたい。銅釘の分類基準についても同報告書に準拠している。

③銭貨

5点出土した。明治以降の一銭銅貨3点、五銭銅貨1点、不明1点で、いずれもⅡ層から出土している。

④鉄釘

20点出土した。ほとんどがⅡ層から出土している。うち2点を図示した（第32図7・8）。

⑤鏡

3点出土した。うち1点を図示した（第32図6）。

第11表　第20次調査出土金属製品数量表

遺構・層位	金銅金具	銅製金具	銅釘 Ⅰa	銅釘 Ⅱa	銅釘 Ⅱb	銅釘 Ⅲ	銅釘 Ⅳ	銅釘 Ⅹ類	その他銅製品	銭貨	鉄釘	鏡	その他鉄製品	計
表採									1					1
撹乱													3	3
Ⅰ	1	1	1	1	1	9	3	1	7	3	6	2	108	147
Ⅱb									1	1				2
Ⅱc									1					1
Ⅱd									2	1	9		1	13
Ⅲa						7	2		1				11	21
Ⅲb											4	1	1	3
ⅢbL													1	1
KS-175埋上											1			1
KS-531埋土							1						5	6
計	1	1	1	1	1	16	6	1	13	5	20	3	130	159

(3) 瓦（第12表）

瓦は総計1,959点出土し、このうち丸瓦が459点、平瓦が1,417点で併せて全体の96％を占める。また、出土層位別では撹乱や近代以降の盛土層や遺構から出土したものが圧倒的に多い。

①軒丸瓦

19点出土した。瓦当文様の判別可能なものは12点あり、九曜文３点、三巴文２点、珠文三巴文６点、無文１点である（第31図９～11）。

②軒平瓦

軒平瓦は６点出土した。主文様の判別可能なものは３点であり、桔梗文３点、二葉文２点である（第31図12・13）。また、滴水瓦は２点出土した。瓦当文様の判別可能なものは３点あり、菊花文の滴水瓦が出土している（第31図14）。文様が不明の滴水瓦１点出土した（第33図19）。

③軒桟瓦

４点出土した。瓦当文様は三巴文１点、無文３点である。

④棟瓦

25点出土した。冠伏間１点、丸桟伏間２点、角桟伏間２点、桟斗瓦４点、輪違い７点、面戸瓦４点、菊丸４点、差し込み瓦１点が出土した。輪違い、面戸瓦を各１点図示した（第31図15・16）。

⑤鯱瓦

３点出土した。鬼瓦２点、菊瓦１点である。

⑥平板

胸付平板２点、桟付平板10点が出土した。胸付平板、桟付平板を各１点図示した（第31図17・20）。

⑦塼瓦

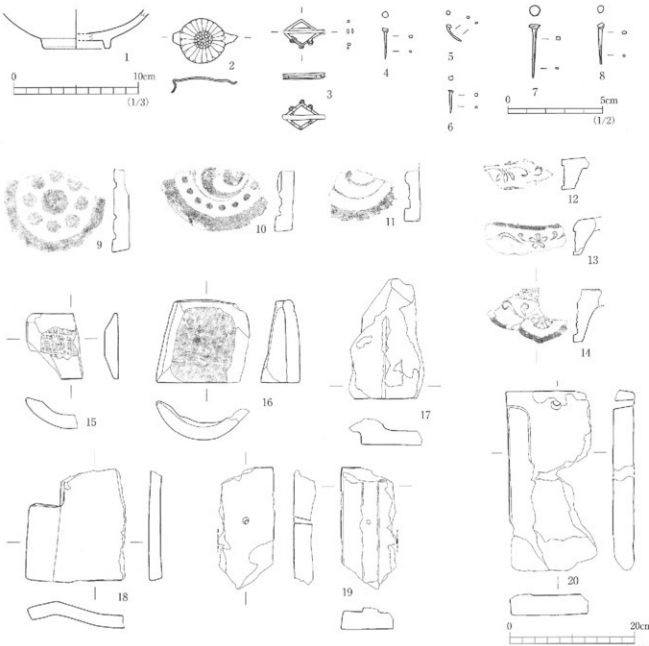
T字瓦１点が出土した（第31図19）。

⑧刻印瓦

刻印のある瓦は２点出土した（第32図29・30）。丸瓦と平瓦各１点である。30はこれまでも確認されている明治期の瓦で、「仙台北（欠損）八番丁渡邉瓦工場明治卅六年」の刻印が見られる。

第12表　第20次調査出土瓦数量表

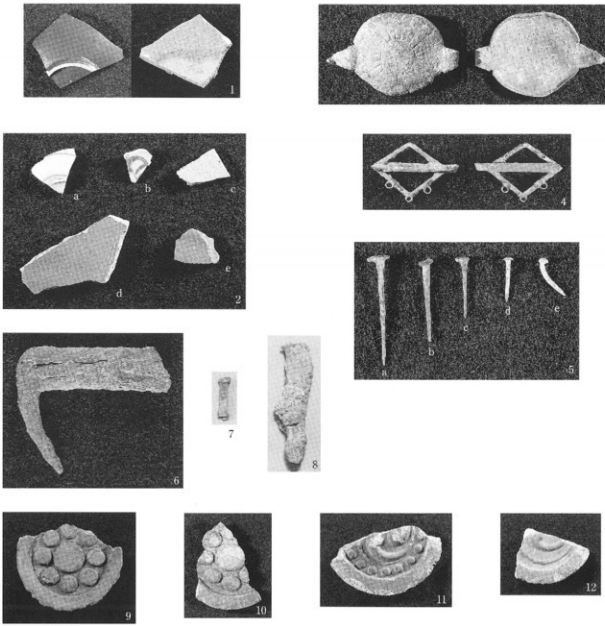
遺構・層位	丸瓦	平瓦	軒丸	軒平	滴水	軒桟	桟丸	冠伏間	丸桟伏間	角桟伏間	桟斗	輪違	面戸	菊丸	差し込み	鬼瓦	菊瓦	胸付平板	桟付平板	丁字	不明	計
撹乱	31	69	3	2	1	1					1	1		1					2		1	112
I	50	134	2					1				1	1				1		1		2	207
II	244	984	8	4		2		1	1	1	3	5	2	2		1			7		6	1271
IIa	20	30	3										1									54
IIb	59	114	2		1																	167
IId	54	29	2	1		1								1	1					1		90
IIIa	4	17					1															22
IIIb		4																				4
KS-17溝上		1																				1
KS-53土		3																				3
KS-53溝上	2	3																				5
KS-59土	4	8																				12
KS-59溝上		1																				1
計	459	1417	19	7	2	4	1	1	2	2	4	7	4	4	1	2	1	2	10	1	9	1959



第31図　第20次調査出土遺物（1：S=1/3　2~8：S=1/2　9~20：S=1/6）

第13表　第20次調査出土遺物観察表

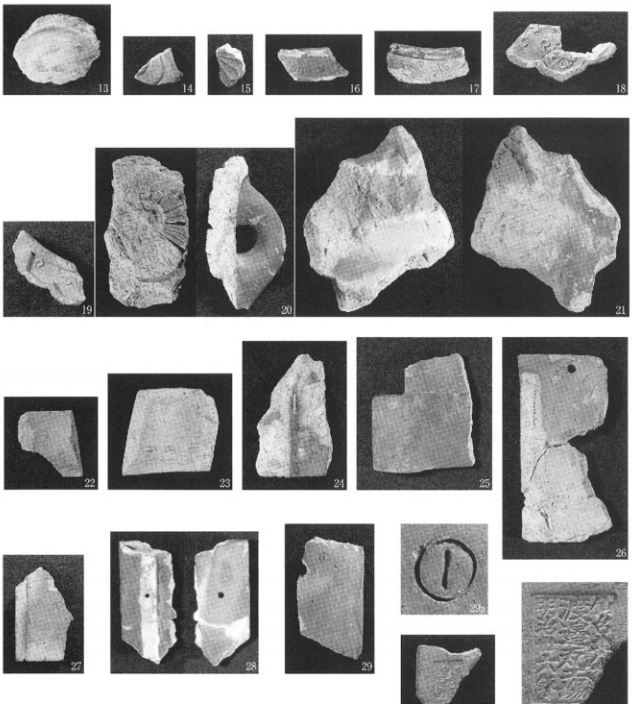
番号	種類	遺物番号	遺構・層位	法量（mm・g）	備考	写真
1	陶器	119	I	口径（-） 器高（31） 底径（56）	須叶3叶3期　大塚相高　18c　外面鉄釉　内面灰釉　景何窯跡	1
2	金銅金具	4	II	全長34　幅24　厚3.0.5	21分の菊花　魚々子打ち	3
3	銅製飾金具	25	II d	全長（22）　幅15　厚3.0.5~1	変形状	4
4	釘彩	1	-	全長15.7　頭部厚2.5　軸部太3.1.2　重量6.14	断面形状角1a類	5c
5	銅釘	21	II	全長11.7　頭部厚2.4　軸部太3.1.2　重量3.10	断面形状丸II a類	5c
6	銅釘	34	II d	全長11.5　頭部厚2.4　軸部太3.1.2　重量6.07	断面形状丸II b類	5d
7	銅釘	63	II 上面	全長28.3　頭部幅（5.8）　軸部太3.2.0　重量6.45	断面形状平丸II類	5a
8	銅釘	132	II a	全長20.2　頭部幅4.3　軸部太3.1.9　重量6.26	断面形状不整形II類	5b
9	耳入瓦（丸瓦）	232	II	瓦当径（13.）　胴部幅20　重量（603.5）		9
10	耳入瓦（唐文・巴）	228	II a	瓦当径（96）　胴部幅24　内区径（70）　珠径15　重量510.6		11
11	耳入瓦（三巴）	6	II	瓦当径（80）　胴部幅20　内区径（60）　重量198.7		12
12	唐平瓦（三葉）	12	II	瓦当幅（85）　重量155.5		16
13	唐平瓦（唐草）	143	抗歌り穴上面	瓦当幅（129）　重量236.0		17
14	流水瓦（奇石）	161	II b	瓦当幅（90）　重量228.4		18
15	面戸瓦	369	I	全長（83）　厚2.21　重量214.2		22
16	軒丸い	54	II	全長（132）　厚3.21　重量517.4		23
17	桟付平板	234	II	厚3.23　重量622.6		24
18	角瓦丸	133	II a	厚3.20　重量765.0		25
19	平宮瓦	192	II	幅（88）　厚3.30　釘穴径11　重量3003		28
20	桟付平板	367	I	全長（280）　厚3.33　釘穴径16　重量1700		36



第32図　第20次調査出土遺物（1・2：S=1/2　3～5：S=1/1　6～8：S=1/2　9～12：S=1/6）

第14表　20次調査出土遺物観察表

写真	遺物番号	種類	遺構・層位	法量（mm・g）	備考
2a	83	磁器	Ⅱ		朱付鋺　肥前　18c？
2b	300	磁器	Ⅱ		青花皿　中国　16c末～17c前
2c	7	陶器	Ⅱ		灰釉大鉢（豆原鉢）　瀬戸美濃
2d	121	陶器	Ⅱ		鉄釉皿鉢　美濃
2e	144	陶器	KS-512埋土2		斐ヶ面　堂塗　中世　外面漬テア　内面押印（同心円状）
6	142	鏡	Ⅱ	全長（41.3）　幅11.5　厚さ5.9　重量7.65	
7	305	鉄釘	Ⅱa	全長（31.2）　重量4.52	
8	305	鉄釘	Ⅱa	全長（63.4）　重量17.9	
10	233	軒丸瓦（九曜）	Ⅱ	瓦当径（134）　文様区（112.7）　瓦縁幅22.1　重量401.3	



第33図　第20次調査出土遺物（S=1/6　29a・30a：S=1/2）

第15表　第20次調査出土遺物観察表

写真	遺物番号	種類	遺構・層位	法量（mm・g）	備考
13	306	野丸瓦（鮎文）	Ⅱ	瓦当径（105）　周縁幅18　重量291.3	
14	22	菊丸瓦	Ⅱ	瓦当径（74）　重量62.5	
15	254	菊丸瓦	Ⅱ	瓦当径（69）　重量43.9	
19	67	滴水瓦	流乱	重量322.3	
20	27	飾り瓦	Ⅰ	重量1200	奇文
21	28	飾り瓦	Ⅱ	重量3120	
27	235	平瓦	Ⅱ	全長（147）　幅（89）　厚さ25　重量407.7	水切有
29	333	丸瓦	流乱	全長（187）　幅（107）　厚さ23　重量651.2	刻印
30	164	平瓦	流乱	全長（92）　幅（101）　厚さ23　重量207.3	刻印「仙台北八番丁（欠損）流逃瓦工場明治卅六年」

5. 理化学分析

放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定は、株式会社加速器分析研究所に委託した。

第20次調査２区撹乱南壁Ⅲ層中より採取した土壌サンプル１点についてAMSによる放射性炭素年代測定を行った。２区撹乱の南壁Ⅲ層はその堆積状況から近世整地層の下層であると判断したが、近世の人為的堆積層かそれ以前の自然堆積層かを明らかにするため、考古学的手法のみならずその年代決定にはあらゆる手段を用いるべきとの判断から実施したものである。

1　測定対象試料

測定対象試料は、２区撹乱南壁Ⅲ層の土壌中の木片（No.C-1：IAAA-82100）の１点である。

2　化学処理工程

①メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。乾燥後、篩がけを行ない、さらに細かな不純物を取り除く。

②酸処理（HCl）により内面的な不純物を取り除く。

③試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で２時間加熱する。

④液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

⑤精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。

⑥グラファイトを内径１mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

3　測定方法

測定機器は、３MVタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4　算出方法

①年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。

②14C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中14C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は、δ13Cによって補正された値である。14C年代と誤差は、１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、14C年代の誤差（$\pm 1\sigma$）は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

③δ13Cは、試料炭素の13C濃度（13C/12C）を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により13C/12Cを測定した場合には表中に（AMS）と注記する。

④pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の14C濃度の割合である。

⑤暦年較正年代とは、年代が既知の試料の14C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の14C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4％）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない14C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、デー

タの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、Int Cal04データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv4.0較正プログラム（Bronk Ramsey 1995　Bronk Ramsey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

5　測定結果

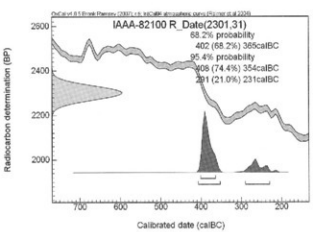
大広間跡２区撹乱南壁のⅢ層の土壌（No.C-1）の14C年代は2300±30yrBPである。暦年較正年代（1σ）は、402～365BCである。

測定対象は土壌であり、盛土が構築された年代を直接的に示すものではないため、調査所見と照合して解釈する必要がある。試料の炭素含有率は0.6％であり、有機物の豊富な土壌とは言えない。二次的な炭素の混入がなければ、土壌自体の由来、つまり土壌が本来帰属した地層の年代を示すと考えられる。近世の盛土であったとしても、盛土を構成する土壌自体は、弥生時代に形成された地層からもたらされたと解釈される。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ13C（‰）（AMS）	δ13C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-82100	No.C-1	大広間跡2区撹乱南壁Ⅲ層	土壌	HCl	-24.74±0.78	2,300±30	75.09±0.30

測定番号	δ13C補正なし		暦年較正用（yrBP）	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-82100	2,300±30	75.13±0.27	2,301±31	402BC-365BC（68.2%）	408BC-354BC（74.4%） 291BC-231BC（21.0%）

［参考値］



第34図　暦年較正年代グラフ

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37 (2), 425-430

Bronk *Ramsey* C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43 (2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43 (2A),381-389

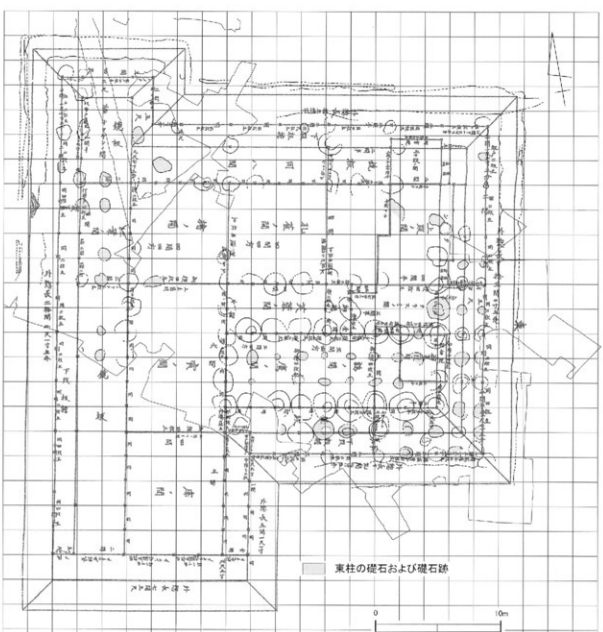
Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbonn* 46, 1029-1058

6. まとめ

第20次調査では、以下①～⑧の成果が得られた。

① 今回の調査区は大広間の南半部で、「裏上段の間」から「鶴の間」・「鷹の間」、「虎の間」にあたる場所である。大広間にかかわる礎石および礎石跡を新たに45基検出した。「虎の間」にあたる場所では、東辺側の礎石跡７基（６間分）を検出し、さらに、西辺で４基、北辺で３基検出した。「虎の間」は、部屋の規模が絵図によって「東西４間、南北５間（40畳）」と「東西４間、南北６間（48畳）」の２種類が描かれている。実際の部屋の規模について、調査で確認する必要があった。今回の調査によって東西４間、南北６間になることが確認された。このことから同様の規模を描いた「御本丸大広間地絵図」が調査成果と一致し、大広間の間取りや配置を検討する上で重要な成果が得られた。また、市有地外である「鹿の間」部分を除き、大広間のほぼ全容を調査したことになる。今後は、これまでの調査成果に基づいて大広間の構造などについて検討していく。

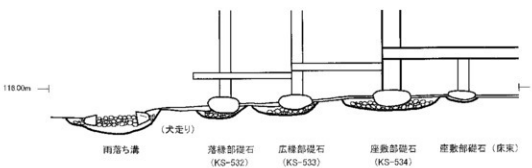
② これまでの調査で確認された礎石跡より小さい束柱の礎石および礎石跡を21基検出した（第35図参照）。束柱



第35図　大広間跡遺構平面図と「御本丸大広間地絵図」の合成図（1/300）　方眼メッシュは６尺５寸（197cm）

は座敷部東辺付近を除き、1間おきに置かれていることがわかった。東柱の礎石抜取り穴の平面形は楕円形のものが多い。規模は径約40～90cm、深さ10～27cmで、形状や規模にばらつきがある。礎石は3つの形態に大別され、KS-20にみられる掘り方を伴わない素掘りのもの、KS-523にみられる穴を掘り内側に粘性土を入れたもの、KS-527にみられる少量の根固め石が入ったものである。礎石設置後は、礎石の周囲を被覆する整地が行われていたと考えられる。今回の調査で大広間が建っていた当時のまま残っていたと観察される東柱の礎石、KS-538・551の2基を検出した。礎石上端の標高レベルは座敷部の礎石であるKS-538が116.010m、広縁部の礎石であるKS-551が115.794mで、比較するとKS-551の方が約30cm低い。このことは、後述する座敷部から雨落ち溝跡に向かって緩やかな勾配があることと関連する可能性が考えられる。

③　3区の東部で大広間廃絶後、礎石抜取り時までの旧表土と考えられるⅢa層を検出した。KS-519・520・532・533・541・542・549・550・556の礎石抜取り穴の検出面である。この層は、直下の整地層であるⅢb1層を叩いて硬くする仕上げをした後に、二百数十年を経て大広間が廃絶されて礎石抜取られる時までに形成されたと考えられる。さらにこの部分では整地層自体の残りが良いため、座敷部から雨落ち溝跡に向かって緩やかな勾配を確認することができた。KS-534（座敷部礎石跡の掘り方）からKS-533（広縁部礎石跡）、KS-532（落縁部礎石跡）、雨落ち溝跡にかけての約3mの勾配は約3°を計る（第36図参照）。



第36図　大広間跡東部断面模式図（1/80）

④　3区東側の拡張部、KS-532（落縁部礎石跡）と雨落ち溝跡の間の軒下部分で上面が非常に硬く締まっているⅢb1層を検出した。この硬化層は層厚が最大6cm、幅約90cmの褐色シルトを主体とする層で、混入物は見られなかった。整地土を叩いて硬くするための作業（犬走りの構築）が行われていたと考えられる。この層は、以前の調査では確認されていないが、大広間の軒下部分には同様の層が存在した可能性がある。

⑤　昨年度の第17次調査で確認された砂礫層（第17・20次調査でのⅢd層）を確認した。分布範囲は大広間跡南西部から北東部へ帯状に伸び、東西約27m、南北約13m、幅約10mである。北東部では、雨落ち溝跡の内側で途切れている（第37図参照）。

砂礫層は、径2～5cmの礫と粗砂から成る層である。1区で1×0.3m、厚さ約2cmの範囲で、この層のサンプルを採取した。その結果、総重量14.8kgのうち砂が9.1kg、礫は5.7kgで、砂と礫の比率は6：4である。このことから砂が主体の整地層であることが言える。2区の砂礫層東辺部では、礫はほとんどなく、砂は細砂が堆積していた。1区の調査では、サンプル採取地点の砂礫層直下に、極めて薄い茶褐色有機質土層を検出した。

砂礫層の性格については、二つの可能性が考えられる。一つは、これまでの調査において大広間跡外側で検出された石敷き遺構と関連する遺構の可能性である。第12次調査では大広間北側の雨落ち溝跡から1.5～3.5mの位置で礫石4基と石敷きを検出した。第15次調査では雨落ち溝跡北東角の北30cmの位置で礫石（KS-432）1基と周囲に石敷きを検出している。ともに大広間内部の整地層直下から検出されており、大広間に先行する近世遺構として報告している。このことから、第17・20次調査で確認された砂礫層については、大広間に先行する建物に伴う石敷き遺構の可能性、もしくは今回調査を行った大広間建築に伴う整地の際に、先行する建物に伴う石敷きを除去した際に、一部残存したものが砂礫層として

検出されたという考え方である。砂礫層と石敷き遺構の特徴を比較すると、砂礫層が砂主体で礫が少なく、瓦片などの遺物が伴わない。一方で石敷き遺構は礫の密度が高く、円礫以外に長軸が50cmほどの角礫や瓦片が混じるなど、特徴に違いがある。現段階では大広間内側で確認された砂礫層と石敷き遺構は区別する必要がある。

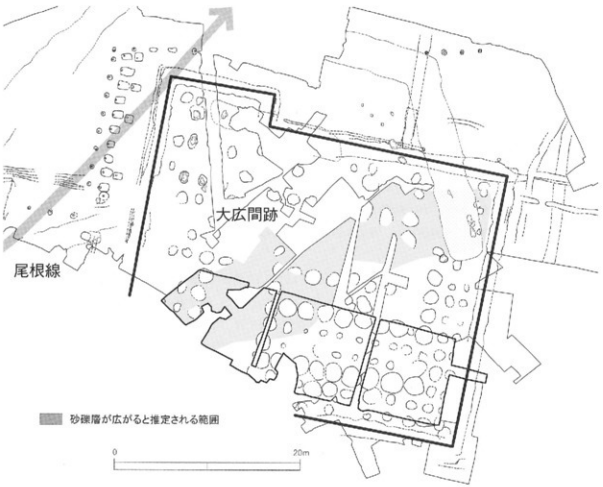
もう一つの考え方は大広間建築時の整地に関わる地業の可能性である。本丸平場の地下水処理や大広間の地盤沈下防止などの用途・機能として、整地の際に砂礫を敷いたという位置付けである。砂礫層の分布範囲と本丸平場の尾根筋ラインが概ね平行していることが理由として挙げられる。また、砂礫層が雨落ち溝跡の内側で途切れていることから、大広間の中にしか存在しない層である可能性がある。

遺構の保存のため、大広間整地層下層での面的な調査は制約があり、砂礫層がいずれの性格かを断定することは難しい。これまでの成果をもとに大広間に先行する建物に伴う石敷き遺構もしくは大広間建築時の整地に関わる地業の2つの可能性を考えておき、結論は今後の調査と研究に待ちたい。

⑥ 大広間跡内部の整地層直下より、礎石と考えられる遺構（KS-581）を1基検出した。礎石上面レベルを見ると、大広間跡南側の礎石群に比べ約20cm低く、大広間の整地層より下層で検出していることから、大広間に先行する建物に関わる礎石の可能性が考えられる。

⑦ 遺物は、磁器、陶器、土師質土器、鋼釘、瓦などが出土した。大広間の建物に関連する遺物として金銅金具1点、銅製飾金具1点、鋼釘26点出土した。

⑧ 放射性炭素年代測定では、補正14C年代値で2300±30yrBPの結果を得た。また、これらの年代値を暦年較正し、概ね紀元前2世紀から3世紀の結果が示された。これは土壌が本来帰属した地層の年代を示すと考えられる。近世の盛土であったとしても、盛土を構成する土壌自体は、弥生時代に形成された地層からもたらされたと解釈される。



第37図　砂礫層（Ⅲd層）分布図（1/400）　太線が第20次調査区

Ⅴ　第21次調査

1．調査目的及び調査経過

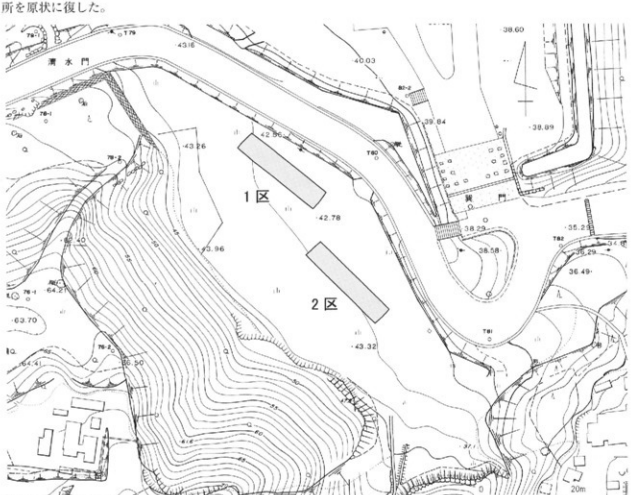
第21次調査は、清水門付近の造酒屋敷跡を対象として、平成20年（2008）８月26日から同年10月29日まで遺構確認のための発掘調査を実施した。調査面積は160㎡である。

調査目的は、清水門の南側に位置し、仙台藩の御用酒屋であった懸森家の屋敷跡や酒蔵跡など、造酒屋敷跡の位置および規模の確認（１区・２区）である。懸森家は、初代仙台藩主伊達政宗が、親しい幕臣である御生宗垣の紹介で、慶長13年（1608）に大和国（現在の奈良県）から招かれ、城内に酒蔵と住宅を与えられて酒造にあたった。その後、明治９年（1876）に廃業するまでの約270年にわたり酒造業を営んだ。

調査区の設定や調査前の現況写真撮影後、８月26日にフェンスを設置し、重機による表土の除去作業を開始した。９月１日から人力による表土除去及び遺構面の検出作業を開始した。

造酒屋敷跡の調査（１区・２区）では、造酒屋敷に伴うと考えられる礎石跡、集石遺構、炉跡、溝跡などを検出した。遺物は、近世の整地層と考えられるⅢ層上面から18世紀代を中心とする磁器、陶器の他、土師質土器、瓦質土器、瓦、古銭などが出土した。

第21次調査は、平成20年３月14日の第19回仙台城跡調査指導委員会において、調査箇所や目的、方法について了承を得て、第20次調査終了後に実施した。調査の進展に伴い、10月10日に実施した第21回仙台城跡調査指導委員会において調査の進め方についての現地指導を受けた。その後、調査区の埋め戻しの作業を行い、10月29日に調査箇所を原状に復した。



第38図　第21次調査区配置図（1/800）

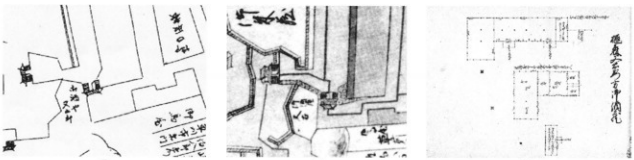
2．旧地形及び基本層序

造酒屋敷跡は、追廻から本丸へ至る登城路の南側、青葉山丘陵の裾部にあたる標高約43mの平場に位置する。北側の三の丸跡がある下町段丘面との間には約３m、東側の巽門跡との間には約５mの比高差がある。平場の南側には青葉山丘陵の斜面が長沼（三の丸堀跡）方向まで伸びていることから、

仙台城の築城時に斜面を盛土して造成された平場であったと推定される。

以下、各区毎に基本層の概要について述べる。

第39図　調査前状況



①

②

③

①仙台城下絵図　『御酒や又五郎』寛文８・９年（1668・69）　第二高等學校所蔵 模写図　昭和11年（1937）模写
②仙台城下絵図　『御酒屋　又右』寛文９年（1669）宮城県図書館蔵
③仙台藩封内神社仏閣等作事方役所修繕ニ属スル場所調　酒蔵部分　寛文～元禄年間（1661～1704）　宮城県図書館蔵

第40図　絵図からみた造酒屋敷

(1) １区

１区の基本層は４層に大別した（第16、17表）。Ⅰ層は近代から現代にかけての盛土層で19層に細分した。Ⅰf層上面で検出した暗渠状遺構から一分金が出土した。Ⅱ層はKS-593段切遺構の埋土上面の盛土層で２層に細分した。近代以降の盛土層である。Ⅲ層は近世の盛土層で３層に細分した。Ⅲa～Ⅲc層はKS-593段切遺構を構築する際の盛土層である。Ⅳ層は、KS-593が構築される以前の整地層で、Ⅳ層上面でKS-596を検出した。また、Ⅳ層上面から17世紀後半以降の肥前陶器が１点出土した。

(2) ２区

２区の基本層は３層に大別した（第18、19表）。Ⅰ層は現代の盛土層である。Ⅱ層は近代以降の盛土層で３層に細分した。Ⅲ層は近世の盛土層で10層に細分した。Ⅲa層は近世の整地面でKS-597をはじめとする遺構の検出面である。遺構に切り合い関係があるため、生活面が複数の時期にまたがる。遺物は17世紀から18世紀にかけての陶磁器や土師質土器などが出土した。19世紀以降の遺物がほとんど見られず、Ⅲ層の一部は近代以降に削平を受けた可能性が推測される。Ⅲb～Ⅲ1層は、下層で見られる段差を平坦にするために盛土された近世以降の整地層と考えられる。

3．検出遺構

(1) 1区

【近世の遺構】

・KS-593段切遺構　調査区南部で検出した。検出面はⅢa層上面であるが、直上に2時期の整地層が見られ、近代以降も使われていたと考えられる。確認できた段の規模は東西2.2m以上、南北3.9m以上、高さは35cmである。遺構の規模は明らかではないが、調査区の大部分を占め、推定で東西15.7m以上、南北14.5m以上である。南側は盛土により構築され、北側が一段低い造成面となっている。また、段と平場の境には上端幅約30cmの溝を検出した。北側の造成面には平場を構築する際の掘り方（掘り方d）と近世の生活面と考えられる整地層（整地土c）を確認した。KS-594・595の検出面である。掘り方より瓦片が出土した。整地土cの上面に炭の層（整地土b）が調査区南側にのみ堆積している。炭の層の上面には長軸3～15cmの花崗岩片を多量に含む層（整地土a）が堆積し、調査区北壁まで広がる。調査区北側では花崗岩片が敷かれたような状態で検出された。また、遺構の範囲外ではあるが、Ⅲa層上面で礎状と思われる擂鉢片が出土した。造成は近代になって人為的に埋め立てられている。

・KS-594溝跡　調査区南部で平面のみ検出した。検出面はKS-593の整地土c上面である。東西方向に延びる溝跡である。長さは2.8m以上、上端幅は30cmである。なお、KS-595との間で18世紀後半の肥前磁器染付鉢片1点が出土した。

・KS-595土坑　調査区南部で平面のみ検出した。検出面はKS-593の整地土c上面である。平面形は不整円形である。規模は東西275cm以上、南北230cm以上である。KS-592に切られる。

・KS-596　調査区南部で平面のみ検出した。検出面はⅣ層上面である。平面形は円形である。規模は東西40cm以上、南北30cm以上である。なお、北側のⅣ層上面で17世紀後半以降の肥前陶器青緑釉皿片1点が出土した。

【近代の遺構】

・KS-589土手跡　調査区北部で検出した。検出面はKS-593整地土a上面である。南北方向に延びる土手跡である。長さは4.4m以上、上端幅は30～100cm、下端幅は2.1～3.5m、高さは約40cmである。KS-593の整地土aの上に花崗岩片を多く含む盛土により構築されている。土手跡の西側にKS-590溝跡があり、湧水量が多いことから、東側に湧水が入らないようにするために造られたものであると推測される。

・KS-590溝跡　調査区北部で検出した。検出面はⅠp層上面である。南北方向に延びる溝跡である。長さは2m以上、上端幅は1.3～1.75m、深さは28cm以上である。西側では溝底に土坑状の落ち込みがみられる。

・KS-591溝跡　調査区北部で検出した。検出面はKS-593埋土1上面である。南北方向に延びる溝跡である。長さは4.5m以上、上端幅は60～160cm、深さは約60cm以上である。なお、断面では埋土2からの掘り込みがみられ、溝がある程度埋まってから掘り直され、2時期にわたって使われていたことがわかった。

・KS-592溝跡　調査区南部で検出した。検出面はKS-593埋土2上面とKS-593整地土b上面であり、2時期の掘り込み面が確認された。南北方向に延びる溝跡である。長さは4.7m以上、上端幅は2～4m、深さは約1.25mである。埋土中に植物遺存体と河原石を多く含む層がみられ、新しい時期の溝の底面であったと考えられる。古い時期の溝の底面には径8～18cmの河原石が敷かれている。また、溝の南壁では杭を1本検出した。

(2) 2区

【近世から近代にかけての遺構】

（Ⅲa層上面検出遺構）

・KS-597礎石　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は方形である。加工の見られない自然石で、長軸42cm、

短軸49cmである。礎石の掘り方は確認できなかった。KS-607より新しい。

・KS-598礎石　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。加工の見られない自然石で、長軸41cm、短軸39cmである。礎石の掘り方は東西79cm、南北64cmである。KS-602より新しい。

・KS-599礎石　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。加工の見られない自然石で、長軸51cm、短軸32cmである。KS-604集石遺構の中で検出し、礎石の掘り方は確認できなかった。

・KS-600礎石　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は方形である。加工の見られない自然石で、長軸60cm、短軸38cmである。礎石の掘り方は確認できなかった。KS-606・640より新しい。

・KS-601礎石　調査区南部で平面のみ検出した。平面形は方形である。加工の見られない自然石で、長軸37cm、短軸29cm以上である。礎石の掘り方は確認できなかった。他の礎石と離れた位置ではあるが、来歴跡が予想される地点であることから、礎石として扱うことにした。

・KS-602炉跡　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。焼け面の範囲は東西69cm以上、南北78cmである。KS-598より古い。

・KS-603炉跡　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は不整形である。焼け面の範囲は東西73cm、南北49cmである。

・KS-604集石遺構　集石は、調査区中央で、東西4.2m、南北3.65mの範囲から検出した。礫の大きさは、径10～60cmほどの自然石が主体を占める。礫の間から17～18世紀代の陶磁器片や土師質土器などが出土した。KS-606と一連の遺構である可能性が考えられる。KS-605より新しい。

・KS-605石列　調査区中央で平面のみ検出した、南北方向に延びる石列である。長さ7.2m以上である。自然石11石と4石の抜取り穴とみられるKS-648を検出した。KS-604・614より古い。

・KS-606木樋跡　調査区中央で平面のみ検出した、南北方向に延びる木樋跡である。長さ4.2m以上、上端幅は40～60cmcmである。木樋は覆土されており、その上には礫などがみられる。口字形で、上部が開口している形状である。KS-610の断ち割り断面で木樋の板材を確認した。材質は不明である。KS-604と一連の遺構である可能性が考えられる。KS-610・640より新しい。

・KS-607土坑　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西74cm以上、南北111cm以上である。KS-597より古い。

・KS-608土坑　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は不整形である。規模は東西153cm、南北225cmである。KS-627・628より古く、KS-613より新しい。

・KS-609土坑　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西102cm以上、南北98cmである。上面には径5～20cmの礫が多数みられ、南東方向にも広がる。

・KS-610土坑　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西56cm以上、南北88cmである。一部断ち割りをし、東壁で木樋の板材を確認した。深さが約10cmである。KS-606より古い。

・KS-611土坑　調査区南部で平面のみ検出した。平面形は方形である。規模は東西265cm以上、南北310cmである。北壁と西壁で並ぶように径10～20cmの河原石がみられる。上部が削平されたためか、残存状況はよくない。KS-616より新しい。

・KS-612土坑　調査区南部で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西40cm以上、南北190cm以上である。

・KS-613溝跡　調査区北部で平面のみ検出したT字型に延びる溝跡である。長さは東西方向が88cm以上、南北方向が78cm以上である。東西方向はKS-608に切られる。規模は東西方向の上端幅が62cm、南北方向の上端幅が22cmである。KS-608より古い。

・KS-614溝跡　調査区中央で平面のみ検出した、南北方向に延びる溝跡である。長さ147cm以上でKS-605・615に切られる。規模は上端幅が28cmで、ほぼ真北方向に延びる。KS-615より古い。

・KS-615溝跡　調査区中央で平面のみ検出した、南北方向に延びる溝跡である。長さ170cm以上でKS-605・614を切る。規模は上端幅が27cmで、ほぼ真北方向に延びる。KS-605・614より新しい。

・KS-616溝跡　調査区南部で平面のみ検出した、東西方向に延びる溝跡である。径10～30cmの河原石がみられるが、上面がKS-611や撹乱に切られ、残存状況はよくない。長さ約7.2m以上、上端幅が90～160cmである。KS-611より古い。

・KS-618　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西114cm、南北114cmである。一部断ち割りをし、東西86cm、南北50cm以上の柱穴と考えられる穴を確認した。

・KS-619　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西67cm、南北54cmである。

・KS-620　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西63cm以上、南北60cm以上である。

・KS-621　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西73cm、南北88cmである。

・KS-622　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西29cm、南北49cm以上である。

・KS-623　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西19cm以上、南北53cm以上である。

・KS-624　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西150cm以上、南北115cmである。一部断ち割りをし、東西90cm、南北45cm以上の礫石の抜取りか柱穴と考えられる穴を確認した。

・KS-625　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西38cm、南北34cmである。

・KS-626　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西29cm、南北29cm以上である。

・KS-627　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西27cm、南北25cmである。KS-608より新しい。

・KS-628　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西33cm、南北35cmである。

・KS-629　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西15cm以上、南北31cm以上である。

・KS-630　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西23cm、南北26cmである。

・KS-631　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西20cm以上、南北28cmである。

・KS-632　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西36cm、南北33cmである。

・KS-633　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西43cm、南北39cmである。埋土からガラス片1点が出土した。

・KS-634　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西21cm、南北23cmである。

・KS-635　調査区北部で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西26cm以上、南北18cm以上である。埋土から一分金1点と18世紀後半の肥前磁器染付碗片1点が出土した。

・KS-636　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西32cm以上、南北26cm以上である。KS-637より古い。

・KS-637　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西12cm以上、南北28cm以上である。KS-636より新しい。

・KS-638　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西22cm、南北20cmである。

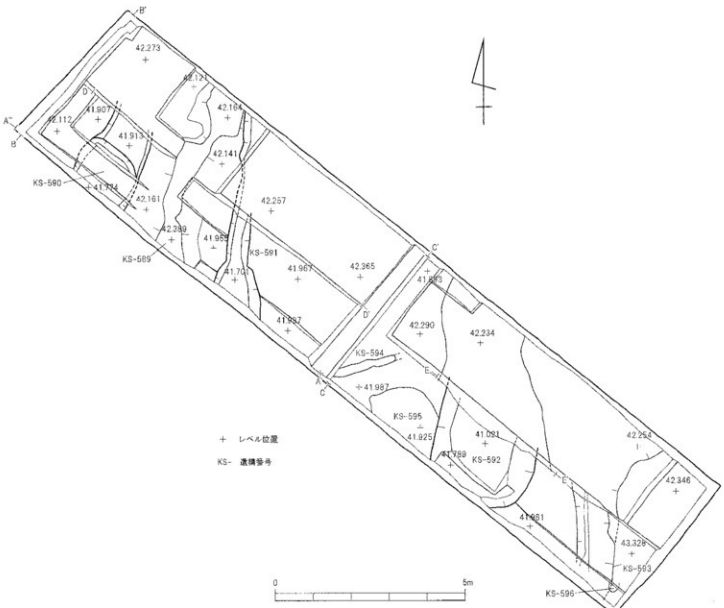
・KS-639　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西22cm以上、南北24cmである。

・KS-640　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西38cm以上、南北34cmである。KS-600・606より古い。

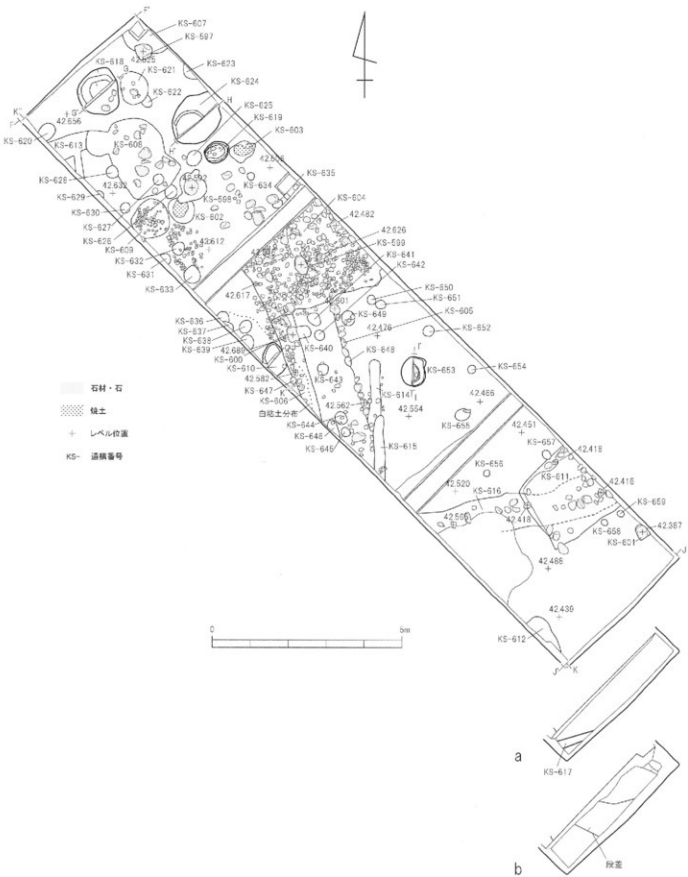
・KS-641　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西31cm、南北36cmである。
・KS-642　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西26cm、南北33cmである。
・KS-643　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西27cm、南北30cmである。
・KS-644　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西25cm、南北29cmである。
・KS-645　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西20cm、南北20cmである。
・KS-646　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西21cm以上、南北38cm以上である。
・KS-647　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西15cm、南北15cmである。
・KS-648　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西19cm、南北27cmである。KS-6054に列に伴う石の抜取り穴とみられる。
・KS-649　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西36cm、南北38cmである。
・KS-650　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西21cm、南北22cmである。
・KS-651　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西26cm、南北23cmである。
・KS-652　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西32cm、南北26cmである。
・KS-653　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西63cm、南北79cmである。一部断ち割りをし、深さ20cmで、径44cmの円形の柱痕跡を確認した。
・KS-654　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西21cm、南北23cmである。
・KS-655　調査区中央で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西40cm、南北33cmである。
・KS-656　調査区南部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西17cm、南北15cmである。
・KS-657　調査区南部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西21cm、南北24cmである。
・KS-658　調査区南部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西17cm、南北18cmである。
・KS-659　調査区南部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西16cm、南北17cmである。
・KS-660　調査区南壁で断面のみ検出した。規模は幅174cm、深さ17cmである。

〈Ⅲe層上面検出遺構〉

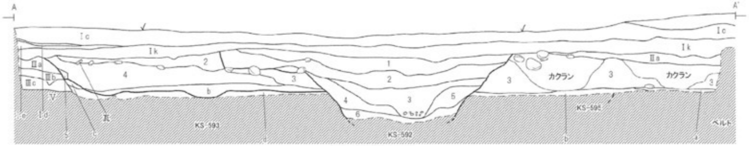
・KS-617溝跡　調査区南部のトレンチで検出した（第42図a）。検出面はⅢe層上面である。東西方向に延びる溝跡である。長さ約１ｍ以上である。規模は上端幅が32～46cm、深さ８cmである。埋土中から瓦片が出土した。



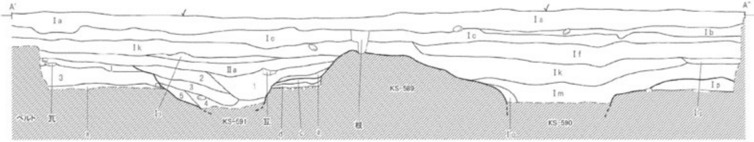
第41図　第21次調査１区Ⅲa層上面遺構平面図（1/100）



第42図　第21次調査２区Ⅲa層上面遺構平面図（a：Ⅲe層上面　b：Ⅳ層上面　1/100）



1区西壁断面図a

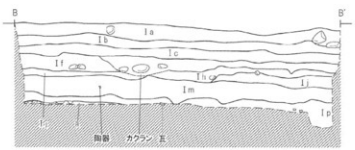


1区西壁断面図b

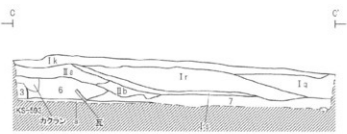
第43図　第21次調査　1区断面図1（1/50・SL=43m）

第16表　第21次調査1区土層注記表

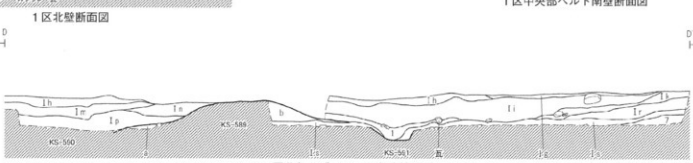
調査区	遺構番号	遺構・層位	土色		土質	土性		備考
			土色No	土色		粘質	しまり	
1	基本層	Ⅰa	10YR4/2	黄褐色	シルト	無	やや有	現表土。径3～20cmの河原石を少量含む。ガラス片、ビニール片を含む。
		Ⅰb	10YR1.7/1	黒色	砂質シルト	無	無	径5～10cmの河原石を少量含む。缶詰缶、カセットテープ片を含む。
		Ⅰc	7.5YR2/2	黒褐色	シルト	無	やや有	径2～20cmの河原石を少量含む。ガラス片、ビニール片を含む。
		Ⅰd	10YR3/2	黒褐色	シルト	無	無	砕石の層。
		Ⅰe	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	有	やや有	2区のⅠb層に相当。
		Ⅰf	10YR3/2	黒褐色	シルト	やや有	やや有	砂を多量に含む。径2～15cmの河原石、腐食土ブロックを少量含む。ガラス片、ビニール片を含む。
		Ⅰj	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	やや有	やや有	径1～6cmの河原石を少量含む。
		Ⅰk	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	やや有	やや有	砂を多量に含む。有機質土を縞状に含む。径、プラスチック片、瓦片を含む。
		Ⅰl	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	やや有	やや有	径3cm前後の河原石、径1～3cmの風化礫、炭化物を少量含む。陶磁器片、ガラス片を含む。
		Ⅰm	10YR4/2	灰黄褐色	粘土	無	強	腐食土ブロックを多量に含む。径2～5cmの河原石、黄褐色シルトブロックを少量含む。ガラス片を含む。
		Ⅰo	7.5Y4/1	灰色	粘土	無	無	砂を多量に含む。植物遺存体を含む。
		Ⅰp	7.5Y3/1	オリーブ黒色	シルト質粘土	有	有	厚さ5cm程度の黄色粘土層との互層。上部に植物遺存体を多く含む。
		Ⅱa	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	有	やや有	にぶい黄橙色砂質シルト（10YR7/4）を多量に含む。径1～5cmの河原石、瓦片を少量含む。
		Ⅲa	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	有	無	径5cm程度の河原石、径3～5cmの風化礫を少量含む。
		Ⅲb	2.5Y6/3	にぶい黄色	粘土質シルト	やや有	有	鉄分を多量に含む。径0.5～20cmの風化礫を少量含む。
		Ⅲc	2.5Y5/3	黄褐色	砂	有	無	径5cm程度の風化礫、炭化物、鉄分を微量に含む。瓦片を含む。
		Ⅳ	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	有	やや有	砂を多量に含む。径3～10cmの河原石を少量含む。瓦片を含む。
	KS-593	埋土1	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	有	有	径3～8cmの河原石、径2～3cmの風化礫を少量含む。鉄分を微量に含む。瓦片を含む。
		埋土2	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	有	無	砂、径1～3cmの風化礫を多量に含む。黄褐色シルトブロックを少量含む。
		埋土3	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	有	やや有	黄褐色シルトブロック、鉄分を多量に含む。径3～10cmの河原石、径2～10cmの風化礫を少量含む。瓦片を含む。
		埋土4	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	有	無	径1～30cmの花崗岩片、鉄分を多量に含む。
		埋土5	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	有	有	黄褐色粘土質シルトブロックを多量に含む。径3～10cmの河原石を少量含む。瓦片を含む。
		整地土a	5Y	オリーブ黒色	砂	有	無	径3～15cmの花崗岩片、径2～3mmの花崗岩粒、金色の雲母を多量に含む。
		整地土b	10YR1.7/1	黒色	炭	無	無	細かな炭片を多量に含む。花崗岩片0.5～2cmの河原石、金色の雲母粒を少量含む。亜炭片。
		整地土c	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	有	やや有	径1～3cmの河原石、炭化物、黄褐色シルトブロックを微量に含む
		掘り方d	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	有	無	径5cm前後の河原石を少量含む。炭化物、瓦片を含む。
	KS-592	埋土1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	やや有	やや有	砂を多量に含む。径2～5cmの河原石、瓦片を含む。
		埋土2	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	やや有	有	砂を多量に含む。径5cm前後の河原石、径1～8cmの風化礫を少量含む。瓦片を含む。
		埋土3	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	無	有	径5～15cmの河原石、鉄分を多量に含む。花崗岩片、瓦片、ガラス片を含む。
		埋土4	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	無	有	下部に砂層がみられる。径3～10cmの河原石、瓦片を含む。
		埋土5	2.5Y5/3	黄褐色	シルト	無	有	砂を多量に含む。径1～3cmの河原石を少量含む。
		埋土6	2.5Y5/2	暗灰黄褐色	粘土質シルト	無	有	鉄分を多量に含む。径1～3cmの河原石、径1～3cmの風化礫を少量含む。下部に炭の層がみられる。
	KS-591	埋土1	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	無	有	鉄分、砂を多量に含む。径1～15cmの風化礫を少量含む。
		埋土2	2.5Y5/3	黄褐色	粘土質シルト	無	有	砂を多量に含む。径3～10cmの河原石を少量含む。炭化物、瓦片を含む。
		埋土3	10YR4/1	褐灰色	粘土	無	強	上部に鉄分を多く含む。砂を多量に含む。径1～3cmの河原石を少量含む。
		埋土4	10YR3/2	黒褐色	粘土	無	有	砂を多量に含む。径3～10cmの河原石、鉄分、植物遺存体を少量含む。
		埋土5	10YR4/2	灰黄褐色	粘土	無	強	砂を多量に含む。鉄分を少量含む。礫0.5～1cm程度の河原石を含む。
	KS-589	整地土a	10YR3/2	黄褐色	シルト	無	やや有	砂を多量に含む。径5cm前後の河原石を含む。
		整地土c	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	有	やや有	径2～3cmの河原石、粘土を少量含む。鉄分を微量に含む。
		整地土d	10YR4/2	灰黄褐色	粘土	無	強	礫を少量含む。



1区北壁断面図



1区中央部ベルト南壁断面図

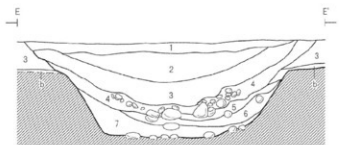


1区北部サブトレンチ東壁断面図

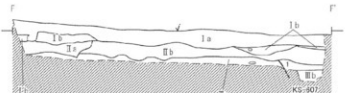
第44図　第21次調査　1区断面図2（1/50・SL=43m）

第17表　第21次調査1区土層注記表

調査区	遺構番号	層位	土色		土質	土性		備考
			土色No	土色		粘質	しまり	
1	基本層	Ia	10YR4/2	黄褐色	シルト	無	やや有	風表土。径3～30cmの河原石を少量含む。ガラス片、ビニール片を含む。
		Ib	10YR3/1	黒色	砂質シルト	無	無	径5～10cmの河原石を少量含む。写植機、ラセットテープ片を含む。
		Ic	7.5YR2/2	黒褐色	シルト	無	やや有	径2～20cmの河原石を少量含む。ガラス片、ビニール片を含む。
		If	10YR3/2	黒褐色	シルト	やや有	やや有	砂を多量に含む。径2～15cmの河原石、鹿食土ブロックを少量含む。ガラス片、ビニール片を含む。
		Ig	2.5Y5/3	黄褐色	シルト	有	やや有	黄褐色シルトブロック（10YR5/6）を多量に含む。径3～5cmの河原石を少量含む。瓦片を含む。
		Ih	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	有	やや有	にぶい黄橙色砂質シルト（10YR7/4）を多量に含む。径1～5cmの河原石、瓦片を少量含む。
		Ii	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	無	やや有	鉄分を多量に含む。径2～10cmの河原石を少量含む。炭化物、瓦片を含む。
		Ij	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	やや有	やや有	径1～6cmの河原石を少量含む。
		Ik	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	やや有	やや有	砂を多量に含む。有機質土を縞状に含む。径、プラスチック片、瓦片を含む。
		Im	10YR4/2	灰黄褐色	粘土	無	強	鹿食土ブロックを多量に含む。径2～5cmの河原石、黄褐色シルトブロックを少量含む。ガラス片を含む。
		In	2.5Y4/2	暗灰黄褐色	砂質シルト	無	やや有	径0.5cm前後の風化礫を少量含む。径3～5cmの河原石、花崗岩片を微量に含む。
		Ip	7.5Y3/1	オリーブ黒色	シルト質粘土	有	有	厚さ5cm程度の黄色粘土層との互層。上部に植物遺存体を多く含む。
		Iq	2.5Y5/2	暗灰黄褐色	シルト	有	無	鉄分を多量に含む。厚1～3cm単位の河原石を少量含む。下部に薄い炭の層がみられる。
		Ir	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	有	無	黄褐色シルトブロック、黒褐色シルトブロック、鉄分を多量に含む。径2～20cmの河原石を少量含む。瓦片を含む。
		Is	2.5Y5/2	暗灰黄褐色	粘土質シルト	無	有	径3～5cmの河原石、瓦片を微量に含む。
		Ea	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	有	やや有	にぶい黄橙色砂質シルト（10YR7/4）を多量に含む。径1～5cmの河原石、瓦片を少量含む。
		Eb	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	有	無	褐色シルトブロック、径1～5cmの風化礫を少量含む。
	KS-593	埋土3	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	有	やや有	黄褐色シルトブロック、鉄分を多量に含む。径3～10cmの河原石、径2～10cmの風化礫を少量含む。瓦片を含む。
		埋土6	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	有	やや有	径1～30cmの花崗岩片、鉄分を多量に含む。
		埋土7	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	有	やや有	砂、黄褐色粘土質シルトブロックを多量に含む。径3～5cmの河原石を少量含む。鉄分、炭化物を微量に含む。瓦片を含む。
		整地土a	5Y	オリーブ黒色	砂	有	無	径3～15cmの花崗岩片、径2～3mmの花崗岩粒、金色の雲母を多量に含む。
	KS-591	埋土1	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	無	有	鉄分、砂を多量に含む。径1～15cmの風化礫を少量含む。
	KS-589	整地土a	10YR3/2	黒褐色	シルト	有	やや有	砂を多量に含む。径5cm前後の河原石を含む。
		整地土b	2.5Y5/3	黄褐色	粘土質シルト	やや有	有	上部に鉄分、花崗岩片を多く含む。径25cmの河原石を含む。



1区KS-592東壁断面図



2区北壁断面図

2区KS-618断面図

2区KS-624断面図

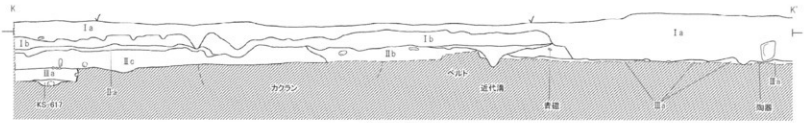
2区KS-653断面図

2区南壁断面図

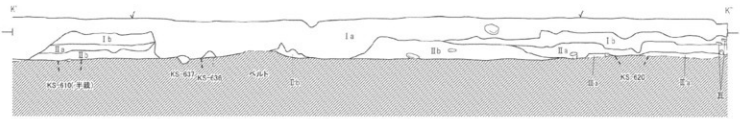
第45図　第21次調査　1・2区断面図（1/50・SL=43m）

第18表　第21次調査1・2区土層注記表

調査区	遺物番号	遺構・層位	土色		土質	土性		備　考
			土色No	土色		粘質	しまり	
1	KS-592	埋土1	10Y3/4-3	にぶい黄褐色	シルト	やや有	やや有	砂を多量に含む。径2～5cmの河原石、瓦片を含む。
		埋土2	10Y3/4-2	灰黄褐色	シルト	やや有	有	砂を多量に含む。径5cm前後の河原石、径1～8cmの風化礫を少量含む。瓦片を含む。
		埋土3	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	無	有	径5～15cmの河原石、鉄分を多量に含む。花崗岩片、瓦片、ガラス片を含む。
		埋土4	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	無	有	下部に砂層がみられる。径3～10cmの河原石、瓦片を含む。
		埋土5	2.5Y5/3	黄褐色	シルト	無	有	砂を多量に含む。径1～3cmの河原石を少量含む。
		埋土6	2.5Y5/2	暗灰黄褐色	粘土質シルト	無	有	鉄分を多量に含む。径1～3cmの河原石、径1～3cmの黒化礫を少量含む。下部に炭の層がみられる。
		埋土7	1/Y4/1	灰色	シルト質粘土	無	有	砂、径0.5～20cmの礫を多量に含む。下層が心置きとなっている。
2		基本層 Ⅰa	10Y3/2-2	黒褐色	シルト	無	無	現表土。径3～30cmの河原石を含む。
		Ⅰb	2.5Y6/2	暗灰黄色	シルト	無	有	径1～5cmの河原石を少量含む。
		Ⅰa	10Y2/2-2	黒褐色	シルト	無	無	径2～20cmの河原石を少量含む。
		Ⅰc	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	やや有	無	黒土ブロックを多量に含む。径1～5cmの河原石、鉄分を少量含む。炭化物を微量に含む。瓦片を含む。
		Ⅱa	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂	有	無	黒化礫を多量に含む。褐灰色シルト質砂（10YR4/1）を部分的に含む。径、鉄分、炭化物を含む。
		Ⅱb	2.5Y4/3	暗灰黄色	シルト	有	やや有	黒化礫を多量に含む。径2～5cmの河原石を少量含む。鉄分、炭化物を微量に含む。
		Ⅱc	10Y3/6-3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	無	有	鉄分を多量に含む。径3～15cmの河原石を少量含む。
		Ⅱd	10Y5/2	灰黄褐色	粘土質シルト	無	有	鉄分を多量に含む。径5～15cmの河原石、風化礫を少量含む。
		Ⅱe	2.5Y5/2	暗灰黄色	粘土質シルト	やや有	有	黄褐色砂質シルトブロック、径2～10cmの河原石、鉄分を少量含む。
		Ⅱf	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	やや有	有	砂を多量に含む。径5cm程度の河原石、鉄分を少量含む。
		Ⅱg	2.5Y6/3	にぶい黄色	粘土	無	有	鉄分を多量に含む。径3～5cmの河原石、径1～3cmの風化礫を少量含む。
		Ⅱh	7.5GY5/1	緑灰色	粘土	無	強	径3～5cmの河原石、鉄分を少量含む。
		Ⅱi	10GY5/1	緑灰色	シルト質粘土	やや有	有	砂を多量に含む。
	KS-607	埋土1	10Y3/4-2	灰黄褐色	砂質シルト	有	無	黒化礫、炭化物を少量含む。底面に部分的に炭の層が堆積する。
	KS-618	埋土1	10Y4/1	褐灰色	シルト	やや有	無	砂を多量に含む。河原石、礫を少量含む。
		埋土2	10Y4/3	黄褐色	シルト	無	無	砂を多量に含む。炭化物を微量に含む。
		埋土3	10Y3/4-2	灰黄褐色	シルト	有	無	砂を多量に含む。
		埋土4	10Y3/4-2	灰黄褐色	シルト	有	無	砂、黒化礫を多量に含む。炭化物を微量に含む。
	KS-624	埋土1	10Y3/2-2	黒褐色	砂質シルト	やや有	無	砂、径10cm程度の河原石、径15cm程度の黒化礫、炭化物を多量に含む。礎土ブロックを少量含む。
		埋土2	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	有	無	砂、炭化物を多量に含む。河原石、瓦片を少量含む。
	KS-653	埋土1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	やや有	無	砂を多量に含む。径3～5cmの河原石を少量含む。炭化物を微量に含む。
		埋土2	2.5Y4/1	灰黄褐色	砂質シルト	有	無	砂、径0.5～1cmの黒化礫を多量に含む。径3～5cmの河原石を少量含む。磁器片、瓦片を含む。
	KS-617	埋土1	2.5Y4/1	黄灰色	シルト	やや有	有	砂、径1cm前後の黒化礫を多量に含む。河原石、鉄分を少量含む。
	KS-660	埋土1	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	やや有	やや有	砂を多量に含む。径1～3cmの河原石、瓦片を含む。



2区西壁断面図a

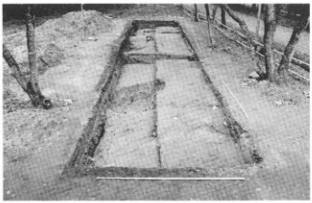


2区西壁断面図b

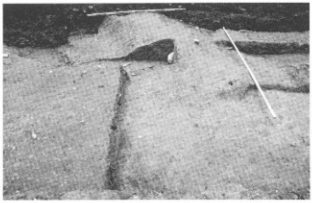
第46図　第21次調査　2区断面図（1/50・SL=43m）

第19表　第21次調査2区土層注記表

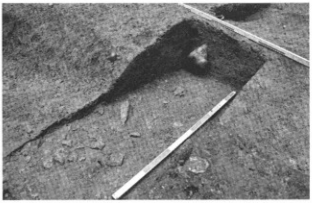
調査区	遺物番号	遺構・層位	土色		土質	土性		備　考
			土色No	土色		粘質	しまり	
2	基本層	Ⅰa	10YR3/2	黒褐色	シルト	無	無	現表土。径3～30cmの河原石を含む。
		Ⅰb	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト	無	有	径1～5cmの河原石を少量含む。
		Ⅱa	10YR2/2	黒褐色	シルト	無	無	径2～20cmの河原石を少量含む。
		Ⅱb	2.5Y4/1	黄灰色	シルト質砂	有	無	有機質土を縞状に含む。径を含む。ガラス片を含む。
		Ⅱc	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	やや有	無	撹乱土ブロックを多量に含む。径1～5cmの河原石、鉄分を少量含む。炭化物を微量に含む。瓦片を含む。
		Ⅲa	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂	有	無	風化礫を多量に含む。褐灰色シルト質砂（10YR4/1）を部分的に含む。径、鉄分、炭化物を含む。
	KS-617	埋土	2.5Y4/1	黄灰色	シルト	やや有	有	砂、径1cm前後の風化礫を多量に含む。河原石、鉄分を少量含む。



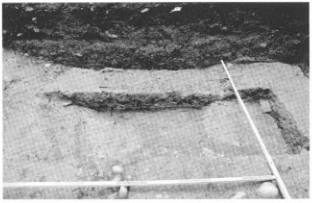
1区　全景（南東から）



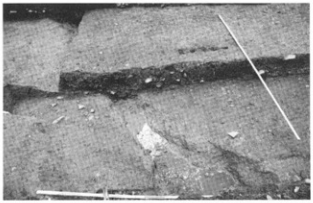
1区　KS-589検出状況（北東から）



1区　KS-589断ち割り断面（東から）



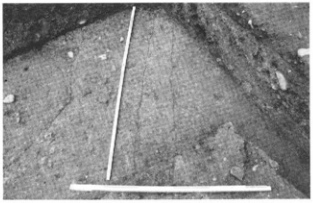
1区　KS-590検出状況（北東から）



1区　KS-591検出状況（南から）

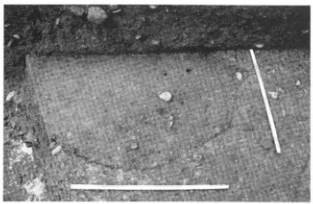
1区　KS-592検出状況（南西から）

1区　KS-593検出状況（北西から）

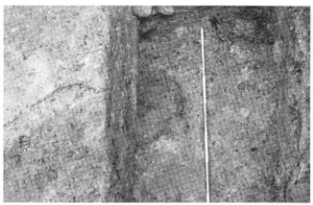


1区　KS-594検出状況（東から）

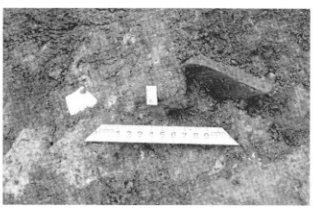
第47図



1区　KS-595検出状況（東から）



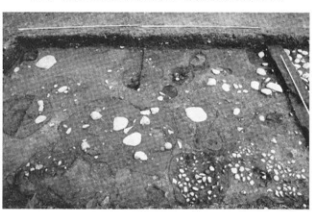
1区　KS-596検出状況（北西から）



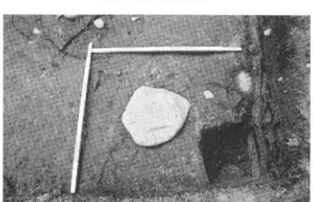
1区　I層一分金（No.7）出土状況

1区　KS-593整地土c磁器片（No.106）出土状況

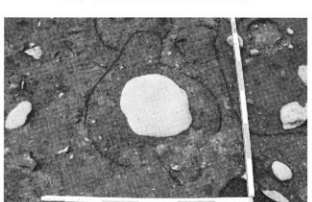
2区　全景（北西から）



2区　北部遺構検出状況（南西から）

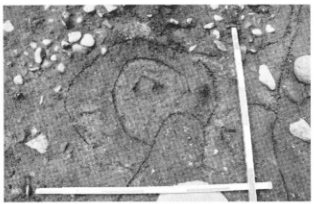


2区　KS-597検出状況（北東から）

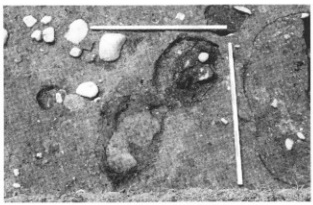


2区　KS-598検出状況（北東から）

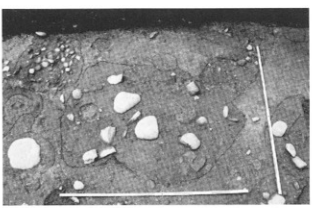
第48図



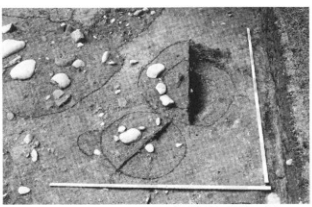
2区　KS-602検出状況（北東から）



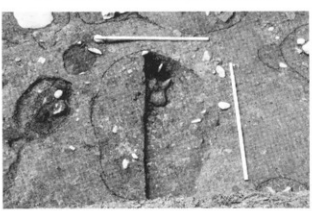
2区　KS-603・619検出状況（北東から）



2区　KS-608・627・628検出状況（北東から）

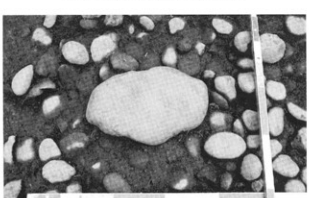


2区　KS-618・621・622検出状況（北東から）

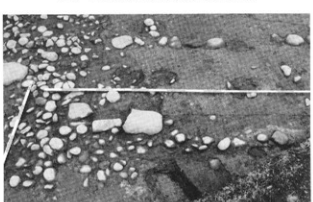


2区　KS-624検出状況（北東から）

2区　中央部遺構検出状況（南西から）



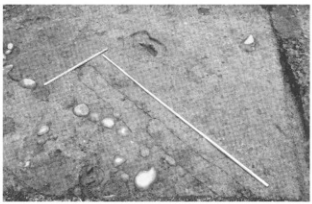
2区　KS-599検出状況（東から）



2区　KS-600・606・610検出状況（南西から）

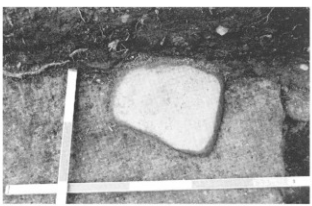
第49図

2区　KS-604検出状況（北東から）

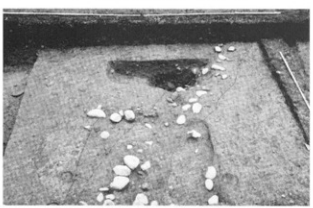


2区　KS-614・615検出状況（南西から）

2区　南部遺構検出状況（南西から）

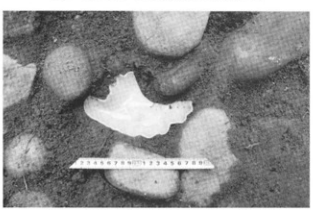


2区　KS-601検出状況（南西から）

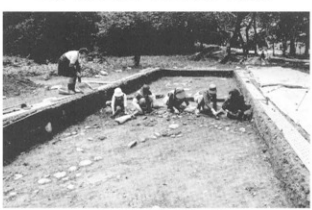


2区　KS-611・616検出状況（北東から）

2区　KS-635埋土一分金（№118）出土状況



2区　KS-604上面磁器皿（№92）出土状況



2区　作業風景（南東から）

第50図

4. 出土遺物

各遺物の出土点数については、区・遺構・層位別の数量表（第20～24表）を作成し、報告書掲載遺物については観察表（第25～41表）を付した。なお、陶磁器の点数は、接合・分類作業を行い同一個体と判断されるものを1点とし、それ以外は全て破片数として算出した。

(1) 磁器（第20表）

磁器は470点出土した。1区では、Ⅰ・Ⅱ層からの出土が多い。出土した近世磁器についてみると17世紀中ごろから19世紀中ごろまでのものが多い。産地は肥前が圧倒的多く、瀬戸美濃や波佐見が僅かにみられる。器種は碗、皿、鉢、瓶などである。KS-593の整地下c上面から18世紀後半の肥前磁器染付鉢片1点が出土した。（第57図17）。

2区では、Ⅲ層から多くの近世磁器が出土した。それぞれ17世紀中ごろ～18世紀後半を主体とする資料である。産地は肥前がほとんどで、僅かに波佐見がみられる。器種は、碗、皿、小鉢などである。2区のⅠ層から、19世紀後半ヨーロッパ産のカップ片が出土した（第58図26）。

第20表　第21次調査出土陶磁器他数量表

区	遺構・層位	磁器	陶器	土師質土器	瓦質土器	ランガ	計
1	表採	15	3				18
	Ⅰ	198	317	36	1		552
	Ⅱ	67	24	3			74
	KS-591整上1	1		2			3
	KS-592整上1	15	2				17
	KS-592下a3	2	2	2			6
	KS-592整上7	2	1				3
	KS-593下a	3	8	2			13
	KS-593整地下a	1					1
	KS-593整地上b					2	2
	KS-593整地下c	1		2			3
	KS-593掘り方d		1				1
	Ⅳ		1				1
	1区小計	285	338	47	1	2	693
2	表採		1				1
	撹乱	3	5	4	1		13
	Ⅰ	78	19	5	3		105
	Ⅱ	48	79	5			123
	Ⅲa	47	110	30	2		189
	KS-604	1	2	1			4
	KS-605	1					1
	KS-606	1					1
	KS-610掘り方			1			1
	KS-610埋土		1				1
	KS-618埋土	1	5	1			7
	KS-619埋土	1					1
	KS-621埋土	1		1			2
	KS-624埋土		2	1			3
	KS-633埋土		1				1
	KS-634埋土	2					2
	KS-642埋土		2				2
	KS-653埋土	1					1
	2区小計	185	218	59	6	0	468
	計	470	556	106	7	2	1,141

(2) 陶器（第20表）

陶器は576点出土した。1区では、Ⅰ・Ⅱ層からの出土が多い。出土した近世陶器についてみると17世紀後半から19世紀前半ごろまでのものが多い。産地は大堀相馬が多く、他に小野相馬、肥前（唐津を含む）、京・信楽系、堤などがみられる。器種は、碗、皿、鉢、擂鉢、壺、瓶類、土瓶、仏飯器、小坏、豆腐などがある。近世のⅢa層上面では堤焼と思われる擂鉢片が出土した。Ⅳ層上面から17世紀後半以降の肥前陶器青緑釉皿片1点が出土した。

2区では磁器と同様にⅢ層から多数出土した。産地は、大堀相馬、肥前（唐津含む）、瀬戸美濃、岸系、堤などである。器種は、皿、鉢、擂鉢、瓶類、灯明皿、仏飯器などがみられる。

(3) 土師質土器（第20表）

土師質土器は96点出土した。皿が多い。ほとんどが法量復元のできない小片であるため、口径等に関して全体的な傾向を知ることは困難である。口径の計測または復元できたものは、燈明皿4点、皿4点、鉢1点、蓋1点、焼塩壺1点である。すべて図示した（第55図1～11）。

(4) 瓦質土器（第20表）

瓦質土器は7点出土した。すべて破片資料である。1区Ⅰ層から器台1点が出土した。2区では火鉢3点、鉢類2点、不明1点がⅠ層とⅢ層から出土した。火鉢2点を図示した（第60図87）。

(5) レンガ（第20表）

レンガ２点出土した。ともに１区KS-593の整地土b（炭の層）からの出土である。

(6) 瓦（第21表）

瓦は総計1,184点出土し、このうち丸瓦が237点、平瓦が677点で併せて全体の77％を占める。１・２区とも、多くは近代以降の層から出土している。丸瓦、平瓦を中心に軒丸瓦、軒平瓦、桟瓦、伏間瓦、輪違い、平板類など多様な瓦が出土している。

①軒丸瓦　４点出土した。瓦当文様の判別可能なものは28点である。文様構成は、１区が桐文１点（第55図12）、九曜文２点、三巴文15点、珠文三巴文８点である。２区は三巴文１点、珠文三巴文１点である。すべて１・Ⅱ層からの出土である。

②軒平瓦　23点出土した。瓦当文様の判別可能なものは13点である。文様構成は、１区が菊花文３点、桔梗文３点花菱文２点、梅文１点（第56図１）である。すべてⅠ・Ⅱ層からの出土である。２区は菊花文１点、桔梗文１点、花菱文１点である。Ⅲ層からの出土が多い。Ⅰ層から桔梗文１点が出土した（第55図15）。

③桟瓦　17点出土した。丸桟瓦15点、角桟瓦１点、不明１点である。うち１点図示した（第56図６）。

④棟瓦　主に棟に使用される瓦を棟瓦と総称する。26点出土した。内訳は、１区が伏間瓦５点、輪違い７点、面戸瓦1点である。すべて近代以降の層から出土している。２区は、面戸瓦２点が撹乱とⅢ層から出土した。伏間瓦１点（第60図102）、面戸瓦２点（第56図３・第60図97）、輪違い１点（第60図４）を図示した。

⑤飾り瓦　１区から詳細不明の１点が出土した（第60図104）。

⑥駒瓦　１区から駒巴39点、駒桟瓦５点が出土した。うち１点図示した（第60図103）。

⑦塀瓦　123点出土した。これは、平板、木切り、桟付平板、駒付平板の総数である。２点を除き、すべて１区から出土した。平板１点（第56図７）、木切４点、桟付平板３点、駒付平板６点が出土した。すべて近代以降の層から出土している。

⑧その他　この他、種別不明の瓦が２点出土した。うち１点図示した（第60図105）。

第21表　第21次調査出土瓦数量表

区	遺構・層位	丸瓦	平瓦	軒丸	軒平	桟瓦	桟伏間	桟軒平	輪違	面戸	飾り	駒巴	駒桟	塀	平板塀	木切	桟付平板	駒付平板	小計	計
1	表採				1						1									2
	Ⅰ	107	236	11	8	5	1		1	1		15	2	27		2	1			417
	Ⅱ	15	96	5	3				1	1		3		5	1			2	1	93
	KS-591暗土１	2	7		1								1	2						13
	KS-592粗ャ１	13	35	1		7	1	1	1	3		4		21			2			89
	KS-592黒土２	4	14	1							1	5		2		2		2		31
	KS-592ラキ３	3	8	1		2								7						23
	KS-592黒土７	1	9									1								11
	KS-593暗土	68	247	13	5	3	3		2	5		11	2	33				2	1	395
	KS-595整地土a	3	9						2					10						24
	KS-593撹り方d	1	3																	3
	１区小計	219	623	32	18	17	5	1	7	11	1	39	5	107	1	4	3	6	2	1101
2	表採		1																	1
	撹乱	1			1									1						3
	Ⅰ	7	24	1																32
	Ⅱ	5	11	1	2															19
	Ⅲ	3	14		2				1					1						21
	KS-618黒ャ	1	1																	2
	KS-621暗土		2																	2
	ピ	1	1																	2
	２区小計	18	54	2	5	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	83
	計	237	677	34	23	17	5	1	7	13	1	39	5	109	1	4	3	6	2	1184

(7) 金属製品（第22表）

32点出土した。内訳は煙管５点、ボタン２点、簪笄２点、鉄釘４点、銭貨10点、その他９点である。煙管は吸口３点、羅宇（胴部）１点、火皿１点である。火皿１点を図示した（第56図12）。銭貨は一分金２点、寛永通宝６点、近代銅貨２点である。一分金は、１区Ⅰ層の暗渠状遺構と２区KS-635の排土から１点ずつ出土した（第56図９・10）。２区で出土したものには乾の字がみられ、宝永７年（1710）から正徳４年（1714）に鋳造された宝永一分金である。共伴遺物として17世紀末から18世紀初めの肥前磁器染付皿が出土している。寛永通宝は１区では１・Ⅱ層から古寛永３点、新寛永１点出土した。２区ではⅢ層上面から古寛永１点、新寛永２点出土した。新寛永２点は重なった状態で出土した。古寛永２点を図示した（第56図11・第60図111）。２区Ⅰ層から二銭銅貨と一銭銅貨が１点ずつ出土した。１区Ⅳ層上面で鉄滓らしきものが２点出土した。

第22表　第21次調査出土金属製品数量表

K	遺構・層位	煙管	ボタン	簪笄	鉄釘	銭貨	その他	計
1	Ⅰ	2	2		1	3	4	12
	Ⅱ	1				1		2
	KS-592埋土２						1	1
	KS-593埋土					1		1
	KS-593整地土a				1			1
	KS-593整地土b						2	2
	Ⅳ						2	2
	１区小計	3	2	0	2	5	9	21
2	攪乱			1				1
	Ⅱ					2		2
	Ⅲ	2		1	1	2		6
	KS-621埋土１				1			1
	KS-635埋土１					1		1
	２区小計	2	0	2	2	5	0	11
	計	5	2	2	4	10	9	32

(8) ガラス・石製品（第23表）

ガラス68点、石製品４点出土した。ガラスはⅠ・Ⅱ層からの出土が多い。KS-593の整地土a（花崗岩片を多量に含む層）、整地土b（炭の層）からも出土した。石製品は水晶１点、砥石１点、その他の石製品２点である。

第23表　第21次調査出土ガラス・石製品数量表

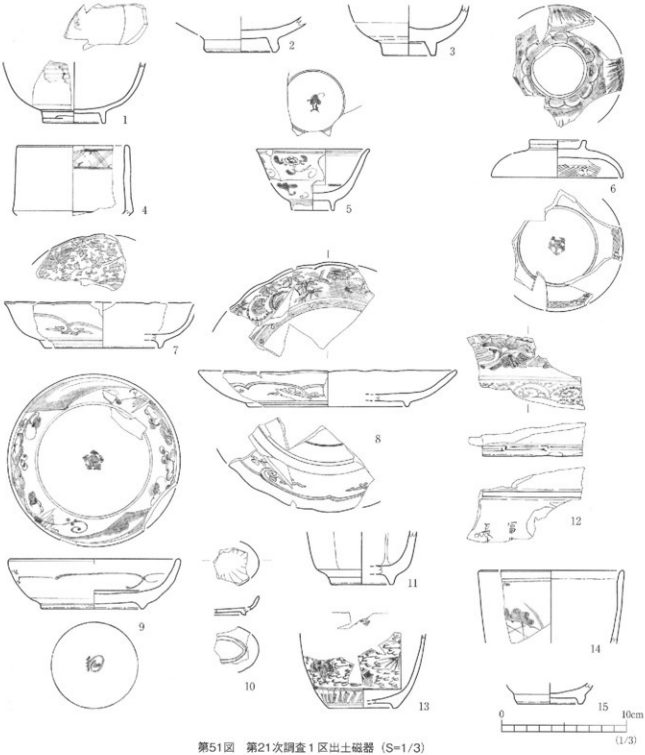
K	遺構・層位	ガラス	水晶	砥石	その他	計
1	Ⅰ	53				53
	Ⅱ	5				5
	KS-593整地土a	1				1
	KS-593整地土b	4				4
	１区小計	63	0	0	0	63
2	攪乱			1		1
	Ⅰ	1			1	2
	Ⅱ	2				2
	Ⅲ	1	1			2
	KS-636埋土１	1				1
	KS-633埋土１				1	1
	２区小計	5	1	1	2	9
	計	68	1	1	2	72

(9) 木製品（第24表）

５点出土した。漆器の破片１点以外は、用途不明である。

第24表　第21次調査出土木製品数量表

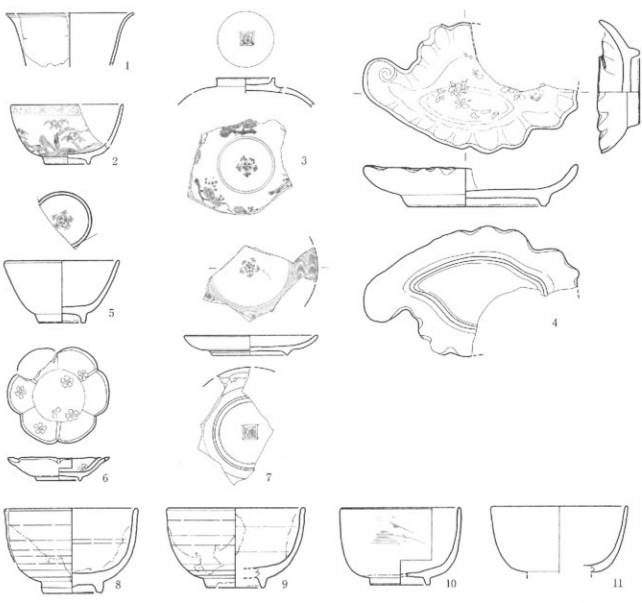
K	遺構・層位	漆器	その他	計
1	Ⅰ		2	2
	KS-592埋土３		1	1
	１区小計	0	3	3
2	Ⅱ	1		1
	Ⅲ		1	1
	２区小計	1	1	2
	計	1	4	5



第51図　第21次調査１区出土磁器（S=1/3）

第25表　第21次調査１区出土磁器観察表

番号	遺物番号	区	遺構・層位	種類	生産地	器種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	文様等	備考	写真
1	263	1	Ⅰ	染付	肥前	碗	17c後	－	(50)	(48)	雅菊文？　見込に文様有	漆継ぎ直有	1
2	258	1	Ⅰ	青磁染付	肥前	碗	19c前～中	－	60	(28)	外面（青磁）　内面（透明釉）		2
3	270	1	Ⅱ	青磁	肥前	碗	17c中	－	42	(40)	内面透明釉（掛け分け）		3
4	124	1	Ⅰ	青磁染付	肥前	菊形碗	18c後	90	－	(56)	外面青磁釉　内面四方禅文（見込圏線）		4
5	327	1	Ⅰ	染付	瀬戸美濃	落反碗	19c前	(90)	(34)	49	伯足文　見込文様有		5
6	270	1	Ⅱ	染付	肥前	蔵	18c後	(104)	－	30	見込　五弁花（コンニャク印刷）　四方禅文		6
7	258	1	Ⅰ	染付	肥前	輪花皿	17c末～18c前	(156)	(94)	36	雌唐草文　菊草文		7
8	302	1	Ⅰ	染付	肥前	輪花皿	18c前	(205)	(128)	29	菊に枝垂文か　雪輪文　外面　菊草文		8
9	262	1	Ⅰ	染付	波佐見	皿	18c後～19c初	136	82	40	蝸文＋菊草文　見込コンニャク印刷　五弁花　高台内　渦樫鉄　表文様　唐草文		9
10	320	1	Ⅰ	白磁	肥前	菊花紅皿	18c前	－	－	15	梅円菊花形	内面樹内　高台貼り付け	10
11	327	1	Ⅰ	青磁	肥前	角皿	18c末～19c初	－	(50)	(43)		六角形	11
12	262	1	Ⅰ	染付	肥前	長皿	18c前	－	－	(27)	見込に草花文　体部　蝸唐草　高台墓　雷文？	日海１	12
13	324	1	Ⅰ	染付	肥前	鉢	18c前	－	(52)	(59)	六弁花雲文　底部付近瀬弁文　渦鳥咬　見込　手掛き五分花　高台内鉄有		13
14	324	1	Ⅰ	染付	肥前	蔵付鉢	18c	(116)	－	(58)	草文	口唇部漆釉	14
15	258	1	Ⅰ	青磁	肥前	瓶	18c後	－	(52)	(17)	内面胡釉		15



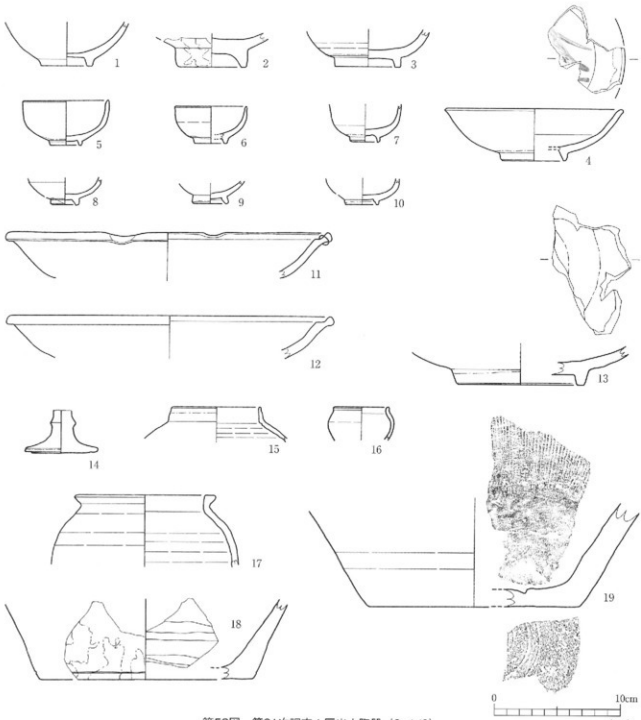
第52図　第21次調査２区出土磁器・陶器１（S=1/3）

第26表　第21次調査２区出土磁器観察表

番号	遺物番号	区	遺構・層位	釉 調	生産地	器 種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	文 様 等	備 考	写真
1	41	2	Ⅱ a	染付	肥前	小杯	－	100	－	(44)		砂継ぎ痕有	18
2	119	2	KS-635埋土	染付	肥前	碗	18c後	(88)	36	48	渦雲文（家＋網ホ） 内 方墨文 畏四ヨ花文		19
3	301	2	Ⅱ	青磁染付	肥前	蓋	18c	(108)	－	(22)	蔵持銘 松竹梅文 高台内 二重枠表銘有 見込 手指３五弁花		20
4	92	2	KS-604上面	青磁	波佐見	変形皿	17c中	169×160	110×60	33	青磁白釉草花文		27
5	40	2	Ⅱ a	青磁染付	肥前	碗	18c後	(90)	(36)	50	五弁花文		21
6	114	2	Ⅱ a	白磁	肥前	梅皿群	17c末～18c初	79	34	19	白磁凸線梅花文散蔓花唐 型打ち成形		22
7	117	2	KS-635埋土	染付	肥前	皿	17c末～18c初	(105)	(60)	16	放文？四重圏線 見込手描き五弁花 高台内二重枠銘陶有	口縁	23

第27表　第21次調査２区出土陶器１観察表

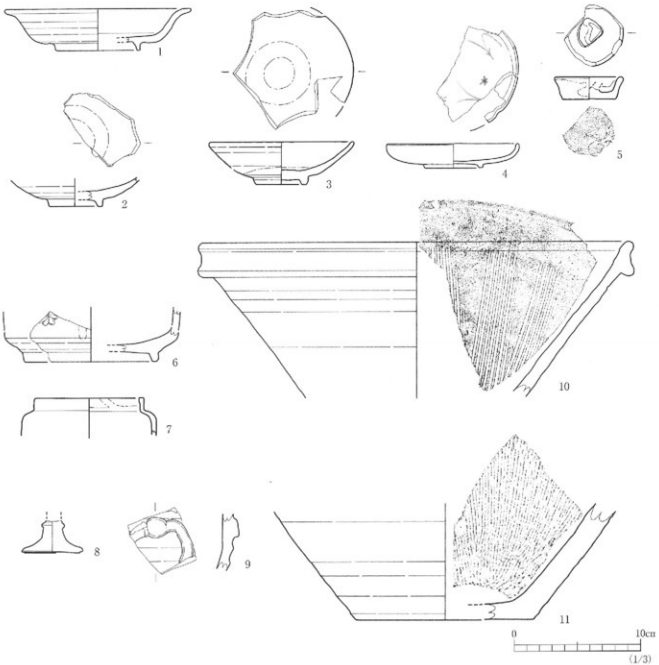
番号	遺物番号	区	遺構・層位	生産地	器 種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	釉薬・文様等	備 考	写真
8	34	2	Ⅱ a	肥前	碗	17c後	(104)	46	68	白釉	白生地土の設け都け	52
9	42	2	Ⅱ a	肥前	碗	17c後	(110)	(46)	64	白釉	白生地土の設け都け	53
10	51	2	Ⅱ a	肥前	碗	17c末～18c初	(96)	(48)	62	鉄絵松文碗	京焼風陶器	54
11	53	2	Ⅱ a	肥前	碗	17c末～18c初	(108)	－	(62)	鉄絵松文碗？	京焼風陶器	56
12	50	2	Ⅱ a	大堀相馬	小杯	18c	－	(24)	(27)	白濁釉		56
13	279	2	Ⅱ a	大堀相馬	鉢深形碗	18c	－	(40)	(33)	灰釉 鉄釉 片身替り 逆しぶけ 渕け分け		57



第53図　第21次調査1区出土陶器（S=1/3）

第28表　第21次調査1区出土陶器観察表

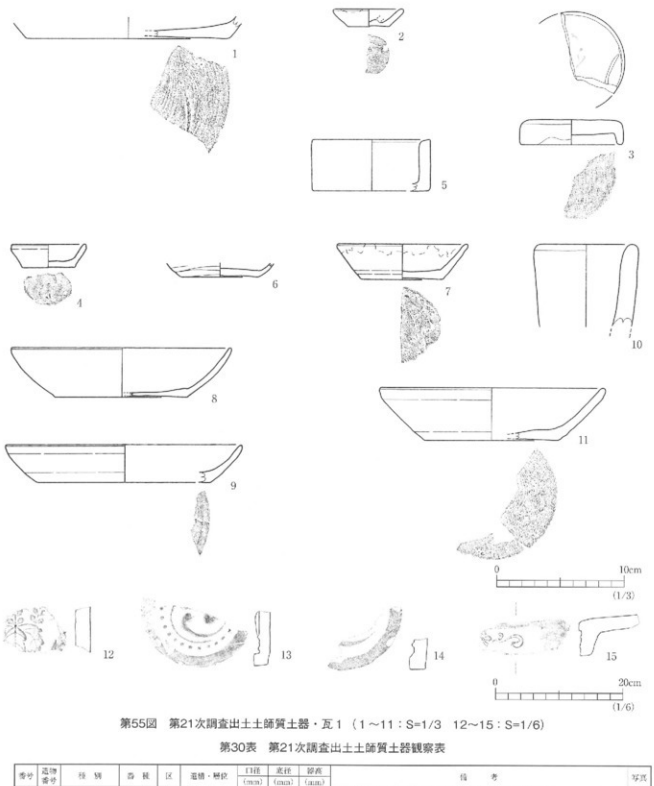
番号	遺物番号	区	遺構・層位	生産地	器種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	特徴・文様等	備考	写真
1	265	1	I	大堀相馬	鉢	18c	–	(46)	(35)	灰釉	貫入有	28
2	262	1	I	堺産	鉢	17c後	–	94	(27)	灰釉鉄絵	高台が高い	29
3	431	1	KS-693整地土a	堺産	鉢	18c	–	(52)	(30)	灰釉		30
4	328	1	I	大堀相馬	擂鉢底	19c前～中	(140)	(52)	41	白海鼠釉鉄絵		31
5	328	1	I	大堀相馬	小杯	18c？	(68)	26	36		貫入有	32
6	323	1	I	大堀相馬	小杯	18c後～19c前	(56)	(28)	30	白海鼠		33
7	311	1	I	大堀相馬	小杯	18c後～19c前	–	24	(30)	白海鼠		34
8	263	1	I	–	小杯	18c後～19c前	–	22	(22)		体部に厚い釉有	35
9	323	1	I	大堀相馬	小杯	18c後～19c前	–	(28)	(18)	灰釉		36
10	263	1	I	大堀相馬	小杯	18c後～19c前		26	(21)	白海鼠		37
11	260	1	I	小野相馬	大皿	18c後	(255)		(36)	刷毛調青色釉（灰釉系）	見込部の目跡群ぎか	38
12	322	1	I	小野相馬	大皿	18c後	(256)	–	(33)	刷毛調青色釉（灰釉系）		39
13	323	1	I	小野相馬	大皿	18c後	–	(100)	(32)	刷毛調青色釉（灰釉系）	見込部の目跡群ぎか	40
14	263	1	I	大堀相馬	仏飯器	18c	–	57	(34)	灰釉		41
15	259	1	I	大堀相馬	土瓶	19c前	(70)	–	(28)	白海鼠	貫入有	42
16	311	1	I	大堀相馬	甲蓋	19c前	(44)	–	(26)	鉄絵（鉢類）		43
17	175	1	I	–	小野焼	19c前	(110)	–	(57)	鉄釉		44
18	454	1	I	常滑か	壺		–	–	–			46
19	418	1	II	瀬戸	碗類	18c～19c	–	(166)	(83)	鉄釉		45



第54図　第21次調査２区出土陶器２（S=1/3）

第29表　第21次調査２区出土陶器２観察表

番号	遺物番号	区	遺構・層位	生産地	器種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	釉薬・文様等	備考	写真
1	495	2	Ⅱ	瀬戸美濃	端反鉢	17c	144	66	33	長石釉		61
2	111	2	Ⅱa	肥前	鉢	17c後～18c前	－	(42)	(23)	青磁釉　内面灰緑釉　外面灰釉か？	見込蛇の目釉剥ぎ	62
3	8	2	Ⅱa	肥前	鉢	17c後～18c前	(114)	40	34	青磁釉　内面灰緑釉　外面灰釉か？	見込蛇の目釉剥ぎ	63
4	503	2	Ⅱ	大堀相馬	端荷鉢	19c前	(104)	(46)	19	灰釉鉄絵（松魚文？）		64
5	475	2	Ⅱ	岸宮系	瓶明鉢	17c	(54)	(40)	18	鉄釉	底部に窯道具痕　回転糸切り	66
6	519	2	Ⅰ	不明	印花文鉢	19c？	－	(106)	(43)	鉄釉　全面施釉（掛付も）		67
7	513	2	Ⅱ	瀬戸美濃	汁注ぎ？	19c前	(85)	－	(30)	灰釉　内外面施釉		68
8	484	2	Ⅱ	大堀相馬	仏飯器	18c	－	48	(26)	灰釉	底部器粘	69
9	32	2	Ⅱa	不明	耳付き花生	近世	－	－	(44)	鉄釉		70
10	16	2	Ⅱ中	不明	福鉢	18c前	(340)	－	(123)	鉄釉	櫛目８条単位　外面窯道具痕	65
11	529	2	Ⅰ	瓶	福鉢	19c前	－	(138)	(92)	鉄釉		74



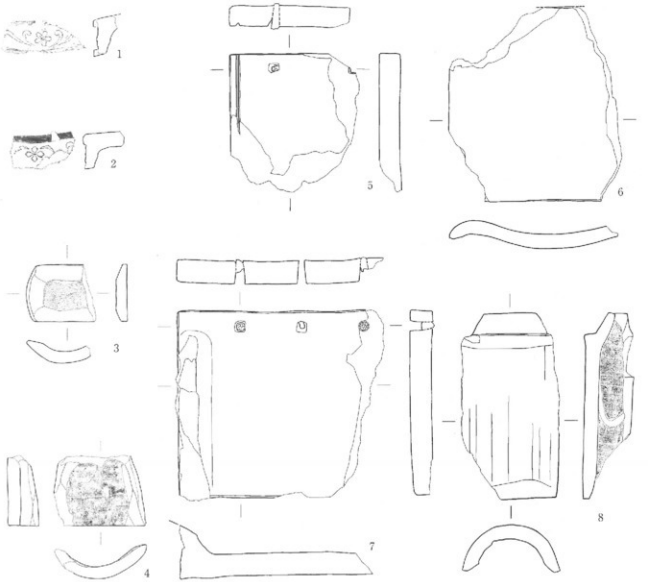
第55図　第21次調査出土土師質土器・瓦１（１～11：S=1/3　12～15：S=1/6）

第30表　第21次調査出土土師質土器観察表

番号	遺物番号	種別	器種	区	遺構・層位	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	備考	写真
1	260	土師質土器	燈明皿	1	I	－	(160)	(17)	内面見込一部に油煙付着　内外面ロクロナデ　底部回転糸切り	76
2	264	土師質土器	燈明皿	1	I	(56)	(30)	14	油煙付着　芯受有　内外面ロクロナデ　底面回転糸切り	77
3	446	土師質土器	皿	1	II	(80)	－	20	内面有自然　外面甲部黒斑有(煤状態痕跡か)	78
4	49	土師質土器	燈明皿	2	IIa	(98)	(42)	19	内外面ロクロナデ　油煙付着　底面回転糸切り	79
5	333	土師質土器	鉢	1	I	(92)	(90)	41	壁押し成形か　内面ミガキ　外面ナデ	80
6	45	土師質土器	皿	2	IIa	－	62	(11)	ロクロ成形か　外面底面ミガキ	81
7	39	土師質土器	燈明皿	2	IIa	(102)	(64)	28	口唇部に油煙付着　内外面ロクロナデ　底部糸切り	82
8	17	土師質土器	皿	2	IIa	(172)	(104)	30	ロクロ形成　内外面ミガキ	83
9	33	土師質土器	皿	2	KS-06E	(184)	(130)	30	内外面ロクロナデ　底面回転糸切り	84
10	372	土師質土器	底部片	2	IIa	(80)	－	(65)	粘土型巻き付けか？　内面強い弱の圧痕か？17c～18c	86
11	88	土師質土器	皿	2	KS-06E上層	(175)	(104)	42	内外面ロクロナデ　底面回転糸切り	85

第31表　第21次調査出土瓦１観察表

番号	遺物番号	種類	区	遺構・層位	文様	計測値 (mm)	重量(g)	備考	写真
12	343	軒丸瓦	1	I	桐	瓦当径 (104)　周縁幅20.1	202.9		89
13	175	軒丸瓦	1	II	連文一巴	瓦当径 (166)　周縁幅19　珠径7	367.5		89
14	11	軒丸瓦	1	II	三巴	瓦当径 (146)　周縁幅21	245.2		90
15	668	軒平瓦	－	表採	均整	瓦当幅 (147)	434		92



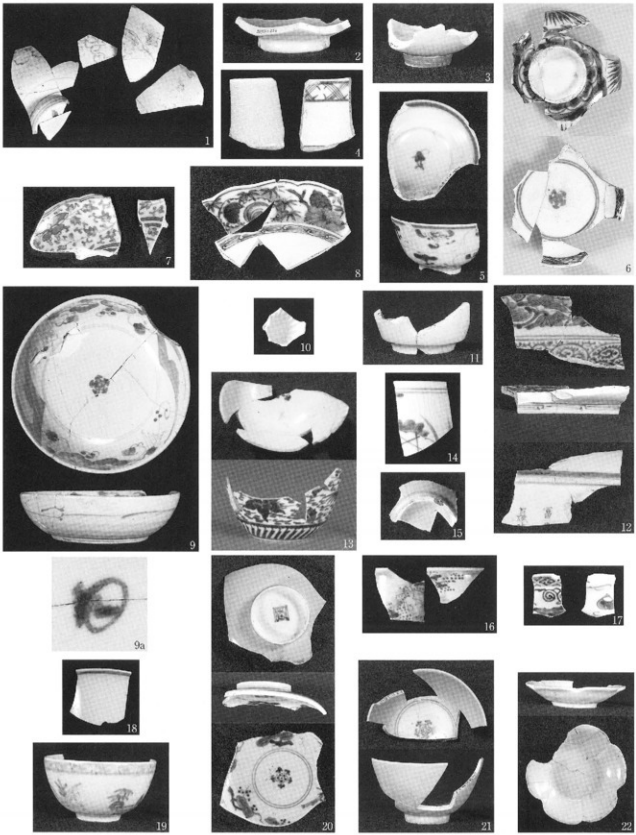
第56図　第21次調査出土瓦２・金属製品（1～8：S=1/6　9～11：S=1/1　12：S=1/2）

第32表　第21次調査出土瓦２観察表

番号	遺物番号	種類	区	遺構・層位	文様	計測値（cm）	重量（g）	備考	写真
1	292	行平瓦	1	I	腹	瓦当幅（138）	191.4		92
2	310	行平瓦	2	II	正面　頭部	瓦当幅（124）	332.2		93
3	298	行平瓦	1	I	－	全長（91）　厚さ16	116.3		96
4	299	輪違い	1	II	－	全長（113）　厚さ20	457.5		98
5	4	平瓦	1	I	－	厚さ34	1960	水煮　釘痕有	99
6	191	桟瓦	1	II	－	全長308　厚さ21	2800		100
7	197	軒平瓦	1	II	－	全長（305）　厚さ35	8000	釘残存	101
8	121	丸瓦	1	KS-592埋土4	－	全長298　厚さ21	1900		105

第33表　第21次調査出土金属製品観察表

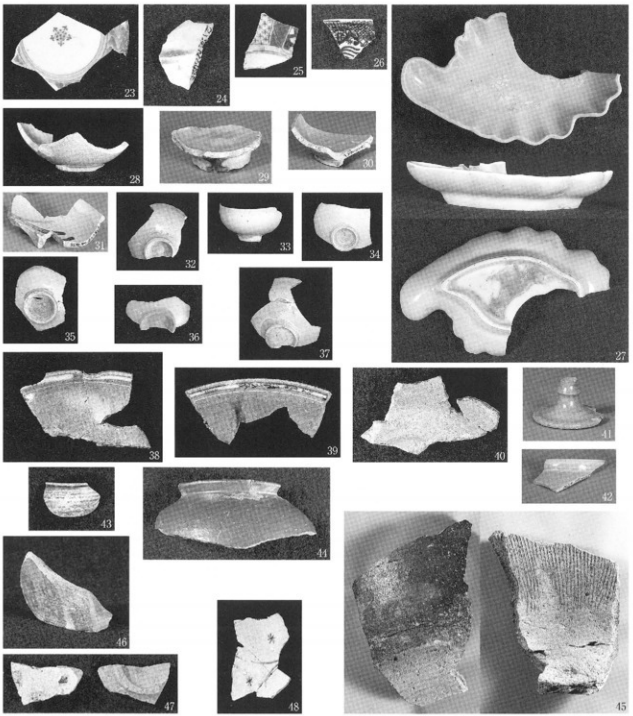
番号	遺物番号	種類	区	遺構・層位	法量（mm）	重量（g）	備考	写真
9	7	古銭	1	I	全長17　幅9	4.41	一分金（寛保か）	107
10	118	古銭	2	IIa	全長15　幅8	2.34	一分金（宝永・銀字　一分）	108
11	31	古銭	2	IIa	外径25.0　穿径5.7	2.33	寛永通宝（古寛永）	109
12	100	鞘管（軍看）	2	IIa	全長（24）　火熨斗14	2.61		110



第57図　第21次調査出土磁器１（S=1/3　9a：S=1/1）

第34表　第21次調査出土磁器１観察表

写真	遺物番号	区	遺構・層位	粉　類	生産地	器　種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	文　様　等	備　　考
16	394	1	1	染付	肥前	小坏	17c後～18c前	－	－	－	雅文	
17	106	1	KS-593整地土c	染付	肥前	鉢	18c後か	－	－	－	四方神文　飛雲など	



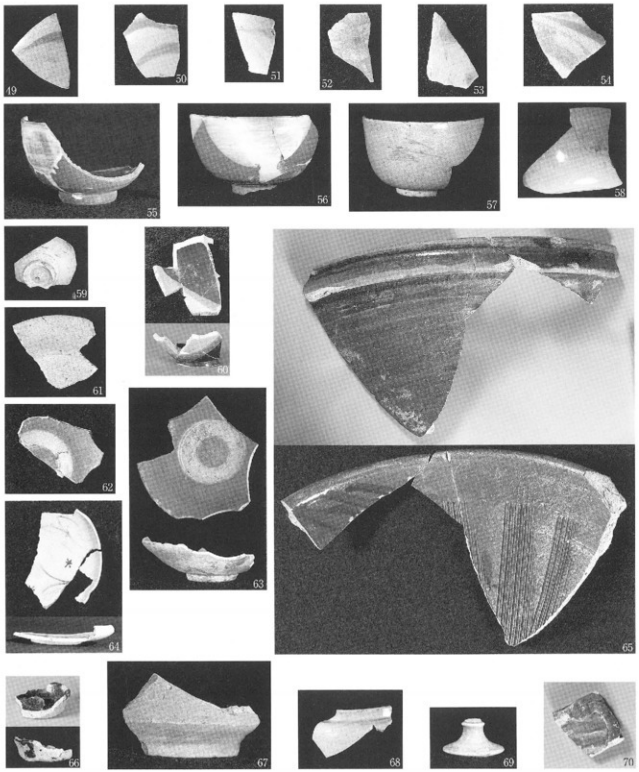
第58図　第21次調査出土磁器２・陶器１（S=1/3　24：S=1/1）

第35表　第21次調査出土磁器２観察表

写真	遺物番号	区	遺構・層位	種類	年産地	器種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	文様等	備考
24	485	2	Ⅱ	色絵	肥前	入皿か？	17c～18c	－	－	－		
25	551	2	Ⅱ	染付	肥前	広東碗	18c末～19c前	－	－	－	蛸唐の文様有り	焼継ぎ
26	585	2	1	染付	ヨーロッパ	カップ	19c後	－	－	－	幾何模様	転写指導

第36表　第21次調査出土陶器１観察表

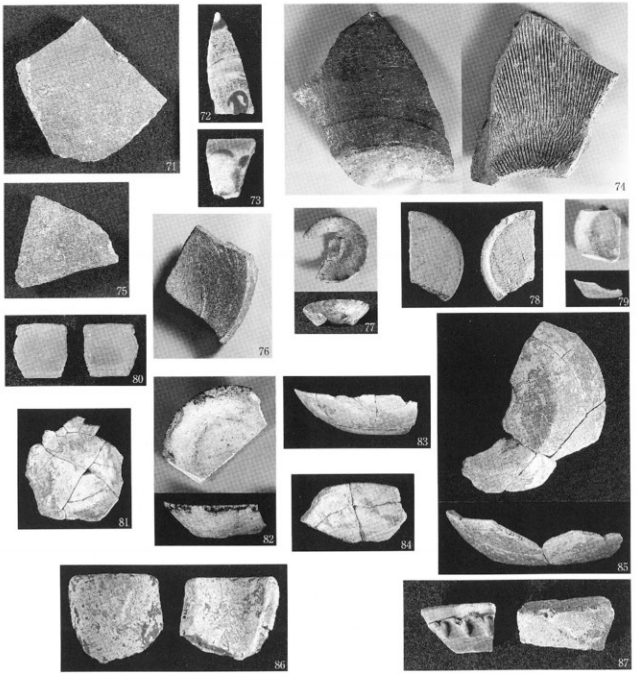
写真	遺物番号	区	遺構・層位	生産地	器種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	釉薬・文様等	備考
47	331	1	1	薩摩	皿	17c初	－	－	－	飴釉 鉄絵	見込に目跡　胎土目　灰色の粉土
48	138	1	1	大堀相馬	皿	19c前	－	－	－	灰釉文 鉄絵	



第59図　第21次調査出土陶器２（S=1/3　49～52：S=1/2　53・54：S=1/1）

第37表　第21次調査出土陶器２観察表

写真	遺物番号	区	遺構・層位	生産地	器種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	釉薬・文様等	備考
49	271	I	II	京・信楽	碗	18c	－	－	－	色絵草文	
50	411	I	I	京・信楽	碗	18c	－	－	－	色絵草文	
51	323	I	I	京・信楽	碗	18c	－	－	－	色絵草文	
52	323	I	I	京・信楽	碗	18c	－	－	－	色絵草文	
53	140	I	I	京・信楽	碗	18c	－	－	－	色絵花文	
54	421	I	I	京・信楽	碗	18c	－	－	－	色絵花文	



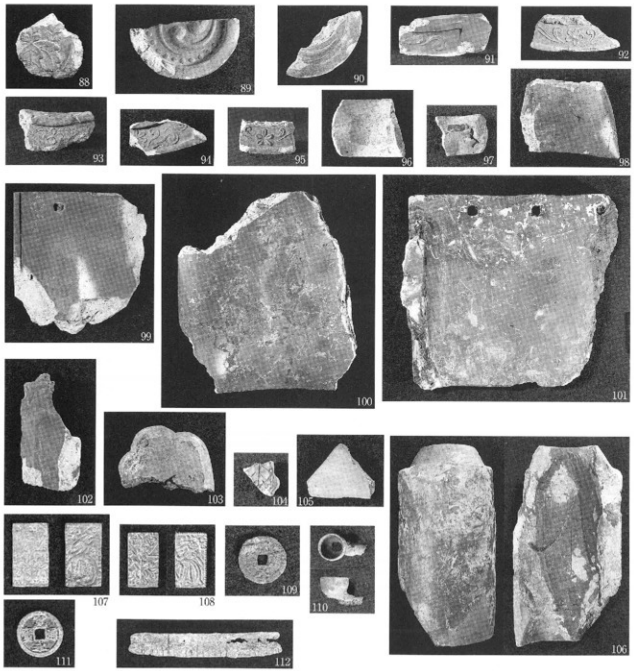
第60図　第21次調査出土陶器３・土師質土器・瓦質土器（S=1/3　72・73：S=1/1）

第38表　第21次調査出土陶器３観察表

写真	遺物番号	区	遺構・層位	生産地	器種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	釉薬・文様等	備考
71	430	1	Ⅱ	不明	大薬	江戸時代	－	－	－		焼締陶器
75	430	1	Ⅱ	不明	大薬	江戸時代	－	－	－		焼締陶器
72	513	2	Ⅱ	京・信楽	碗	18c	－	－	－	色絵	
73	306	2	KS-624	京・信楽	碗	18c	－	－	－	色絵	

第39表　第21次調査出土瓦質土器観察表

写真	遺物番号	種別	器種	区	遺構・層位	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	備考
87	516	瓦質土器	火鉢	2	Ⅰ	－	－	－	江戸時代
87	516	瓦質土器	火鉢	2	Ⅰ	－	－	－	江戸時代



第61図　第21次調査出土瓦（S=1/6）・金属製品（S=1/2　107・108：S=1/1）

第40表　第21次調査出土瓦観察表

写真	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	文様	計測値（mm）	重量（g）	備　考
94	353	軒平瓦	2	Ⅱ	菊花		123	
95	541	軒平瓦	2	Ⅱa	稲穂		179.1	
97	64	四戸瓦	1	Ⅰ	－	長さ90　厚（113）	213.4	
102	219	伏間瓦	1	Ⅰ	－		343.4	
103	286	胸巴	1	Ⅱ	－		940.9	
104	81	飾り瓦	1	Ⅰ	不明	長さ（59）　幅（51）	50.3	
105	193	その他	1	Ⅱ	－		155	

第41表　第21次調査出土金属製品観察表

写真	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　量（mm）	重量（g）	備　考
111	2	古銭	1	Ⅰ	外径24　厚径5.2	3.34	寛永通宝（古寛永）
112	399	金尺	1	KS-593整地土ｶ	長さ（82）　幅13	3.74	

5. まとめ

第21次調査では、以下①～⑥の成果が得られた。

① 1区の調査ではKS-593段切遺構を検出した。段切遺構の造成面からKS-594溝跡やKS-595土坑が検出され、出土遺物などから江戸時代の可能性が高い。宮城県図書館に所蔵されている「仙台藩封内神社仏閣等作事方役所修繕ニ属スル場所調」の「酒蔵」部分に三棟の建物と井戸が描かれている（第40図 絵図からみた造酒屋敷参照）。上から主屋、作業場、米蔵と考えられる。今回の調査成果から段切遺構は造酒屋敷の主屋（梶森家の住宅）と考えられる建物に合うように平場を造成したと推測される。南部で確認された段差は2区のある南側に続いており、作業場や米蔵は段の上面に建てられていたと考えられる。段切遺構の造成面については、次年度の調査で主屋と考えられる建物跡の確認と併せて進めていく予定である。

② 段切遺構の造成面に複数の整地層（調査区北部で花崗岩片を数いた状態で検出した整地土aや調査区南部で炭が堆積した整地土b）を確認した。明治時代以降、建物が解体された後も整地土aの上面で検出したKS-589土手跡やKS-590溝跡を構築しながら使用されたと考えられる。また、KS-592溝跡は2時期の掘り込みが確認した。整地土b上面で検出した古い段階の溝は調査区北部の土手や溝と構築されたのが同時期の可能性がある。さらに段切遺構を埋め立てた後に新しい段階の溝を掘り直して再利用されたことが考えられる。

③ 2区の調査ではⅡ層上面で礎石、炉跡、集石遺構、木樋などを検出した。調査区北部から中央部にかけての一連の遺構群については、位置的に作業場（酒の醸造を行う建物）に関わる遺構の可能性があると推測される。KS-597～600の礎石やKS-618・624などの柱穴は建物基礎の一部である。KS-602・603炉跡は酒の原料を加工するために用いられた可能性がある。KS-604集石遺構やKS-606木樋は作業に伴う給排水に関わる遺構と考えられる。KS-604から北側にかけて陶磁器等の遺物の出土が多いのは建物の内部である可能性を示す。この遺構群には切り合い関係があるため、複数の時期的な変遷があることが考えられる。Ⅲ層上面からは19世紀以降の遺物がほとんど見られず、Ⅲ層の一部は近代以降に削平を受けたと考えられる。

④ 2区南部で検出したKS-601礎石は位置的に米蔵（酒の原料である米を貯蔵する建物）に関わる遺構の可能性があると推測される。

⑤ 1区のⅣ層上面からKS-596を検出し、北側のⅣ層上面では17世紀後半以降の肥前陶器青緑釉皿片1点が出土している。段切遺構の検出面では18世紀後半の肥前磁器染付鉢片1点が出土した。このことからⅣ層は段切遺構よりも古い時期の生活面であると考えられる。また、2区南部で深掘りを行ったトレンチにおいて、Ⅲ層下層に西側が高く、東側に傾斜する段差を確認した。これについても下層にⅢ層上面検出の遺構よりも古い時期の生活面があった可能性が考えられる。

⑥ 遺物としては、近世の整地層と考えられるⅢ層上面から18世紀代を中心とする磁器、陶器の他、土師質土器、瓦質土器、瓦、古銭などが出土した。

Ⅵ　第22次調査

1. 調査の経緯

第22次調査として本丸北西壁石垣E面の石垣測量を実施した。昨年度実施した第19次調査のC面及びD面の北側で詰門方向に延びるE面は、詰門跡から酉門跡にかけて位置する石垣の中で最も広い立面積を持つ面である。

平成20年12月10日から12月19日にかけて石垣の除草作業を行った。目立つ草木の除去のみのため、石材表面や天端には苔や草が残り、形状が不明瞭な部分もある。測量はレーザーを用い、12月24日と１月12日に基準点設置、12月24日と１月21日に測量とオルソ画像用の写真撮影を実施した。レーザーは、地上からのみ照射した。なお、石垣の観察には仙台城跡調査指導委員である北垣聰一郎氏のご教示を得た。

第62図　石垣測量調査位置図（◯は測量範囲）

2. 測量結果の概要

E面

・天端の長さ：約61.1m、下端の長さ：約60.8m、D・E面入隅部：約7.25m、E・F面出隅部：約5.98m。

・E・F面出隅部から南側に約20m付近までは切石を使った横目地の通る布積で、勾配は63～64度である。E・F面出隅部は算木積みで、勾配は約73度であり、天端付近は約75度である。

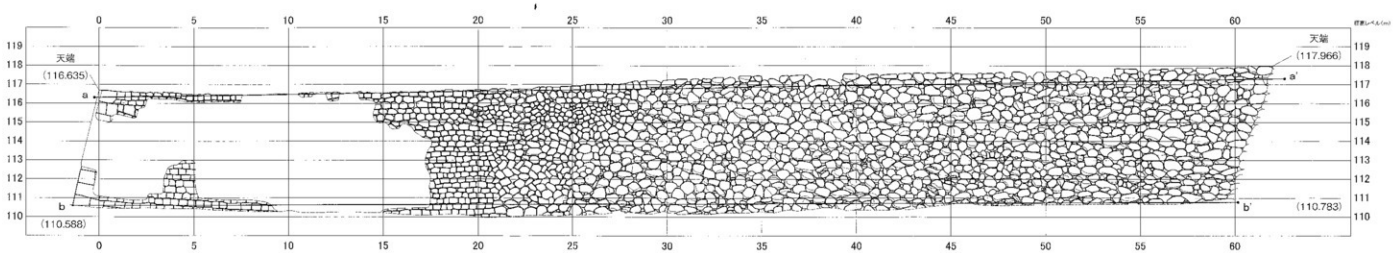
第63図　石垣測量調査位置詳細図

E・F面出隅部から20～30m付近で落とし積みによる積み直しを行った箇所がある。昭和14年（1939）頃の「宮城縣護国神社御造営敷地図」（宮城県公文書館蔵）にE面の一部が崩れた状況が描かれており、その後の石垣修復箇所にあたると考えられる。25～30m付近からD面にかけては自然石を使った野面積みで、勾配は60～70度である。

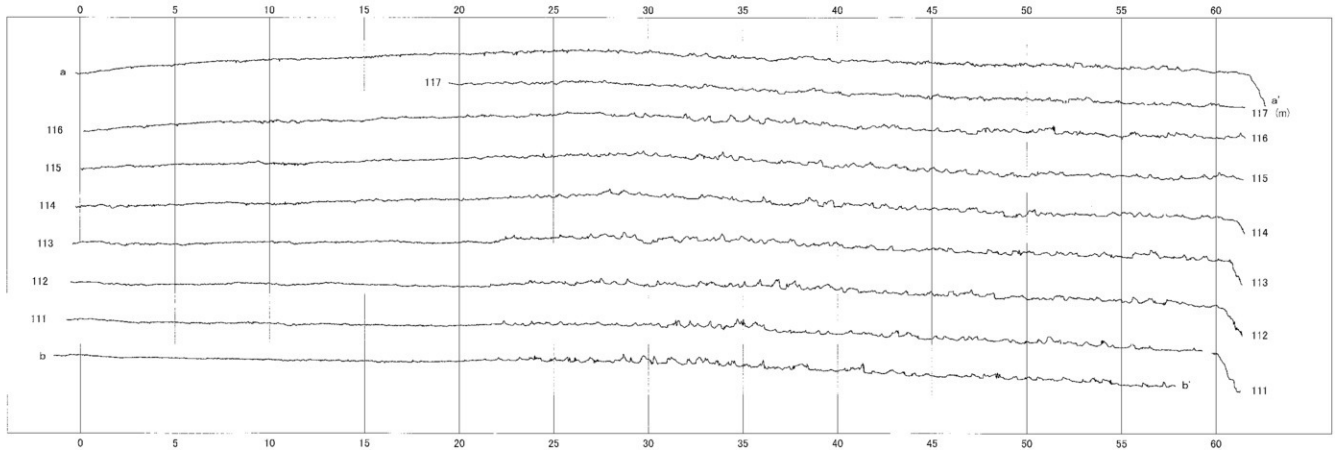
・35m付近からD面にかけての下層部分（110～113m）はノリ勾配であり、築石の長軸が正面に向いて水平化していることから、古い時期の石垣である可能性が考えられる。中・上層部分（113～118m）では縦石積みが２箇所で見られ、積み直しと考えられる。また、下層部分よりも上部が内傾しており、輪取りではない。

・中層（113m付近）より上の石垣には孕み出しと陥没が見られる。

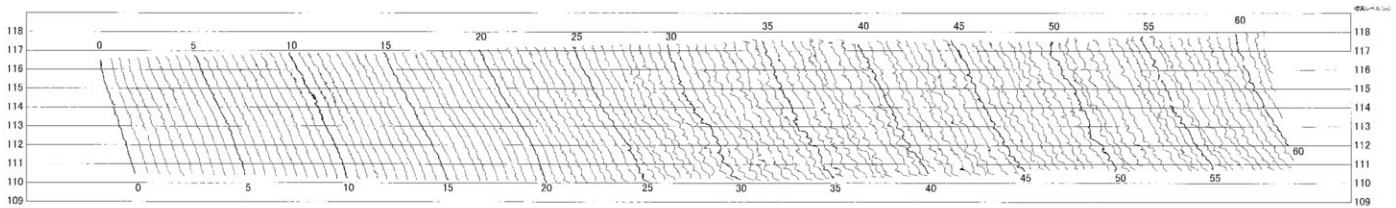
・D・E面入隅部付近の天端の高さが約７mあるが、E・F出隅部の天端は5.98mと布積の石垣の方が天端が低くなっている。



立面図



横断図



縦断図

0 1 2 3 4 5m

第64図　仙台城本丸跡北西壁石垣E面立面図・横縦断図　S=1/200

E面　全景（北から）

E面　全景（南西から）

E・F面　出隅部（北から）

D・E面　入隅部（西から）

E面　切石積み・野面積み（南西から）

E面　切石積み・野面積み（西から）

E面　築石脱落状況（西から）

レーザー測量風景（南西から）

第65図

Ⅶ　総括

本年度は仙台城跡遺構確認調査の第２期５ヵ年計画の３年目であり、本丸大広間内部南半の遺構確認調査（第20次）、造酒屋敷跡の遺構確認調査（第21次）、本丸北西辈の石垣測量調査（第22次）を行った。

これまで大広間跡の調査では、その位置や規模、柱間（６尺５寸基準）等を確認している。

昨年度の第17次調査は、大広間跡内部北半における遺構確認を目的として実施した。調査区は「上々段の間」、「上段の間」、「孔雀の間」、「檜の間」などにあたる場所である。大広間にかかわる礎石跡および礎石を新たに17基検出した。検出された礎石跡について、礎石間の距離を測定した結果、「６尺５寸」が柱間寸法の基準となっていることを再確認した。また、調査成果と「御本丸大広間地絵図」が、礎石跡の検出位置と絵図が示している柱位置が概ね一致していることが検証された。大広間の整地層下に砂礫を主体とする層を検出した。大広間に先行する建物に伴う石敷き遺構もしくは、大広間建築時の整地に関わる地業かが検討課題となった。

今年度の第20次調査は、大広間跡内部南半における遺構確認を目的として実施した。今回の調査区は「裏上段の間」から「鶴の間」、「鷹の間」、「虎の間」にあたる場所である。大広間にかかわる礎石および礎石跡を新たに45基検出した。そのうち、これまでの調査で確認された礎石跡より小さい東柱の礎石および礎石跡を21基検出した。大広間の間取りや各部屋の配置を検討する上で重要な成果が得られた。市有地外である「鹿の間」部分を除き、大広間のほぼ全容を調査したことになり、８次にわたる大広間跡の調査は一応の終了となる。今後は、必要に応じて補足調査等を行い、これまでの調査成果に基づいて大広間の構造などについて検討する予定である。昨年度に引き続き、大広間の整地層下に砂礫を主体とする層を検出した。大広間跡の外側で検出された石敷き遺構とは特徴が異なり、雨落ち溝跡の外側にまで広がらないことから、大広間の中でしか見られない層であると考えられる。ただし、下層の調査が十分ではないことから、大広間に先行する建物に伴う石敷き遺構もしくは、大広間建築時の整地に関わる地業の両面の可能性を考えておく。整地層下において、礎石と考えられる遺構が１基検出されていることから、大広間に先行する遺構群については今後とも検討していく必要がある。

第21次調査は、造酒屋敷跡（１区・２区）に関連する遺構の確認を目的として実施した。１区では段切遺構を検出した。今回の調査成果から段切遺構は、造酒屋敷の主屋と考えられる建物に合うように平場を造成したと推測される。南部で確認された段差は２区のある南側に続いており、作業場や米蔵は段の上面に建てられていたと考えられる。段切遺構の造成面に複数の整地層を確認した。明治以降に建物が解体された後も土手や溝を構築しながら使用されたと考えられる。主屋の位置や規模については、次年度以降の調査で確認する必要がある。２区では礎石、炉跡、集石遺構、木樋などを検出した。一連の遺構群については、作業場に関わる遺構であると推測される。この遺構群には切り合い関係があるため、複数の時期的な変遷があることが考えられる。調査区南部で検出したKS-601礎石は米蔵に関わる遺構であると推測される。作業場や米蔵の規模や配置については今後の検討課題である。

第22次調査は、本丸北西壁石垣E面で石垣測量調査を実施した。本丸詰門から西門にかけて石垣が残されており、その観察によって仙台城本丸跡における石積み技法の変遷を解明し得ると考えられる。今後も、石垣の現状の記録化を進めていくことが必要である。

参考文献

小倉強　「松島瑞巌寺と仙台城大広間」『仙台郷土研究』第２巻　第12号昭和７年（1932）
小林清治編　仙台城と仙台領の城・要害（日本城郭史研究叢書２）』　昭和57年（1982）
小林清治　『伊達政宗』　昭和34年（1959）
佐藤巧　「仙台城居館の変遷とその構成・機能」『近世武士住宅』　昭和54年（1979）
西和夫　『建築技術史の謎を解く（続・工匠たちの知恵と工夫）』　昭和61年（1986）
西和夫　『図解古建築入門』　平成３年（1991）
仙台市教育委員会　『仙台城』　昭和42年（1967）
仙台市教育委員会　『仙台城二ノ丸跡』　昭和60年（1985）
仙台市教育委員会　『仙台城址の自然』　平成２年（1990）
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　『年報１～20』　昭和60～平成18年（1985～2006）
『仙台城跡石垣修復等調査指導委員会第１～９回資料』　平成９～12年（1997～2000）
仙台市建設局　『仙台城石垣修復工事専門委員会　第１～15回資料』　平成13～16年（2001～2004）
仙台市教育委員会　『仙台城跡調査指導委員会　第１～22回資料』　平成13～21年（2001～2009）
仙台市教育委員会　『仙台城跡１～８』　平成13年～20年（2001～2008）
仙台市教育委員会　『若林城跡』　平成20年（2008）
『奥州仙台城絵図』　正保２・３年（1645・1646）（斎藤報恩会蔵）
『仙台城下絵図』　寛文４年（1664）（宮城県図書館蔵）
『仙台城及び江戸上屋敷年要建物変絵図』（仙台市博物館蔵、千田家資料）
『御本丸大広間地絵図』（斎藤報恩会蔵）
『青葉城御本丸之図』（仙台市博物館蔵）
『御本丸御家作御絵図』　明治元年（1868）（宮城県図書館蔵）
『仙台城旧御本丸御屋形図』　明治26年（1893）遠藤允信追記（仙台市博物館蔵）
『伊達治家記録』（貞山公治家記録）
『仙台古文配』　慶長７年（1602）（伊達家御給主　高梨家文書　平成５年（1993）　所収）
『御本丸拝見覚書』　安永４年（1775）安倍彦右衛門記（仙台市史　昭和４年（1929）　所収）
『仙台藩封内神社仏閣等作事方役所修繕ニ属スル場所調』　寛文～元禄年間（1661～1704）（宮城県図書館蔵）
矢野源蔵　『仙台藩祖尊主実録』　明治32年（1899）
伊達邦宗　『伊達家史叢談巻之五』　大正10年（1921）　復刻版『伊達家史叢談』　今野印刷　平成13年（2001）
第二師団司令部　『仙台城沿革』第二師団司令部　大正15年（1926）
小倉強　『仙台城大広間絵図に就て』（仙台郷土研究　第十二巻第十一号』　仙台郷土研究会　昭和17年（1942）
高倉淳ほか５名　『絵図・地図で見る仙台　第一輯』　今野印刷　平成６年（1994）
仙台市博物館　『仙台城－しろ・まち・ひと－』　平成13年（2001）
吉岡一男ほか６名　絵図・地図で見る仙台　第二輯』　今野印刷　平成17年（2005）
仙台市史編さん委員会　『仙台市史　特別編７　城館』　仙台市　平成18年（2006）
平井聖・鈴木嘉雄　『日本建築の観賞基礎知識－書院造から現代住宅まで－』　平成９年（1997）
大和智　『城と御殿（日本の美術　第405号）』　平成12年（2000）
佐藤理　『昭和・平成の大修復全記録　桂離宮の建築』　平成11年（1999）
早坂芳雄　『宮城県酒造史　別篇』宮城県酒造組合　昭和37年（1962）

報告書抄録

ふりがな	せんだいじょうあと
書名	仙台城跡 9
副書名	－平成20年度調査報告書－
巻次	9
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第348集
編著者名	佐藤　洋・在川宏志
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980－8671　仙台市青葉区国分町３丁目７－１　TEL 022－214－8544
発行年月日	2009年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	調査地点	コード 市町村	コード 遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
			04100	01033			
			北緯	東経			
仙台城跡（せんだいじょうあと）	宮城県（みやぎけん）仙台市（せんだいし）青葉区（あおばく）川内地内（かわうちちない）	大広間跡（８次）［第20次調査］	38°15′12″	140°51′22″	2008.5.12 ～ 2008.8.1	248㎡	重要遺跡の遺構確認調査
		造酒屋敷跡（１次）［第21次調査］	38°15′17″	140°51′26″	2008.8.26 ～ 2008.10.29	160㎡	
		本丸北西壁石垣（２次）［第22次調査］	38°15′12″	140°51′18″	2008.12.24 ～ 2009.1.21	448㎡（立面）	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仙台城跡	城館跡	江戸時代	礎石跡・雨落ち溝跡、炉跡、集石遺構	陶磁器・瓦・金属製品	第20次調査では、大広間跡内部の礎石跡を確認し、大広間の面取りや各部屋の配置が明らかになった。また大広間に先行すると考えられる遺構を検出した。 第21次調査では、造酒屋敷に伴うと考えられる礎石や溝跡、炉跡、集石遺構などを検出した。

仙台市文化財調査報告書第348集

仙台城跡 9

— 平成20年度 調査報告書 —

2009年3月

発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目7－1
文化財課 022(214)8544

印刷 株式会社 東北プリント
仙台市青葉区立町24－24
TEL 263－1166